

2016 こです HOKKAIDO

Collected papers
Domestic Science
Studies

北海道高等学校長協会家庭部会

2016こです「HOKKAIDO」

【平成27年度版】

目 次

○ 巻 頭 挨拶	北海道高等学校長協会家庭部会長	北海道江別高等学校長	小 松 芳 幸	1
○ これからの家庭科教育の展望～「愛される」家庭科を目指して～	北海道教育庁檜山教育局教育支援課高等学校教育指導班主査		佐 紺 摂 子 様	2
I 平成27年度北海道高等学校長協会家庭部会活動報告				
◆家庭部会の組織・事業内容等	北海道高等学校長協会家庭部会長	北海道江別高等学校長	小 松 芳 幸	3
◆全国高等学校長協会家庭部会総会・研究協議会参加報告 及び北海道地区校長会終了報告	北海道高等学校長協会家庭部会長	北海道江別高等学校長	小 松 芳 幸	5
◆全国福祉高等学校長会第21回総会・研究協議会参加報告	全国福祉高等学校長会理事	北海道置戸高等学校長	花 田 祐 治	7
◆北海道高等学校家庭科教育研究協議会企画委員会報告				
1 第64回北海道高等学校家庭科教育研究協議会を終えて	北海道高等学校家庭科教育研究協議会会長	北海道洞爺高等学校長	佐々木 淑 子	8
2 オリエンテーション	北海道高等学校長協会家庭部会副部会長	北海道洞爺高等学校長	佐々木 淑 子	10
3 研究発表				
□提言1 テーマ アクティブラーニングを取り入れ、思考力と問題解決能力の向上を目指した授業実践	発表者	北海道函館中部高等学校教諭	宋 戸 加奈子	12
□提言2 テーマ 『高校生カフェ』の運営を通じてはぐくむ「生きる力」の育成	発表者	北海道真狩高等学校教諭	前 田 義 江	13
□提言3 テーマ 環境教育から消費者教育への発展を目指す教育課程の編成・実施の工夫と改善 《合同研究》	発表者	北海道美瑛高等学校教諭	森 本 鈴 奈	14
		北海道東川高等学校教諭	高 橋 洋 子	
		北海道富良野緑峰高校教諭	瀧 川 朗 子	
		旭川明成高等学校教諭	米 坂 純 香	
		上富良野高等学校教諭	中 島 崇	
4 分科会報告				
□第1分科会	報告者	北海道足寄高等学校教諭	米 根 順 子	15
□第2分科会	報告者	北海道標津高等学校教諭	山 田 真 代	16
□第3分科会	報告者	北海道遠軽高等学校教諭	橋 本 晶 子	17
5 講 評				
北海道教育庁檜山教育局教育支援課高等学校教育指導班主査			佐 紺 摂 子 様	18
6 グループ別体験研修講座報告				
□A 食育セミナー		清尚学院高等学校教諭	谷 内 春 香	19
□B 住生活セミナー		北海道野幌高等学校教諭	池 田 麻 子	20
□C 家庭経済セミナー		北海道富良野高等学校教諭	岸 本 美 子	20
□D 福祉セミナー		北海道遠軽高等学校教諭	橋 本 晶 子	21
◆北海道高等学校長協会家庭部会調査研究委員会報告				
北海道高等学校長協会家庭部会調査研究委員長		北海道津別高等学校長	井 上 明 子	22

Ⅱ 平成27年度北海道高等学校家庭クラブ連盟活動報告

1 北海道高等学校家庭クラブ連盟の活動について

北海道高等学校家庭クラブ連盟成人会長

北海道江別高等学校長	小 松 芳 幸	3 3
2 第56回全国高等学校家庭クラブ連盟指導者養成講座に参加して		
北海道札幌北高等学校教諭	田 畑 優香里	3 4
3 第63回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会～北海道大会を終えて～		
北海道当別高等学教諭	澤 谷 郁 恵	3 5
4 第63回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会北海道代表出場校として		
□ホームプロジェクトの部	北海道札幌北高等学校教諭	田 畑 優香里 3 6
□学校家庭クラブ活動の部	北海道美唄尚栄高等学校教諭	坂 口 真奈美 3 7
5 第64回北海道高等学校家庭クラブ連盟研究大会・総会を終えて		
北星学園大学附属高等学校教諭	松 田 玲 子	3 8

Ⅲ 平成27年度北海道家庭科技術検定委員会活動報告

1 北海道高等学校家庭科技術検定の実施について

北海道高等学校家庭科技術検定委員会委員長

北海道名寄産業高等学校長	増 田 雅 彦	3 9
2 全国高等学校家庭科技術検定全国専門委員会に参加して		
北海道専門委員	北海道江別高等学校教諭	紀 國 明 子 4 0

Ⅳ その他の家庭科教育・福祉教育等に関する報告

1 第53回北海道高等学校教育研究大会教科別集会家庭部会を終えて

事務局 北海道札幌新川高等学校教諭

柿 澤 小百合	4 1
---------	-----

2 第3回北海道高等学校長協会家庭部会意見・体験発表会を開催して

事務局 北海道江別高等学校教諭

上 野 博 美	4 2
---------	-----

3 北海道高等学校産業教育意見・体験発表大会に参加して

□発表校《家庭科》

北海道三笠高等学校教諭

斎 田 雄 司	4 3
---------	-----

北海道三笠高等学校3年

□発表校《福祉科》

北海道置戸高等学校教諭

稲童丸 玲 奈	4 4
---------	-----

北海道置戸高等学校2年

4 高等学校初任者研修〔一般研修〕に参加して

北海道南茅部高等学校教諭

野 田 敬 子	4 5
---------	-----

5 10年経験者研修〔教科指導等研修Ⅰ・Ⅱ〕に参加して

北海道置戸高等学校教諭

相 馬 良 美	4 6
---------	-----

6 平成27年度北海道立教育研究所「家庭・技術・家庭科教育研修講座」を受講して

北海道滝川工業高等学校教諭

渋 井 美和子	4 7
---------	-----

7 平成27年度産業・情報技術等指導者養成講座を受講して

北海道釧路湖陵高等学校教諭

相 坂 静 香	4 8
---------	-----

8 平成27年度北海道高等学校産業教育実技講座を受講して

北海道砂川高等学校教諭

山 本 昌 枝	4 9
---------	-----

9 平成27年度第16回福祉に関する教科・科目設置校研究協議会を終えて

北海道釧路高等学校長

中 谷 晋 二	5 0
---------	-----

V 各地区（ブロック）家庭科研究科の活動状況

5 1

Ⅵ 特別寄稿

◆「生きる力」育む家庭科教育

北海道当別高等学校長

杉 本 祐 子	5 8
---------	-----

◆ 家庭部会事務局等を担当して～家庭科教育のすばらしさを再認識～

北海道江別高等学校教頭

岩瀬張 幸 子	5 9
---------	-----

○ 編 集 後 記

北海道洞爺高等学校長

佐々木 淑 子	6 0
---------	-----

巻 頭 挨拶

北海道高等学校長協会家庭部会長

(北海道江別高等学校長) 小 松 芳 幸

日頃より、校長協会家庭部会の運営にご支援ご協力をいただき、心よりお礼申し上げます。平成27年度も残すところあとわずかとなりました。お陰様で、道教委、各高等学校並びに関係各位のご支援ご協力をいただき、予定した今年度の諸事業すべてを無事に終了することができました。改めて感謝申し上げます。

全国では別組織となっている家庭クラブ連盟を傘下に入れて活動している本家庭部会にとって、今年度の最大の事業は、昨年7月末に札幌市教育文化会館で開催された「第63回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会」です。13年ぶりに北海道での開催となった本大会には、道内を始め全国各地から1,800名の参加があり、北海道の代表校2校も上位入賞を果すなど、多大な成果を残して終了することができました。北海道教育委員会、高等学校長協会、各高等学校を始め、関係各位のご協力に厚くお礼申し上げます。大会の詳細につきましては、本冊子の別掲載にて報告をさせていただきます。

さて、教育再生実行会議が、昨年の第8次提言を持ってとりあえず終了とされています。これまで出された多くの提言は、いじめ対策など、すでに法的な整備を終えたものもありますが、「教育の力による地方創生」や「教員採用試験の全国共通試験化」など、今後法的整備や検討が必要なもので多岐にわたり様々なものがあります。また、それらの提言を受け、文部省中央教育審議会では、高等学校基礎学力テスト(仮称)や大学入学希望者学力判定テスト(仮称)なども審議中であり、高大接続に直接関係

し、今後の教育課程編成や学校運営に大きな影響を及ぼすであろう教育システムの改革も予定されています。加えて、18歳へ選挙権年齢が引き下げられたことに関連し、中立性が保たれた指導がいかに行われるべきかも大きな課題であると思います。今、教育はまさに激動の中にあって、大きな転換期を迎えようとしています。

一昨年11月に中教審へ諮問がなされた次期学習指導要領への改訂では、「生徒の主体的・協働的な学習と指導方法の充実に向けた方策の検討とその普及」いわゆるアクティブ・ラーニングの研究と実践が昨今キーワードとして取りざたされています。家庭科は従来から実験・実習をとまなう教科として、言語活動の充実を図り、グループ学習や課題研究、実践発表などを積極的に行ってきております。ことさらに、アクティブ・ラーニングということばに惑わされる必要はありませんが、今一度原点に立って、生徒の学びや理解を一層深めるための授業の工夫と改善はいかにあるべきか、謙虚な姿勢で教育活動に臨んでいただきたいと思います。

家庭科教育は、人の一生を横軸に家族、家庭、福祉、衣食住、消費生活から保育、高齢化社会を縦軸にして、生活課題の解決や生活を充実させる能力の育成を目標としており、その守備範囲は膨大で責任も重大です。家庭科の先生方が個々の生徒の一生に関わる指導をしていることに自覚と誇りを持っていただけるよう、本家庭部会は諸活動を推進して参ります。

今後とも家庭部会にご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。巻頭のご挨拶とします。

これからの家庭科教育の展望

～「愛される」家庭科を目指して～

北海道教育庁檜山教育局教育支援課高等学校教育指導班 主査 佐 紺 撰 子

北海道新幹線開業を迎え、北海道への国民の関心も高まるなど、本道にとって明るい話題はあるものの、今後の我が国においては生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会や職業の在り方そのものも大きく変化する可能性がある」と指摘されています。

こうした中、平成26年11月の中央教育審議会の諮問や同年12月の中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」において、「課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学習・指導方法であるアクティブ・ラーニングの充実」が求められています。学ぶことと社会とのつながりを意識し、「何を教えるか」という知識の質・量の改善に加え、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要であり、課題を発見し、その解決に向けた主体的・協働的に学ぶ学習やそのための指導の方法等を充実させていかなければなりません。

さらに、学びの成果として「どのような力が身に付いたか」という視点から、学習評価の在り方についても改善を図ることが重要です。

家庭科は、今後の高等学校教育におけるキーワードとなりそうな「アクティブ・ラーニング」の宝庫です。特に、学習指導要領に明記されているホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動による学びは、まさにアクティブ・ラーニングです。家庭科における実践が他教科にも影響を与えるくらいの気持ちを持って、確実に取り組んでいただきたいと思います。

家庭科でしか学習できないことは何かを考え実践するとともに、他教科との連携にもアンテナを広げ、生徒の生きる力を育むためにしっかりと取り組んでいただきたいと思いますと考えております。もちろん、その前提として知識と技術の定着を図る授業づくりや、そのための評価計画の作成、指導と評価の一体化を図る「評価の工夫」が大切です。

さて、消費者教育においては、選挙権年齢の18歳への引下げ、さらに成人年齢の引下げが議論されていることを踏まえ、高等学校卒業時まで、契約に関する基本的な考え方や契約に伴う責任、消費者市民社会の形成に参画することの重要性を理解させること、社会において、一消費者として主体的に判断し、責任を持って行動できるような能力を育むことが必要です。

道教委では、これまで北海道消費者協会等が開催していた「消費者教育支援セミナー」を道教委との共催とし、消費者教育の充実を図っていくこととしております。

家庭科は「愛される」教科であると考えます。もっと「愛される」ためには、魅力を理解してもらうことが必要です。この魅力の素を分析し、改善する必要があるのです。そして、ぜひ家庭科で学習していることを可視化し、外部へ発信していただきたいと思います。

先生方におかれましては、これまでも本道の家庭科教育の充実に御尽力いただいていることに深く感謝申し上げますとともに、今後とも、御協力をお願いいたします。

最後に、部会長である江別高等学校の小松芳幸校長先生をはじめ関係各位に、深く御礼を申し上げます、御挨拶といたします。

I 平成27年度家庭部会の報告

北海道高等学校長協会家庭部会の 組織と今年度の事業内容について

北海道高等学校長協会家庭部会長 小 松 芳 幸

(北海道江別高等学校長)

今年度、北海道高等学校長協会家庭部会には、昨年とほぼ同数の190校の加盟をいただきました。加盟並びに各種のご支援ご協力をいただいたことに厚く感謝申し上げます。

今年度の本家庭部会の組織、事業内容等は次の通りとなっています。

■平成27年度 部会の役員構成等

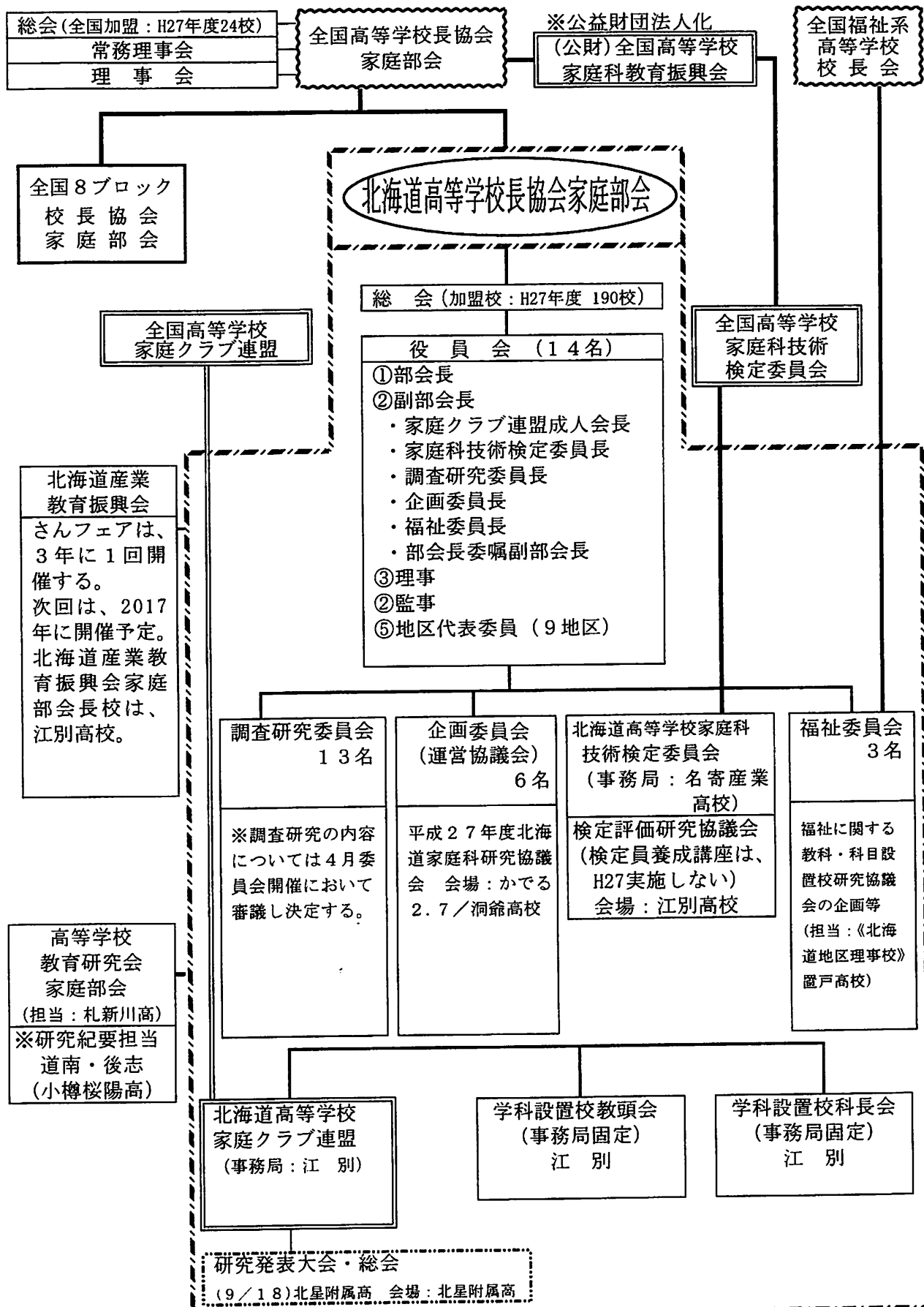
役 職	校長名・学校名	兼務する役職等
部会長	小松 芳幸 江 別	全国部会道代表理事 全国部会常務理事 全国家庭振興会理事 道家庭クラブ成人会長 全国家庭クラブ北海道 ブロック代表
副 部会長	杉本 祐子 当 別	全国部会常務理事 全国家庭振興会評議員 全国家庭クラブ北海道 大会実行委員長
	花田 祐治 置 戸	全国理事 全国福祉部会道理事
	佐々木 淑子 洞 爺	全国理事、道地区委員 企画委員長
	増田 雅彦 名寄産業	全国理事、道地区委員 全国技術検定道理事
	井上 明子 津 別	全国理事、道地区委員 調査研究委員長
監 事	福本直人,札南陵 小路修司,千北陽	道地区委員
理 事	池田延巳,函大妻	道地区委員
	鈴木譲二,江 陵 高瀬雅朗,三 笠	道地区委員

他の	河村英二,倶知安	後志
道地区	西堀隆亮,足 寄	十勝
委員	山本明敏,釧明輝	釧根

■平成27年度 部会の主な事業

月 日	事 業 (会 場)
4/23	家庭科技術検定常任理事会(江別高校)
4/24	第1回家庭部会役員研究協議会(ライファート)
4/30	全国家庭科教育振興会理事会(全国事務局)
5/13	平成27年度家庭部会総会(ライファート)
5/14	全国北海道大会実行委員会(エルブ'ラサ')
"	道家庭クラブ連盟第1回研究協議会(")
5/18	全国福祉校長会第1回理事会(東京)
"	全国家庭部会、常務理事会、理事会(東京)
5/19	全国家庭部会総会、研究協議会 (")
7/23,24	全国家庭クラブ連盟指導者養成講座(")
7/28,29	全国家庭科実践研究大会三重大会(三重)
7/30,31	全国家庭クラブ北海道大会(札幌教文会館)
8/4,5	道家庭科教育研究協議会(かでの2,7)
"	全国家庭部会北海道地区校長会(")
8/6,7	全国家庭科技術検定研究大会(熊本)
8/20,21	福祉に関する科目設置校研究協議会(剣淵)
8/25	第3回家庭部会意見体験発表大会(江別高)
9/18	全道家庭クラブ研究大会、総会(北星札幌)
10/7	全道産業教育意見体験発表大会(札幌工業)
10/15,16	全国家庭部会秋季研究協議会(名古屋)
10/31	第25回全国産業教育フェア-三重大会(三重)
11/1	
1/8	高教研家庭部会(エルブ'ラサ')
2/5	全国常務理事会、理事会(東京)
2/6	全国家庭クラブブロック代表会議(")
2/19	第2回家庭部会役員研究協議会(ライファート)

【平成27年度 北海道高等学校長協会家庭部会 組織図】



※ 線 ———— で囲まれた部分は家庭部会の組織や事業等を示す。

(財) 全国高等学校家庭科教育振興会 全国高等学校校長協会 家庭部会 同北海道地区校長会 報告

北海道高等学校校長協会家庭部会長

(北海道江別高等学校長) 小 松 芳 幸

I 財団法人 全国高等学校家庭科教育振興会

○理事会

平成 27 年 5 月 18 日 (月) 13:00~14:00

アルカディア市ヶ谷

出席者 財団理事 小松 芳幸 (江別)

評 議 員 杉本 祐子 (当別)

1 報 告

○平成 26 年度家庭科技術検定受検状況

①被服製作	53,977人
②食物調理	106,660人
計	160,637人
前年比	-2,741人
③保 育	112,625人
前年比	+6,237人

2 議 事

(1) 平成 26 年度事業報告

主な事業～家庭科技術検定の実施、

家庭科実践研究会 (栃木大会)

(2) 平成 26 年度収支決算書

▽経常収益 189,694,940 円

主な収入～検定事業 159,988,500 円

出版事業 23,221,550 円

▽経常費用 177,984,766 円

(3) 平成 27 年度事業計画

主な事業～家庭科技術検定の実施

(4) 財団正味財産 (平成 27 年 3 月 31 日)

323,305,593 円

(5) 理事、評議員の選出

理事長 橘川 睦子 (栃木宇都宮中央女子)

北海道代表理事 小松 芳幸 (江別)

評議員 杉本 祐子 (当別)

II 全国高等学校校長協会家庭部会

○常務理事会

平成 27 年 5 月 18 日 (月) 14:10~14:40

アルカディア市ヶ谷

出席者 全国常務理事 小松 芳幸 (江別)

杉本 祐子 (当別)

1 報 告

(1) 第113回秋季研究協議会 (愛知大会)

(2) 第59回家庭科実践研究会 (三重大会)

(3) 被服、服飾デザイン研究大会 (徳島大会)

(4) 第25回全国産業教育フェア (三重大会)

2 協議事項

(1) 全国理事会・研究協議会の運営

(2) 総会・研究協議会の運営

(3) 家庭部会規約の一部改正について

(4) 調査研究委員会委員について

○理事会

平成 27 年 5 月 18 日 (月) 14:50~17:20

アルカディア市ヶ谷

出席者 全国常務理事 小松 芳幸 (江別)

杉本 祐子 (当別)

1 報告・連絡事項

(1) 家庭部会常務理事会報告

(2) 公益財団法人理事会・評議員会報告

2 協議事項

(1) 平成 26 年度家庭部会事業報告

(2) 平成 26 年度会計決算報告

▽総収入額 13,579,616 円

主な収入～会費 11,340,000 円

6,000×1,890校（北海道 19 校, 昨年比-2）

（3）平成 27 年度家庭部会役員・財団役員

【家庭部会・財団理事長】

橘川睦子（栃木県立宇都宮中央女子高校長）

【北海道地区常務理事】

小松 芳幸（江別） 杉本 祐子（当別）

（4）平成 27 年度家庭部会事業計画

（5）平成 27 年度家庭部会会計予算

▽総収入額 14,159,924 円

主な収入～会費 11,280,000 円

6,000×1,880校（北海道 24 校, 昨年比+5）

主な支出～事業費 8,100,000 円

研究協議会負担金 1,200,000 円

地区別校長会 900,000 円

○総会・研究協議会

平成 27 年 5 月 19 日（火）10:00～16:20

アルカディア市ヶ谷

出席者 全国常務理事 小松 芳幸（江別）

杉本 祐子（当別）

1 開会式

（1）新理事長挨拶 橘川 睦子

（2）前理事長挨拶 深谷 敬子

（3）来賓祝辞

文科省初中局主任視学官 水田 功 氏

産振中央会専務理事 富岡 逸郎 氏

（4）退任校長表彰 挨拶

2 講演

「生きる力を育む家庭科教育」

ボランティア りんサークル代表 荒 由利子 氏

3 研究協議

（1）「家庭に関する学科と大学・短大、企業との接続に関する研究」

埼玉越谷総合技術高校長 武正 章

（2）「家庭科教員を活用した魅力ある学校経営」

茨城県立太田第二高校長 柴田 京子

（3）「技術検定の社会的評価を高めるために」

兵庫県立西脇高校長 門脇 千里

（4）「家庭学科卒業者の進路状況調査」

都県立鷺宮高校長 石坂 敦子

4 講話 「今、家庭科に求められるもの」

文科省初中局教科調査官 市毛 祐子氏

Ⅲ 全国校長会家庭部会北海道地区校長会

1 日時 平成 27 年 8 月 4 日（火）

13:30～15:00

2 会場 道民活動センターかでの 2,7

3 次第

進行：三笠高等学校長 高瀬 雅朗

（1）部会長挨拶

北海道校長協会家庭部会長

北海道江別高等学校長 小松 芳幸

（2）来賓挨拶・説明

全国校長協会家庭部会副理事長

都立江北高等学校長 竹原 勝博 様

（3）報告

○平成 27 年度全国高等学校長協会 総会・

研究協議会（春季大会）等について

北海道校長協会家庭部会長

北海道江別高等学校長 小松 芳幸

○第 63 回全国高等学校家庭クラブ研究発表

大会北海道大会の終了について

北海道大会実行委員長

北海道当別高等学校長 杉本 祐子

（4）協議

○平成 27 年度北海道高等学校長協会家庭部

会調査研究委員会の活動内容について

家庭部会調査研究委員長

北海道津別高等学校長 井上 明子

（5）家庭部会校長参加者数 14 名

（6）運営者

北海道洞爺高校 教頭 岩瀬 均

平成27年度全国福祉高等学校長会 第21回総会・研究協議会 参加報告

全国福祉高等学校長会理事
(北海道置戸高等学校長) 花田 祐治

第2回理事会報告

- 各教科、次期学習指導要領の改訂作業に入るが、教科福祉については変更があったばかりなので、授業時数等しばらくは変更の予定がない
(文部科学省：矢幅視学官)

○功労者表彰

後 藤 修 文：前埼玉県立誠和福祉高等学校長
佐々木光雄：前秋田県立湯沢翔北高等学校長
堅 田 栄 一：高知県立室戸高等学校長 以上3名
意 見：功労者として、福祉教育に貢献があった一
般教員も今後検討してみてもどうか？

○次年度の生徒体験発表について

今年度並みのスケジュールを予定
10月頃⇒今年度中(作品募集)⇒4月(予備審査)
⇒5月(中央審査)⇒8月(本審査)

○平成28年度新潟大会について

平成28年8月8日～9日
参加費：加盟校 8,000 円、非加盟校 10,000 円
(いずれも 1,000 円値上)

○校長会年会費について

現在 7,000 円の年会費で運営しているが、支出
の状況・加盟校の減少を考え 3,000 円の増額を
校長会に提案する

○社会福祉・介護検定について

○介護技術コンテスト規定一部変更(代表校数・ 補欠にも役割があるため、補欠の名称削除)

○その他

各種調査用として各学校のデータ保管が必要
(国家試験合格者・登録者・離職率等) 約5年分
総会・研究協議会

○主任視学官挨拶：28年答申に向け学習指導要 領の見直し検討中(別紙)

○基調講演(厚労省 社会・援護局 福祉基盤課 福祉人材確保対策室 室長 武内和久様) 医療界に比べると介護界の方は発信力が弱い。 介護福祉士—中核的な位置づけに考える。

○生徒体験発表：最優秀「文部科学大臣賞」岐阜 県立大垣桜高校 桐山郁香

研究協議1

《授業研究》愛知県立海翔高等学校

『福祉を学ぶ高校生に出来ること』

～防災学習から見えてきたもの～

《現場実習》北海道置戸高等学校

『介護福祉士に求められる実践力』

～思考力を高め、実践力の向上を目指す本校の介護実習の取組～

《資格取得》宮城県明成高等学校

『未来の福祉を支える人材の育成』

《進路指導》和歌山県立有田中央高等学校

『総合学科福祉系列の進路キャリア教育』

校長会総会

○理事会の内容を報告・審議

会費の値上げについて、理事会の提案どおり次
年度より 10,000 円とする

※山形県の校長より、校長会の動きとして基本的
な定数の問題や、教員の要件等について、もっ
と働きかけをしてはどうかとの貴重な意見あり
研究協議2(校長会の裏番組として分科会)

記念講演

○同志社大学大学院 社会学研究科 教授 上野谷
加代子氏：『地域福祉に貢献する人材養成を目指して』
～たすけ上手・たすけられ上手の教育者集団に～

研究協議3

○検定・コンテストについて説明(検定料を徴収
して実施することは不可能ではないかと意見が
あったが、強制参加ではないので、実施できる
学校は実施するという方針は変わらず)

○教員採用について意見交換がされ、静岡は医療
機関等での勤務経験を有する者を対象とした選考
(看護師、保健師または助産師の資格を持ち、医
療、福祉関係の機関で5年以上の実務経験があれ
ば、教員免許状を取得していなくても受験可能)
千葉は特定教科特別選考(教育職員免許状の所
有の有無に関わらない選考)高等学校看護・福
祉・水産科の授業を担当するため、看護師・介
護福祉士・海技士等の資格や実務経験を有し、
看護師実務経験5年・介護職員実務経験3年が
あれば特別採用

文部科学省 指導・講評

○矢幅視学官より福祉を取り巻く状況等説明

第64回北海道高等学校家庭教育研究協議会を終えて

北海道高等学校家庭科教育研究協議会会長

(北海道洞爺高等学校長) 佐々木 淑 子

平成27年度第64回北海道高等学校家庭科研究協議会が、8月4日(火)～5日(水)の2日間、北海道立道民活動センター「かでる2・7」を主会場として開催されました。

ご来賓として、北海道教育庁学校教育局高校教育課長 赤間 幸人 様、全国高等学校長協会家庭部会副理事長(東京都立江北高等学校長)竹原 勝博 様にお越しいただき、ご挨拶を頂戴しました。また、助言及び講評については、北海道教育庁檜山教育局教育支援課高等学校教育指導班主査 佐 紺 撰 子 様にお願ひしました。道内の家庭・福祉に関する高等学校の校長先生並びに先生方など約100名の皆様にご参加いただいたおかげで、盛会のうちに初期の目的を達成することができました。この場をお借りして御礼申し上げます。

さて、本会の組織の元になっている北海道高等学校長協会家庭部会企画委員の校長先生方7名と全道各地より選出された運営研究委員23名の先生方及び教頭先生3名、そして事務局(洞爺高校)2名は、企画・準備・運営・事後業務を担当させていただきました。

【本研究協議会 組織】は、P 9 に記載

平成20年度～の運営委員会方式から平成24年度～は運営研究協議会方式になり、家庭科教員の研修は家庭科教員自らが運営を！の取組が当たり前になってきました。これまでの実施内容を踏まえ、今年度はいくつかの工夫をさせていただきました。まず、①本研究協議会の研究主題及び研究の観点について見直し、若干の文語の整理をしたこと。②全体会において、今年度担当した全国高等学校家庭クラブ研究発表大会

～北海道大会～に出場した生徒たちの発表を入れ、その指導について顧問教員からの説明を加えたこと。③その全国大会運営について、終了報告を行ったこと。④北海道高等学校長協会家庭部会には福祉部会関連の業務も兼ねていることから、グループ別体験研修において福祉教育に関する内容を加えたこと。⑤交流会への参加を増やすためホテルでの開催を止め、「かでる2・7」館内の喫茶場所で開催したこと。です。

さて、1日目午前中は開会式・オリエンテーションに続いて全体会Ⅰとし、生徒発表・報告説明・研究発表を行いました。

まず、7月30～31日に開催された「全国高等学校家庭クラブ研究発表大会～北海道大会～」において「全国家庭科教育協会賞」を受賞した美唄尚栄高校家庭クラブ「モツとの未来2015～私たちと地域をとりモツカレー～」を3名の生徒の皆さんに発表していただきました。その後、顧問の坂口先生から指導報告を、当別高校 福本先生からは大会終了報告を、「家庭科技術検定の実施」については、事務局校である名寄産業高校の榊原先生より説明いただきました。

提言については、道南・後志・上川の3地区からの発表となりました。函館中部高校 穴戸先生、真狩高校 前田先生、上川地区高等学校家庭科教員研究会の先生方には、日常の実践を提言としてまとめ発表していただき、誠に有難うございました。

【提言内容】は、P 12～P 14 に記載

午後からは3つの分科会と校長部会に分かれて研究協議を行ないました。三分科会いずれも提言・助言・司会・記録を担当していただいた

先生方及び参加者の皆様のおかげで、意見や実践例等が活発に出され、意味ある分科会となりました。校長部会では、全国高等学校長協会家庭部会北海道ブロック研究協議会を兼ねていることから、全国高等学校長協会家庭部会副理事長 竹原勝博校長先生においていただき、「全国状況等について」の説明を、部会長からは「全国高等学校家庭部会総会・研究協議会」等について資料を基に報告いただきました。

分科会終了後は、全体会Ⅱとして再び参加者が集まり、各分科会の報告及び講評が行われました。各分科会では、今後の指導に生かせる充実した協議内容であったことが報告され、また、佐紺主査の講評では、各提言内容について指導と評価をいただくとともに、家庭科教育の課題についても触れられ、解決へ向けては本研究協議会の意義と家庭科教員の研修がいかに重要であるかについても話されました。

【分科会報告】は、P15～P17 に記載

【講評】は、P18 に記載

2日目は、4つの講座のグループ別体験研修とし、受講者の希望通りの講座に分かれて開催しました。どの講座においても先生方の真剣な取組が見られ、実施後のアンケートにおいても受講者の高い評価が得られました。それぞれの講座の講師をお引き受けくださった関係各位に感謝申し上げます。【グループ別体験研修講座報告】は、P19～P21 に記載

以上、2日間の日程で開催された本研究協議会は、充実した研修の時間を提供することができたようです。本研究協議会はこれからも家庭科教育・福祉教育に関わる先生方の資質の向上を目指し、一層実り多き研修の場となるよう努めていきたいと考えています。今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。そして、関係の皆様、本当に有難うございました。

【本研究協議会 組織】

1 役員

部会長	小 松 芳 幸 (江 別)
会 長	佐々木 淑 子 (洞 爺)
副会長	杉 本 祐 子 (当 別) 増 田 雅 彦 (名寄産業) 井 上 明 子 (津 別)
監 事	福 本 直 人 (札幌南陵) 高 瀬 雅 朗 (三 笠)

2 運営研究員

石 狩	溝 淵 和 江 (札幌南) 伊 藤 友 美 (札幌西) 東 昌 江 (札幌手稲) 高 橋 理 緒 (札幌南陵) 清 野 祥 子 (札幌清田) 笥 理 子 (札幌厚別) 池 田 麻 子 (野 幌) 鈴 木 朋 美 (江 別) 福 本 智 子 (当 別)
道 南	尾 越 美 緒 (遺愛女子) 谷 内 春 香 (清尚学院)
後 志	近 藤 麻理子 (倶知安) 前 田 義 江 (真 狩)
空 知	継 田 華 恵 (滝 川) 室 井 のりこ (岩見沢緑陵)
上 川	岸 本 美 子 (富良野) 榊 原 しほじ (名寄産業)
留 萌	笠 島 絵里奈 (羽 幌)
宗 谷	山 下 政 俊 (礼 文)
オホーツク	橋 本 晶 子 (遠 軽)
日 胆	大 森 裕 介 (静 内)
十 勝	米 根 順 子 (足 寄)
釧 根	山 田 真 代 (標 津)
教 頭	岩瀬張 幸 子 (江 別) 宮 崎 円 (置 戸) 後 藤 あゆみ (夕 張)

3 事務局校 (北海道洞爺高等学校)

事務局長 (教頭)	岩 瀬 均
事務局員 (教諭)	秋 田 貴 子

オリエンテーション

北海道洞爺高等学校長 佐々木 淑 子

暑中お見舞い申し上げます。本日は全道各地より家庭科担当教員を始め、校長先生方にも多数お集まりいただき有難うございました。

第64回を迎える北海道高等学校家庭科教育研究協議会、いわゆる夏の研究会で皆さんは何をねらいとして参加するか、学びの心構えは整いましたでしょうか？それではさっそく、配布資料に基づきオリエンテーションを始めます。

まず、昨年度の本研究協議会の終了について報告します。「生きる力をはぐくむ家庭科教育の充実を目指して」を研究主題に平成26年7月29～30日に開催しました。提言発表地区はオホーツク・空知・道北（宗谷）が担当し、山本先生（滝上）、福岡先生（滝西）、川端先生（稚内）が発表しました。全体では参加者数は前年度より微増し、交流会は大幅に減少し、今年度の改善へ繋がる数字でした。参加者アンケートのまとめでは、概ね良好の評価をいただきました。2日目の体験研修講座については、参加者の希望に添えるよう、役立つ講座内容や講座数について検討していきます。報告の最後は会計決算ですが、校長協会家庭部会5月総会で報告し承認をいただきました。21,449円が繰越金として今年度の予算に計上されています。

続いて、第64回の本研究協議会の実施内容ですが、同封の黄色冊子をご覧ください。また、予算につきましても記載の通り約30万円の収入を見込み支出計画を立て実施しています。

さて、平成28年度の本研究協議会開催時期については運営研究員と検討し、明記した三案の中から決定します。なお、提言発表地区は日胆、石狩、釧根となっていますので、各地区研究協議会等で選出して頂くようお願いします。

それでは、『これからの教育を担う家庭科教員の資質向上を目指して』と題しお話します。

この資料は、前文部科学省中等教育局教育課程課教科調査官 望 月 昌 代 先生の講演資料を基に作成したものです。

始めに、人間でなければできないこと、家庭科教育でしか担えないことは何か？という話です。昨夏ロボットの人工知能は偏差値45を獲得し、私立大 403校合格可能性A判定が出たという新聞記事がありました。ロボットはますます知能を獲得していくでしょうが、私たち教員は生身の人間を相手に授業をしています。五感をフル活用し生活の中で問題を感じ取る力、そこから行動する力、さらに新たな価値観を見つけ考えそれを問題解決に繋げていく力は、まだまだロボットにはできないことです。そして、家庭科ではきゅうり半月切りを50枚切れただけではなく、それで酢の物を作り家族に喜んでもらって初めて身に付く力があります。他者と関わる行動は自尊感情や自己有用感を生み出し、生徒の自信へと繋がっていきます。家庭科ではアクティブラーニングにすでに取り組んでいると自負していますが、これからも生徒自身に体験や経験を積ませ、総合的・複合的に捉えまとめさせ、可視化・具現化を探ってみてください。

高等学校家庭科男女必修が始まって22年目、家庭科の現状と課題を探りましょう。全国高等学校長協会第 112回研究協議会（秋季）新潟大会資料によれば、家庭科は将来生きていくために重要な科目であるという生徒認識は向上しましたが、教科書採択数から必修科目は「家庭基礎」2単位履修が増加し、「家庭総合」「生活デザイン」の4単位科目が減少する状況です。

これは、社会の変化、例えば、子どもや高齢者への対応・社会福祉・食育の推進・衣食住に関する内容と消費生活や環境との関連など、生活と直接結び付く教科家庭科の指導時間が十分に確保できない現状を表しています。

そこで、常に授業改善は進んでいるか？の視点を忘れずに、指導の工夫等で内容を充実させ、時間数が足りない部分をカバーすることが大切になります。

さて、学習指導要領改訂2年目の高等学校家庭科の充実に向けてお話しします。

まずは、学ぶ愉しさを生徒自身が感じる授業づくりが必要で、教師として一般教養や知識と技術を身に付け、生徒には「できる！」という自信を付けてあげて欲しいのです。自信とは字のごとく、自分の力を信じることですから・・・。

そこで生活に活用できる授業づくりについて具体例を挙げてお話しします。(簡略)

- 育成すべき資質・能力を明確にする。
- 創意工夫の指導計画を創る。
- 教材研究で題材を十分に練り上げる。
- 教師自身の人間的な魅力を発見し伸ばす。
(特に適切な話し方・生徒への対応など)
- 生徒が能動的に学習できる工夫を行う。
(いわゆるアクティブ・ラーニング)

なお、学ぶことが楽しいと感じるためにやってほしいことは、教材の開発と演出を工夫してみる・学習スタイルのバリエーションを増やす・言語活動を一層充実させる・・・などです。

続いて、家庭科で身に付けさせたい力とその方法例についてお話しします。

① 生活の知識と技術(生きる知恵)

そのために学習の成果の検証や実証データの作成が必要となります。

② 思考力・判断力・表現力

観点別評価を生かし、考査問題などの工夫を行います。

③ コミュニケーション能力

授業時に他者と関わる機会を設定し、指導方法を工夫してみます。

④ 問題発見能力・課題解決能力・段取り力

学校家庭クラブ活動やホームプロジェクトの指導を活用します。

家庭科教育は、いわゆるたくましく生き抜く力(食べる力・着る力・自立する力・自律する力)を学習経験を通して生徒の身に付けさせ、よりよく生きるための力を醸成させるなど果たす役割は大きいと実感しています。

以上を踏まえ、今回の協議会では何をねらいにするのか目標を持って参加していただきますよう、そして、協議などには主体的に愉しく参加し、それを目に見えるカタチで発信し、共有し、発展させて欲しいと願っています。

教育は真剣勝負です。真剣と真剣の立ち会いには相手との間が大切です。提言発表される穴戸先生流・前田先生流・上川合同チーム流それぞれの流派は違っても、間の生かされない流派は免許皆伝にならないと考えています。つまり人間・時間・空間を生かすということです。先生方も自身の流派を生かし、生徒たちのいのちと対峙し、教室に感動の空気が充満するような授業をぜひ構築してください。きっと真剣勝負で対応すれば、生半可に頭を撫でるのと違い、教師の血潮が手のひらを通して生徒のからだに注ぎ込まれ、生徒の血潮もまた教師の心まで届くのではないのでしょうか？

※参考までに、福島県「家庭クラブ指導を活性化するためには」から抜粋文を紹介します。

- ・まず活動してみましょう！
- ・楽しく取り組みましょう！
- ・活動したことをカタチにしましょう！
- ・活動したことをPRしましょう！
- ・継続させましょう！
- ・発展させましょう！

提言1 アクティブ・ラーニングを取り入れ、 思考力・問題解決能力の向上を目指した授業実践

北海道函館中部高等学校教諭 宍戸 加奈子

1 はじめに

本校3・4年生で「家庭総合」を履修する中で、自分のこと、人と関わること、社会に目を向けることを卒業後の進路を意識して授業を行っている。「個」「共有」「協働」「思考」「判断」「表現」「振り返り」このキーワードをふまえた活動を授業に組み込み、学習意欲の向上と成長へと繋がるよう、アクティブ・ラーニング型授業を取り入れている。思考力・判断力・表現力を育むために、講義部分と応用して深める部分と組み合わせ、振り返り・改善・修正し、次のステップアップに繋がるよう授業を組み立て、継続した取組をしている。

2 授業実践について

具体的授業内容の精選取組として①自由度を持った課題の設定②作品及び授業の中でのコミュニケーション・意見交流において多様な方法の取り入れ、③プレゼンテーション・調べ学習④体験型学習を取り入れた授業について工夫した授業実践である。

実践1 被服製作では自由度の高いポーチを作り、発表会と学校祭でのコンテストを実施した。

実践2 家族・家庭に関わる問題を調べ、家庭科生活新聞を製作し、発表会で発表した。

実践3 高校卒業後の人生のプラスとマイナスイベントを考え、人生すごろくを各班「協働」して作り、ゲームをした後、発表した。

実践4 住居分野では、外部講師による「一人暮らしの間取り」と契約について学習した。

実践5 高齢者分野では課題図書を読み、イメージを深め、「高齢者インタビュー」を「共

有」して視野を広め、疑似体験で介護する側、される側の気持ちの理解を深めた。

実践6 保育では「子育てインタビュー」を「共有」して視野を広め、「曲」や「バイタルサインの比較」・「新生児人形」を通して多角的な理解を深めた。

実践7 3年次に自立度チェックと自分の目指すものは何か考えた。卒業間近、自己を見つめ、目指すべき目標を定め軌道修正した。

3 実践の考察

「個」で、調べ学習や発想の工夫を図れる題材を選択し、意欲や関心・興味を引き出し、グループで調べたことを「共有」し視野を広げることができた。また、「協働」で新たなものを創り上げることや互いに協力し合い、協調性や視野を広げること、理解を深めることに繋がった。さらに、グループで新たなものを創り出すことで、「思考」が深まり、次に進むべき方向性を「判断」することができた。製作したものを発表したりまとめたりすることで表現力を養うことができ、他人の発表を聞くことで視野を広げることにも繋がった。まとめとして今後どうしたらよいか気づくこともでき、「振り返り」をすることができた。

4 今後の課題

(1) グループワークの活発化とグループ構成の方法

(2) 情報機器の活用と的確な指示

(3) 課題に取り組む時期の設定と教材の精選と分野・領域の関連性の工夫があげられる。

今後もいろいろなことに視野を広げ、生徒とともに授業の改善を図っていきたい。

提言2 『高校生カフェ』の運営を通じてはぐくむ 「生きる力」の育成

北海道真狩高等学校教諭 前田 義江

1 はじめに

本校は平成25年度から新コーススタート。一期生のコース授業がスタートした昨年度、村の期待も強く学校での月1回の販売会をスタートさせた。完成年度の今年度は、学校の前に位置する道の駅を改装していただき、新たな形で販売会をスタートすることになった。高校生カフェという形で月に2回の販売を実施。高校生に大きなチャンスをいただいた。製菓衛生師を目指す上で経営について実体験を通じて学べることは大変貴重な経験となる。実施組織も高校だけから村全体となり高校生と大人が会議を繰り返し、一緒に作り上げていくことはコミュニケーション能力の向上につながり、学校の授業だけでは得ることのできない大きな効果が期待できる。高校生も地域の方々もお互いに学びあい、みんなが笑顔になるような学習活動の一部を報告する。

2 高校生カフェの取組

(1) 衛生指導

平成25年8月に製菓実習室が完成したことをきっかけに衛生指導に重点を置いた。

(2) 販売会

平成26年5月から学校を会場とした月1回の販売会がスタート。焼菓子はコースの授業、生菓子・パンはスイーツクラブを中心にして製造した。

(3) 実習と製菓理論

実習では最初にデモを行い、製菓理論をまじえて作り方の説明をした。作る際、ポイントチェックを行い、各自の進捗を確認できるようにした。また、実技試験も実施した。

(4) 高校生カフェ

今年度、販売会が高校生カフェとなった。実施組織が高校だけではなく、役場や商工会など村の様々な人で構成されるようになり新しい形でスタートした。高校生が主体となり開発から販売までを大人のサポートを受けながら実現していく。

(5) 反省・課題

5月までを一区切りとしアンケートハガキを集計。実施組織会議で今後に向けて話し合った。販売会ごとに一人ひとり反省を行い次に一つでも改善できるようにと取り組んでいるが、土台を完成させるまでにはまだまだ時間がかかりそうである。

3 今後に向けて

高校生カフェの運営は、まさにP→D→C→Aサイクルであり、生徒にとって生きた学習の場となっている。運営を通じてコミュニケーション能力や企画力、行動力など学校の中の授業だけでは身につかない力が少しずつではあるが身に付いてきているように感じる。生徒が持っている力を少しでも発揮し伸ばしていけるようにサポートしていくことが私達の役割だと感じる。私自身も学び続けるということ忘れず、運営に取り組んでいきたい。

4 おわりに

新コースができて3年目の今年、一期生の担任・コースの授業担当者・スイーツクラブ顧問として関わらせていただいている。目的を持って入学してきた一期生が、高校生カフェという体験学習の機会を通し、私達の予想以上の力を身に付けてくれることを期待したい。

提言3 環境教育から消費者教育への発展を目指す 教育課程の編成・実施の工夫と改善

北海道美瑛高等学校教諭 森 本 鈴 奈
北海道東川高等学校教諭 高 橋 洋 子
北海道富良野緑峰高校教諭 瀧 川 朗 子
旭川明成高等学校教諭 米 坂 純 香
上富良野高等学校教諭 中 島 崇

1 本研究について

2012年、「消費者教育推進法」が施行され、教育のさまざまな場面において、いかに総合的かつ一体的に「消費者市民社会」の実現を目指すべきか、その実践が求められている。本研究は、上川地区高等学校家庭科教員研究協議会における年2回の研修内容を統合する形で、地域特性を生かした環境教育からグローバルな消費者教育に発展させようと共同研究したもので、その具体的な授業実践について報告する。

2 実践内容

(1) 出前授業を軸にした研究について

上川管内では、さまざまな形で出前授業が実施されており、管内全体で共同研究を行うにあたって、2つの出前授業にテーマを絞り、各校で実施し、比較検討及び情報交換を行った。

① デートDV人権講座に関する授業実践

法務局人権擁護課、人権擁護委員協議会が実施している啓発活動の人権教育のうちの1つである。ロールプレイングやDVDを効果的に入れた授業であり、「家族」の分野を行う上での資料になるという教員の感想があった。

② 環境ビジットプログラムに関する授業実践

NPO法人 C・C・C富良野自然塾が実施している環境教育事業の1つで、地球の誕生から現在までの時間軸を中心に、人間の行動が環境に与える影響について考えさせる内容となっている。環境教育の題材として、よく考えられた授業であり、生徒達は集中し、積極的に取り組んでいたという各校の報告が数多くあげられた。

(2) 消費者教育への発展へ

新学習指導要領では、特に「環境教育」と「消費者」の充実が求められている。持続可能な地球環境を保持していく必要性を理解させることができた(1)②の出前授業を受けて、いかに今求められている消費者教育に発展させることができるか、その授業の在り方を検討した。

近年新しい消費者教育の教材として注目されている、特定非営利活動法人ACEのワークショップ教材「おいしいチョコレートの真実」をヒントに、自らの消費行動の在り方をダイヤモンドランキングを軸にしたグループ学習を通して言語活動の充実を図る授業を実施した。

(3) 成果と課題

自己評価シートの結果から、環境保全に向けて、具体的に何をしなければならないかがよくわかり、行動にうつすことができると評価した生徒が大部分を占め、消費者市民社会の実現に向けて、実践的な態度を育成することができた。

今後は、生徒の学習状況を的確に把握できる評価の工夫を課題としていきたい。

3 おわりに

今回、共同研究に関わった2年間で得たものは想像以上に大きかった。今後も、上川管内をはじめ、多くの先生方との横のつながりをさらに深めながら、家庭科教育の充実に貢献できるよう精進していきたい。

第 1 分 科 会 報 告

北海道足寄高等学校教諭 米 根 順 子

■提言者からの補足説明

- ・各実践の最後に、生徒に自己評価をさせた。この分析・反省は次の実践へ向けた改善につなげた。
- ・各単元では、「生徒が発表する場面」を可能な限り多く設定し、言語活動の充実を図った。本授業を展開するにあたっては、年度始めにオリエンテーションを行い、話し合いや、発表、グループ活動を多く取り入れた授業であることを生徒に十分説明した。このことにより、人前で話することが苦手な生徒も、不満や抵抗を軽減させ、本授業に取り組むことができたと考えられる。
- ・発表場面では、乗り越えるべき課題（発表内容、発表方法、司会など）を段階的に増やすことで、生徒が主体的に活動出来る力を身につけるような展開にした。
- ・教科の取り組みを学校全体へ発信し、教員間の共通理解が深まるよう努めた。
- ・評価方法については、考査と提出物、課題の取り組み方などを総合的に判断した。補足説明の後、発表では触れられなかった他の実験・実習内容について質疑応答を行った。

■グループ協議（3グループ）

アクティブラーニングを取り入れた授業の実践について、学校間で成功例と失敗例をあげて情報交換を行った。

アクティブラーニングを取り入れる際の課題として以下の内容があげられた。

①40人学級での指導方法や時間の確保に

ついて。

②生徒間に能力差がある場合のアクティブラーニングの評価方法について。

従来家庭科で行ってきたグループ活動・発表などの言語活動は、主体的に学ぶアクティブラーニングと捉えることもできる。日々教材研究に努め上記の課題解決へ向け、今後も継続的に検討していく必要がある。

■助言者からのまとめ

○滝川西高等学校 吉村 佳名子先生

アクティブラーニングとは、生徒の頭の中をアクティブにしてあげることである。そのために生徒の発想を広げられるような取り組みが必要となる。実践は準備に時間がかかり二の足を踏みがちであるが、まず実践してみることが重要である。準備時間短縮のためには、視聴覚教材や学校設備を活用することも効果的である。また、実践内容を全体へ発信し他教科と連携をとることは、自校の育てたい生徒を育成するためにも大変有効だと言える。

○江別高等学校 岩瀬張 幸子教頭

この発表は7つのキーワード（個・共有・協働・思考・判断・表現・振り返り）をもとに授業を検討し続けてこられた穴戸先生の集大成であった。本提言のように、教科での取り組みを学校内で全体に発信することは大変重要である。各校においても、教科の実践内容の可視化を進め、全教員の理解を深めてほしい。また、その取り組みが、学校内にとどまらず、地域への発信へとつながっていくことを期待する。

第 2 分 科 会 報 告

北海道標津高等学校教諭 山 田 真 代

■提言に対する質疑応答

初めに、提言に対して参加者から質問や意見を頂いた。(質問) スクーリングの実施について(回答) 34日間のスクーリングがあり他校と合同や真狩高校だけのクラス展開も行っている。(質問) 高校生カフェで販売するメニューの決め方(回答) スクーリングで教えて頂いたレシピを基本に、村からの要望である野菜を使用したお菓子作りを行っている。など多くの質問や意見を頂き、活発な意見交換が行われた。

■研究協議

柱1 「地域との連携から生まれる職業観について」

地域の人口減少や雇用の場の確保などの課題がある中「高校生カフェ」は村の要望で野菜を使ったレシピの開発・販売をしている。レシピ開発や技術指導のため、担当教員の資格取得などの他、地域のレストランなどから外部講師を招く、村民ボランティアなどで地域と密接にかかわる事業に発展した。また、様々な事情を抱える生徒たちが「商品」としてのお菓子づくりという意識と態度で実習に臨むことや、販売をとおした接客・接遇、協力体制などがキャリア学習にも繋がっている。他校の実践例として、知内高校でのふるさと調理実習、洞爺高校での地産地消を目指した洞高カフェの開設・運営なども紹介された。

柱2 「実習における評価の工夫と改善について」

実習での評価については、苦労されている先生方が多く、煩雑な作業の中でどのような観点で生徒を評価するのか、どのように数値化するかなどの話し合いが行われた。家庭科技術検定の評価項目を応用する学校が多い一方、教員一人では見きれない場合は、他教科の先生に入ってもらい評価する、自己評価を活用するなど、各学校で工夫された評価を実施している。その際、客観的に行う

ことを心がけ、誰がつけても同じ評価にならないことが確認された。

■助言者からのまとめ

○北海道函館水産高等学校 西田 真沙子先生

現在求められている、自律・創造・協働を実践した素晴らしい提言であった。特に生き抜く力には協働が大切であり、地域の絆づくりと暮らしの課題解決に向けた取り組みを「高校生カフェ」の運営を通し感じる事ができた。また、特別支援教育で行われている作業の構造化・可視化については、全ての生徒にとっても効果的である。衛生面では、HACCPの活用、職業観という点からは実習のローテーションに工場長という仕事を設け、生徒の気付きや責任感についての意識を高める工夫を行うのも良い。

○北海道置戸高等学校教頭 宮崎 円 先生

これからの社会に求められる資質・能力を「21世紀型能力」として整理し、知識・技能に加えそれらを習得し活用するための思考力、社会や他者との関わりの中で考えたことを実践する力が求められている。「高校生カフェ」は、この21世紀型能力を育み、実践力を育てることに繋がっている。さらに、高校だけの取り組みではなく役場や商工会など真狩村の様々な方と関わり合いを持ちながら、新しいアイデアを出し、商品を開発し、販売までを実現する力が育つ中で、能動的な成功体験がさらに生き生きとした生徒の活動に繋がっている。また、これからは受け身・個別型の教育から探究・協同型の教育への転換が求められている。主体的に家庭や地域の生活を創造する思考力を育成し、学んだことを日々の生活の中で実践できるよう、子どもたちが21世紀を主体的に生き抜く力を身に付けられるよう指導して頂きたい。

第 3 分 科 会 報 告

北海道遠軽高等学校教諭 橋 本 晶 子

■研究協議

【グループ学習 1】

消費者教育教材を活用し、ダイヤモンドランキングを軸にしたグループ学習を実施した。

【グループ活動 2】

「家庭基礎」の指導内容と消費者教育の各領域における目標について、消費者教育のイメージマップを活用し、具体的な指導内容についてグループで協議・発表し、全体で共有した。



■提言に対する質疑応答

(質問) 各校の教育課程が違う中で同時期に違う分野の出前授業を取り入れる際どのように調整したか。(回答) 紆余曲折があったため、昨年5月～7月の短期間に一斉に実施してもらうことになったが、各校の協力で実施することができた。

(質問) 講師派遣にかかる料金は？(回答) 上川管内では1コマ5千円(交通費込)だったが、他地域については富良野自然塾(以下、自然塾)に要相談。(質問) これは自然塾あってこそその授業だと思うが、教員自身で実施するためのアイデアがあれば教えてほしい。(回答) 実際に自然塾に出向いて自身がプログラムを体験してみて授業でやる、という形であればよいかもしれないが、自然塾の方は生徒を引き付ける術も高く、内容的にも大変完成されたプログラムであるので、今回は教員ではなく自然塾の方たちにやってもらった、というところに大きな意義があったと思う。

■助言者からのまとめ

○北海道札幌手稲高等学校 東 昌江先生

上川管内の先生方の共同研究の成果が大変よく発揮された内容であった。環境教育や消費者教育もこのように可視化すると大変取り組みやすくなる。授業の流れと違う時期に実施することになっても、家庭科はすべてが繋がっているのどこからでも切り口がある。また、家庭科は今習ったからといって今できるようになるものばかりではない。50分の授業は短いが、私たちが濃くてインパクトの強いエッセンスを揃え、授業の中ですべてを解決しなくても、もっと知りたい、やってみたいと思う余韻を残すことも大切。教員の段取りで生徒の学びも大きくなるし、アクティブ・ラーニングや実習等を通して生徒自身の段取り力を育てることに繋がっていく。

○北海道夕張高等学校教頭 後藤 あゆみ先生

・今回紹介されたダイヤモンドランキングの手法は、あくまでも授業の目標を達成するためのツールであり、なぜその順位にしたのかを考え、相手に説明することが重要。また、教師は、自分の価値観を生徒に押し付けることなく、生徒自身が考え、結論を導き出すことが大切。自分の意見を他の生徒に伝えたり、全体に発表したりすることが主体となる授業になるように授業改善をしていただきたい。

・管内研究会の回数が減りつつあるが、家庭科教員同士が授業参観し、授業改善について協議したり、ICT機器を活用したりすることをお願いする。平成30年度の大学入試制度改革で、家庭科の授業内容が入試に生かされる可能性がある。大学入試研究会等で情報を得ていただきたい。

平成27年度第64回北海道高等学校 家庭科教育研究協議会講評

北海道教育庁檜山教育局教育支援課高等学校教育指導班 主査 佐 紺 撰 子

日頃から本道の家庭科教育の充実・発展のために御尽力いただいておりますことに感謝申し上げます。

まず、第63回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会において、全国家庭科教育協会賞を受賞された美唄尚栄高校家庭クラブの皆さんの発表は、大変素晴らしい発表でした。ホームプロジェクトの部でも、札幌北高校が産業教育振興中央会賞とクラブ員奨励賞を受賞し、北海道の取組が全国で認められた形となりました。大会の運営についても、実行委員の皆様の御指導のもと、生徒役員が生き生きと活躍し、大成功で終わることができたことに重ねて感謝申し上げます。

名寄産業高校 榊原先生が話された家庭科技術検定については、生徒の自己肯定感、実技力の育成のため、積極的な活用をお願いします。

次に、提言についての講評を申し上げます。

最初の函館中部高校、穴戸先生の御提言は、生徒が能動的に授業に取り組むとともに他者との関わりを大切にするよう、「個」、「共有」といった7つの観点で、様々な「しかけ」をされた実践でした。年間の指導と評価の計画を綿密に立て、本時の目標を明確に示して生徒の学習意欲を喚起し、さらに振り返りを行っています。加えてエコポーチコンテストの実施や家庭科生活新聞の掲示など、生徒が学習する姿を「見える化」しています。また、生徒の変容を見るため、3年次と4年次の自立度チェックも実践されています。

なお、「ラーニングピラミッド」という研究結果によれば、一方向だけで教えられた時に生徒の記憶に残るのはわずか5%で、教えた時は90%とのことです。先生の資料にある「生徒が互いに教え合うことで一層理解が進む」とは、まさにこのことです。

今後も、多様なアクティブ・ラーニングを実践されますとともに、より効率的に取り組むための教材の精選・工夫、分野の関連性の検討を進めていただくよう御期待します。

次に、真狩高校の前田先生の御提言は、高校生カフェの運営という体験的な学習を通して、他教科や地域との連携を図った実践でした。

分科会でスクーリングや教員の資格取得の方法など実務に関する質問があったとおり、実施上の課題は多いものの、生徒の成長に必ずつながる学習活動です。ロールケーキの実演販売、材料しか載せないレシピ等様々な工夫もあり、生徒のコミュニケーション能力など基礎的・汎用的な能力が着実に向上していると思います。

今後は、評価方法についての整理・検討が必要です。また、スイーツについては全国的にも取り組まれ製品化している高校も多いことから、「真狩」というブランドを育てるとともに、ますます「素材のわかるパティシエ」の進化に期待します。

最後に、美瑛高校の森本先生、東川高校の高橋先生、富良野緑峰高校の瀧川先生の御提言は、出前授業を取り入れた共同研究という難しいテーマに地区の先生方が結束して取り組んだ、パワーを感じる実践でした。家庭科教員の連携という課題に対し、大変参考になるものでした。

研究では、環境教育・消費者教育について理解を深めた上で、生徒の実態に合った方法で授業を進めるという強い意志が感じられました。例えば、教材の「おいしいチョコレートの真実」についても、生徒の実態に応じて手を加えるなどした点が素晴らしいと思います。さらに、出前授業を受けて、その深化や、生徒の実生活における行動の変容まで考えておられました。

資料には各校ごとの自己評価シートの結果が載っていますが、こうしたデータの分析を今後にも続けていただきたいと思います。

今後は、評価方法の一層の工夫や、「努力を要する」状況の生徒への手立てについて研究を深めていただき、上川地区の生徒を育てるという連携の輪が広がり続けることを期待します。

細やかな心配りで本研究協議会を成功に導いてくださいました事務局校をはじめ関係各位に深く御礼を申し上げ、講評といたします。

グループ別体験研修講座報告

実施日 平成 27 年 8 月 5 日 9 : 15 ~ 13 : 00

A 食育セミナー

1 主な内容

専門調理師による調理（洋食）技術に関するデモンストレーションを交えた講義及び昼食体験

2 参加人数 20名

3 講師

光塩学園調理製菓専門学校

助教授 野村 一正 先生

4 会場 光塩学園調理製菓専門学校 東館 4 階

【 研修内容・成果 】

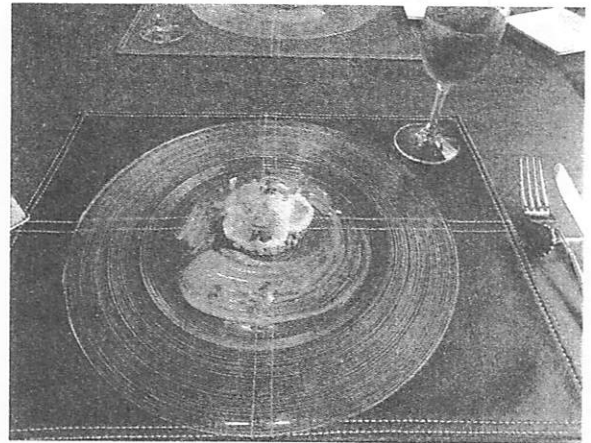
講義では、当日のメニューである「ホタテのカルパッチョ、ランティエユのサラダ」、「鴨胸肉の香草パン粉焼き、ソースボルドーズ」、「フルーツの冷製サバイヨングラタン桃風味」についてデモンストレーションを交えながら行った。

普段あまり見かけないレンズ豆を調理する前に実際に手にとって観察をし、調理法も教えていただいた。他にも扱った食品の詳しい説明を聞くことができ、どのように調理すればおいしく、見た目も良くなるかということが勉強になった。

調理以外にも、実際に調理実習を行う時に生徒はメモをとることに集中してしまう、ノートにかかせても計量もままならなくなってしまうという野村先生の実験の体験のお話も聞くことができ、そのため、今ではレシピを渡す時に穴埋めに行っているということを教えていただいた。

昼食体験では、味はもちろんおいしく、目で見て楽しさがある盛り付けをしていたので、1つの料理でも盛り付けの大切さを実感した。

様々な調理の技術だけではなく、レシピの作り方などの調理実習を行うときのポイントも丁寧に教えていただき、とても充実した時間を過ごすことができた研修となった。



【講座担当者】

倶知安高等学校
真狩高等学校
札幌南陵高等学校
清尚学院高等学校
遺愛女子高等学校
標津高等学校
岩見沢緑陵高等学校

近藤麻理子
前田 義江
高橋 理緒
谷内 春香
尾越 美緒
山田 真代
室井のりこ

B	住生活セミナー
---	---------

1 主な内容

①講話「住教育の大切さ」

「住まいや建物の基礎知識」

②実験「建て方による音の伝わり方の違い」

2 参加人数 13名

3 講師

北方建築総合研究所地域研究部

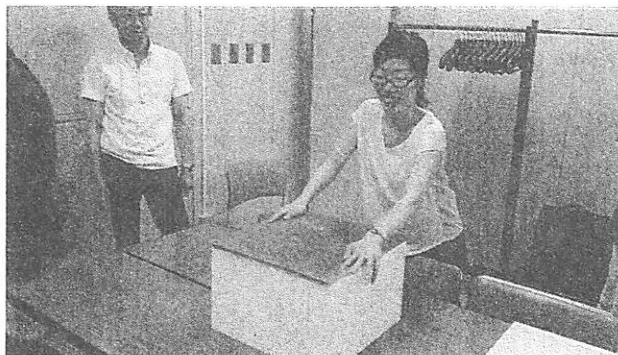
住居・防災グループ研究員 馬場 麻衣 氏

4 会場 北海道立道民活動センター

「かでる2・7」1020会議室

【 研修内容・成果 】

適切な住まいの選択ができる力を育成するためには、ライフステージと住まいとの関係において住要求と住宅事情の実態を理解させるとともに問題・課題意識を持たせ、生涯を見通した住まいの適切な選択眼を養うことが大切であることを学んだ。住居の分野は幅広いため、実験や実習・グループ討議や発表を取り入れると効果的であること等について豊富な資料のもとご教示頂いた。講座では、実験を通して室内環境を考える授業実践の例を体験したり、隣の人と話し合いをしたり、たくさんの資料やワークシートを頂いたりとすぐに授業で活用できる充実した研修内容であった。



【講座担当者】

江別高等学校 岩瀬張幸子
札幌清田高等学校 清野 祥子
江別高等学校 鈴木 朋美
礼文高等学校 山下 政俊
野幌高等学校 池田 麻子

C	家庭経営セミナー
---	----------

1 主な内容

①社会人になるための経済学

②カード社会の歩き方と借金問題

③社会保障制度とリスク管理

2 参加人数 27名

3 講師

北海道金融広報アドバイザー須藤 臣 氏

4 会場 北海道立道民活動センター

「かでる2・7」1010会議室

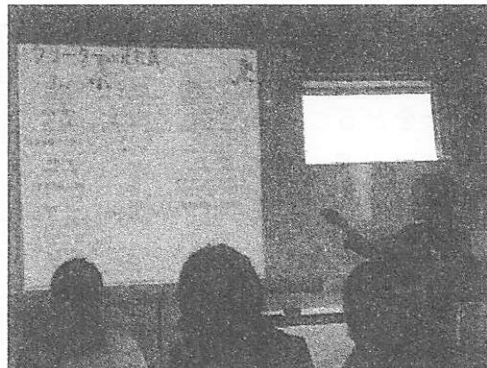
【 研修内容・成果 】

「社会人になるとはどういうことか」を高校生にどう伝えたらより伝わるか、給与と税金、勤務形態など教科書の内容を踏まえつつ、生徒が興味を持ちやすい部分をわかりやすく取り上げた講義を拝聴した。

またライフサイクルとマネープランをどのように考えるとよいか、カードやローンの仕組み、貯蓄に対する考え方など、経済的自立を図るための最新の知識や情報を教えていただいた。

金融広報中央委員会「知るぽると」のワークブック活用法の紹介や出前講座の案内などもあり、授業にすぐに活用できる情報が提供された。

私たち教員自身の生活を充実させるためのアドバイスも多く、充実した時間を過ごすことができた。



【講座担当者】

札幌手稲高等学校 東 昌江
札幌南高等学校 溝淵 和江
滝川高等学校 継田 華恵
富良野高等学校 岸本 美子
名寄産業高等学校 榊原しほじ
足寄高等学校 米根 順子

D	福祉セミナー
---	--------

1 主な内容

①講義 共に生きる力を考えよう

～そっと寄り添い・共に感動

五感で感じるデザイン～

②演習 視野狭窄や中心暗転の視覚機能低下

及び触覚機能低下を疑似体験

磁石ボタン（Gボタン）を使用した衣類の着脱

2 参加人数 14名

3 講師

株式会社 ワールドワーク

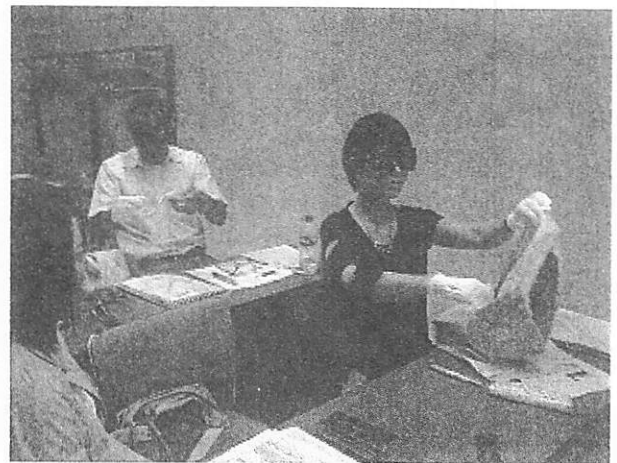
代表取締役 川道 昌樹 氏

4 会場 北海道立道民活動センター

「かでの2・7」540会議室

【 研修内容・成果 】

ユニバーサルデザインの洋服を開発するに至った経緯に始まり、少子高齢化の現状と影響、高齢期の特徴などと絡めて、ユニバーサルデザインについてお話しいただいた。途中、高齢者の着脱体験や視野狭窄メガネを用いた介助体験も行った。高齢者が1人で洋服を着ることができないという表面的な現象ばかり追っても解決にはつながらず、高齢者の特徴（五感機能の低下）を理解し根本的な原因を探ることが大切であること、また、高齢者は出かける機会（非日常）が多い時は元気でも、家にこもり日常が連続すると不調を訴えることが増えることから、日常と非日常をどう織り交ぜるかが大切であること、仲間と同じ洋服を着たい、おしゃれをしたいということがクリアされると出かけてみたくなるものであり、洋服が外に出るひとつのきっかけとなること、また、新しい時代をつくっていくのは生徒たち若い世代なので、その生徒たちに少しでもヒントになるバリアフリーやユニバーサルデザインを伝えたいというお話もあり、私たち教員の役割を改めて実感する、充実した研修となった。



【講座担当者】

置戸高等学校	宮崎 円
札幌厚別高等学校	笥 理子
当別高等学校	福本 智子
羽幌高等学校	笠島絵里奈
遠軽高等学校	橋本 晶子
静内高等学校	大森 裕介

北海道高等学校長協会家庭部会 調査研究委員会報告

調査研究委員長

(北海道津別高等学校長) 井 上 明 子

1 研究主題

問題解決能力、意思決定能力等を育成する
家庭科教育の在り方

2 平成27年度調査研究委員： ◎委員長

◎井上 明子(津別) 佐々木淑子(洞爺)
小路 修司(千歳北陽) 高瀬 雅朗(三笠)
山本 明敏(釧路明輝) 杉本 祐子(当別)
増田 雅彦(名寄産業) 西堀 隆亮(足寄)
河村 英二(倶知安) 花田 祐治(置戸)
福本 直人(札幌南陵) 鈴木 譲二(江陵)
池田 延己(函館大妻)

3 調査研究の視点

将来の変化を予測することが困難な時代において、現行の学習指導要領の趣旨を踏まえつつ家庭科教育を充実させるための視点を4つ定めた。この中でも次期学習指導要領の改訂に向け「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び(いわゆるアクティブ・ラーニング)」による授業改善が推進されていることを背景に今回の調査研究においては、4点目の問題解決能力、意思決定能力を育成する指導の充実に焦点を当てて取り組むこととした。

- (1) 社会の変化への対応として家庭科に求められる内容の充実
- (2) 生活の実践力(できる力)を育成する指導の充実
- (3) 生活を総合的にマネジメントする能力を育成する指導の充実
- (4) 問題解決能力、意思決定能力を育成する指導の充実

4 調査研究のスケジュール(平成27年4月から平成29年3月までの2年間)

(1) 調査研究内容の検討・決定

平成27年4月～5月

(2) アンケート調査の配信・実施

平成27年9月～10月

(3) アンケート調査・集計・分析・まとめ

平成28年12月～2月

(4) 実践事例の収集、指導資料の内容検討

平成28年2月～8月

(5) 実践事例、指導資料の編集・まとめ

平成29年1月

5 調査研究内容

(1) アンケート調査の概要

「家庭科教育の在り方及び実施状況」に関するアンケート

ア アンケート調査の対象

本校長協会に所属する全高等学校及び
公立中等教育学校(課程別・大学科別)

対象数：359

イ アンケート実施日

平成27年9月11日～10月5日

ウ アンケート調査の項目

(ア) 各校における家庭科科目履修状況について

(イ) 各校における家庭科教育で身に付けさせたい資質・能力について

→目標の明確化

(ウ) 各校における家庭科教育で重点を置いている指導内容について

→指導内容の明確化

(エ) 各校における家庭科教育で創意・工夫している、または教育効果の高い学習・指導方法について

→指導方法の明確化

(オ) 「ホームプロジェクト」「学校家庭クラブ活動」の内容、実施状況、教育的効果、課題等について

(カ) 「学校家庭クラブ連盟」の加入状況、

課題等について

- (キ) 生徒が主体となった能動的な学習の実
践例（記述式）

エ 回収結果

回答数 264（公立248、私立16）

回収率 73.5%

(2) アンケート調査結果

後に掲載するアンケート調査結果資料を
参照いただきたい。 P 2 4 ～ P 3 2

(3) 課題の整理・焦点化

ア 「ホームプロジェクト」「学校家庭クラブ
活動」が共通教科「家庭」の3科目いずれに
おいても「学校家庭クラブ連盟」加盟・未加
盟に係わらず必修指導項目である認識が低い。

イ 基礎・基本の習得が優先され、問題解決型
学習である「ホームプロジェクト」「学校家庭
クラブ活動」それぞれが総指導時間数1時間
以下である学校が4割を越え、十分に指導時
間が確保されていない。

ウ すでに実践している優れた体験的・実践的
学習活動や、校内外で行っている様々な教育
活動が、個別に総花的に実施されがちである。

(4) 課題解決へ向け

ア ねらい（身に付けさせたい力）を定め年度当
初から系統的・計画的にシラバス等へ位置付け
る。

・「ホームプロジェクト」や「学校家庭クラブ
活動」を適切に実施していないことに対して、
教員を強く指導し意識改革を迫るよりも、計画
的・段階的に取り組むことによる問題解決型学
習の有効性について理解を深め、取り組ませる
ことが効果的である。

・基礎・基本の習得を図る段階で授業の振り返
りや生徒同士で学んだことを確認し合う活動、
さらに普段から生徒が主体となり書く、話す、
発表するなど言語活動を充実させる活動を意図
的に取り入れるなど、段階的に問題解決型授業
を展開する工夫改善が必要である。

・アクティブ・ラーニングの視点に立った学習

方法には様々な技法があるが、高次元なレベル
である「問題解決型の学習」に対して、比較的
導入しやすい知識定着を目的としたまとめ・小
レポート作成、話し合い、プレゼンテーションと
いった演習を徐々に取り入れるなどのステップ
を踏む必要がある。基礎・基本の習得をひと通
り終えてから発展的に最後に問題解決型の学習
を取り入れようとしても、生徒にとっては急激
に高いハードルの学習となる可能性が高く、学
習効果が得られにくくなると思われる。

イ 実践している現在の取組等について視点を変
え見直しを図る。

・日頃、取り組んでいる体験的・実践的な学習
や様々な教育活動が自校において「ホームプロ
ジェクト」や「学校家庭クラブ活動」として実
施できないか検討を行う。

・「学校家庭クラブ活動」は「ホームプロジェク
ト」と同様に、生徒の汎用的能力や実践的態度
を育成するアクティブ・ラーニング型の授業形
態であること、各校で実施している他教科との
連携や、地域との連携活動及びボランティア活
動などへの参加に関連させ実施できないか検討
を行う。

・適切に実施していない学校については、現在
実践している様々な教育活動を、視点を変えて
見直すことにより「学校家庭クラブ活動」とし
て取り組んでいくことが効果的である。

(5) 次年度に向けて

次年度は、今年度の調査・研究の結果を基に、
学校の実情や生徒の実態を踏まえた実践事例の収
集や紹介、自校で取り入れやすいワークシートや
評価シート等の指導資料等や具体的指導方法を
提供し、最終報告としたい。

(6) 謝辞

最後になりますが、今年度実施したアンケート
調査では、ご協力をいただきました校長先生方
をはじめ、家庭科教員の皆様に心より感謝を申し上
げます。

「家庭科教育の在り方及び実施状況」に関するアンケート調査結果

全ての課程・学科

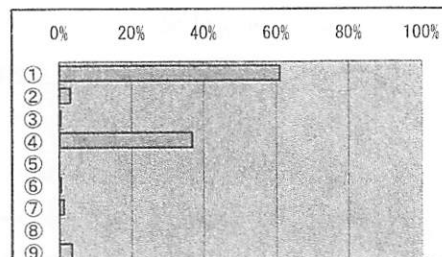
n=264

1 実施科目について

(1) 実施している共通教科「家庭」の科目名及び単位数

- ① 家庭基礎(2単位)
- ② 家庭基礎(3単位)
- ③ 家庭総合(3単位)
- ④ 家庭総合(4単位)
- ⑤ 家庭総合(5単位)
- ⑥ 生活デザイン(3単位)
- ⑦ 生活デザイン(4単位)
- ⑧ 生活デザイン(5単位)
- ⑨ その他

①	161	61.0%
②	8	3.0%
③	1	0.4%
④	97	36.7%
⑤	0	0.0%
⑥	1	0.4%
⑦	3	1.1%
⑧	0	0.0%
⑨	9	3.4%



その他⑨の記述: ・家庭総合6単位(3校)

・家庭総合4単位のうち1単位を小児看護で代替(1校)

・家庭基礎2単位が設定されているが、現在は研究指定校のため、特例措置として年間20時間程度実施。

・一般コースでは2年生から3年生で家庭総合4単位、文理クラスでは2年生の1年間家庭基礎2単位(1校)

・今年度から家庭総合4単位となり、家庭基礎2単位は現2学年の履修で終了

【結果】

(a)「家庭基礎」2単位実施校(学科)が6割を越え、「家庭総合」4単位実施校が4割弱となった。

(b)「家庭基礎」2単位実施については、学科別では総合学科で84.6%、学級数別では中規模校(13~18学級)で82.1%、大規模校(19学級以上)で78.6%となり、中~大規模校での実施率が高い。

(c)「家庭総合」4単位実施については、課程別では全日制で34.2%であるのに対して、定時制、通信制で57.6%と割合が高く、学科別では家庭に...る学科(60%)が最も高く、学級数別での小規模校(1~6学級)で57.8%と実施率が高い。

(d)「家庭基礎」を増単して「家庭基礎」3単位を実施している学校(学科)は、すべて職業学科8学科(工業5、農業2、商業1)であった。

【分析・考察】

(a)平成18年度、平成19年度の道教委調査時には「家庭基礎」2単位実施校が全体の約4割、「家庭総合」4単位実施校が全体の約6割を占めていたが、今調査により約10年を経て、その割合が反転したことが分かった。

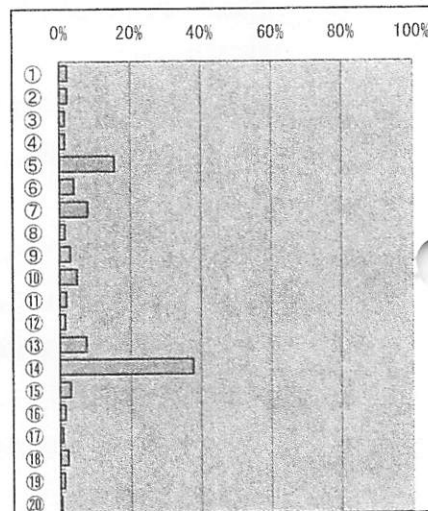
(b)平成28年度高校教科書採択状況(文部科学省)においては、「家庭基礎」77.1%(前年比0.5ポイント増)、「家庭総合」22.3%(同0.4ポイント減)となり、「家庭基礎」の比率が高まっている。しかし、全国と比較すると、「家庭基礎」の比率は低い状況である。

(c)「家庭基礎」増単(3単位)については、就職等で親元を離れ独立する生徒を想定し、生活の自立のための教科・科目として位置付け、生活に必要な基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を目指し実施しているものと思われる。

(2) 実施している専門教科「家庭」の科目名

- ① 生活産業基礎
- ② 課題研究
- ③ 生活産業情報
- ④ 消費生活
- ⑤ 子どもの発達と保育
- ⑥ 子ども文化
- ⑦ 生活と福祉
- ⑧ リビングデザイン
- ⑨ 服飾文化
- ⑩ ファッション造形基礎
- ⑪ ファッション造形
- ⑫ ファッションデザイン
- ⑬ 服飾手芸
- ⑭ フードデザイン
- ⑮ 食文化
- ⑯ 調理
- ⑰ 栄養
- ⑱ 食品
- ⑲ 食品衛生
- ⑳ 公衆衛生

①	6	2.3%
②	6	2.3%
③	4	1.5%
④	4	1.5%
⑤	41	15.5%
⑥	11	4.2%
⑦	21	8.0%
⑧	4	1.5%
⑨	8	3.0%
⑩	13	4.9%
⑪	5	1.9%
⑫	4	1.5%
⑬	20	7.6%
⑭	100	37.9%
⑮	8	3.0%
⑯	4	1.5%
⑰	2	0.8%
⑱	6	2.3%
⑲	3	1.1%
⑳	1	0.4%



【結果】

(a)全体で最も割合が高かったのが「フードデザイン」で全体の約40%を占め、学科別では総合学科においては84.6%で最も高く、学級数別では小規模校(1~6学級)で56.7%と高いが規模が大きくなるに従い漸減する。定時制・通信制課程においても33.3%の実施率となっており最も実施率の高い科目である。

(b)2番目に割合が高かったのが「子どもの発達と保育」で全体の15.5%を占め、学科別では総合学科においては46.2%で最も高く、学級数別では小規模校(1~6学級)で23.3%と高いが規模が大きくなるに従い漸減する。定時制・通信制課程においても13.3%の実施率となっており2番目に高い科目である。

(c)3番目に割合が高かったのが「生活と福祉」8%で、続いて「服飾手芸」7.6%となった。

【分析・考察】

(a)教育課程の弾力化・多様化が進み、普通科においても、総合学科や単位制等のように共通教科の単位数を最小に、かつ、できるだけ多くの選択科目を置いて生徒の多様なニーズや進路に対応している各学校(学科)の状況がうかがえる。

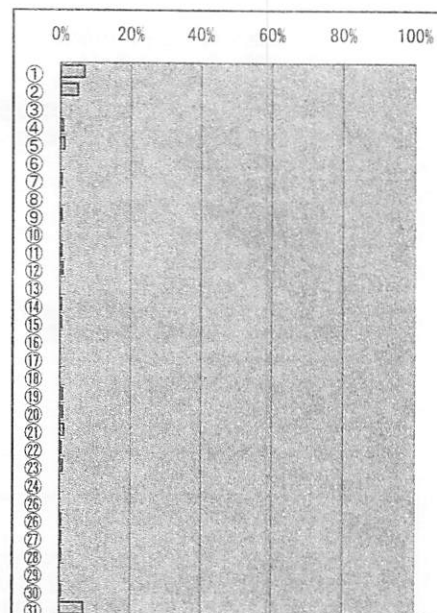
(b)「フードデザイン」以外の食に関する科目や、「服飾手芸」以外の衣に関する科目は、家庭に関する学科や調理師養成系学科で実施する傾向がある。

(c)学習指導要領において普通科等で履修することが考えられる職業科目として、「フードデザイン」「子どもの発達と保育」「生活と福祉」を含む7科目が示されている。左記科目のほかに「消費生活」「子ども文化」「リビングデザイン」「ファッション造形基礎」となっているが、「消費生活」「リビングデザイン」の実施率は低い状況にある。

(3) 開設している学校設定科目名

- ① 生活教養
- ② ライフデザイン
- ③ 生活科学
- ④ 生活文化
- ⑤ 生活と地域
- ⑥ 生活福祉基礎
- ⑦ 生活福祉デザイン
- ⑧ 生活福祉実習
- ⑨ 生活福祉援助技術
- ⑩ 福祉コミュニケーション
- ⑪ 被服構成
- ⑫ 被服技術と理論
- ⑬ 手芸
- ⑭ 子どもの言語表現
- ⑮ 音楽リズム
- ⑯ 調理理論
- ⑰ 調理基礎
- ⑱ 調理実習
- ⑲ 食物
- ⑳ くらしと食物
- ㉑ 食物研究
- ㉒ 食文化研究
- ㉓ 調理研究
- ㉔ 食文化概論
- ㉕ 食文化とマナー
- ㉖ 保育介護基礎
- ㉗ 染織制作
- ㉘ 染物と織物
- ㉙ 羊と織物
- ㉚ 色彩とデザイン
- ㉛ その他

①	18	6.8%
②	13	4.9%
③	0	0.0%
④	2	0.8%
⑤	3	1.1%
⑥	0	0.0%
⑦	1	0.4%
⑧	0	0.0%
⑨	1	0.4%
⑩	0	0.0%
⑪	1	0.4%
⑫	2	0.8%
⑬	0	0.0%
⑭	1	0.4%
⑮	1	0.4%
⑯	0	0.0%
⑰	0	0.0%
⑱	0	0.0%
⑲	2	0.8%
⑳	2	0.8%
㉑	3	1.1%
㉒	1	0.4%
㉓	2	0.8%
㉔	0	0.0%
㉕	0	0.0%
㉖	1	0.4%
㉗	1	0.4%
㉘	1	0.4%
㉙	0	0.0%
㉚	1	0.4%
㉛	18	6.8%



その他㉛の記述: ライフサイエンスB、地域開発と食、食文化とマナー、福祉と手話Ⅰ、福祉と手話Ⅱ、福祉コミュニケーション、生活と福祉(3校)、生活学、食物デザイン、子どもの発達と保育、農業農村ライフ、形態別介護技術、調理理論、食文化概論、調理実習、栄養学、食物実践、生活設計、家庭科演習、総合表現Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ(フードクッキング)、食育、ライフプランニング

【結果】

(a)実施率が高いのが「生活教養」(6.8%)、「ライフデザイン」(4.9%)であり、2科目とも普通科と総合学科でのみ実施している。

【分析・考察】

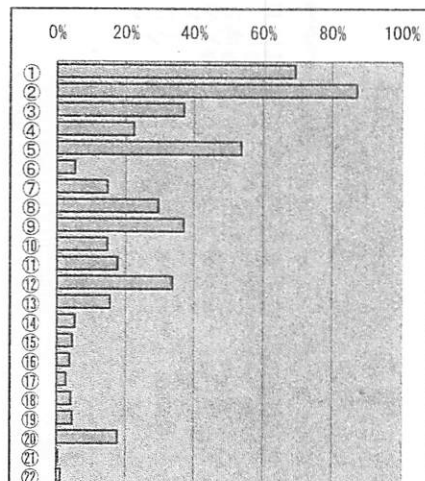
(a)「生活教養」や「ライフデザイン」については、食や衣など特定の分野を限定されずに広く指導ができる汎用性が高いという観点から、設定したと思われる。

2 指導内容について

(1) 家庭科教育の実践を通して、生徒に特に身に付けさせたい資質・能力(5つまで)

- ① 衣食住の実践力
- ② 生活の自立能力
- ③ 生活を改善する力
- ④ 生活を創造する力
- ⑤ 他者と協働する力
- ⑥ 地域を見直す力
- ⑦ 地域に貢献する力
- ⑧ 課題を発見し解決する力
- ⑨ 主体的に生活する力
- ⑩ 生活を科学的に探究する力
- ⑪ 生涯生活設計力
- ⑫ コミュニケーション能力
- ⑬ 意思決定能力
- ⑭ 危機(リスク)管理能力
- ⑮ 情報活用能力
- ⑯ 批判的思考力
- ⑰ 論理的思考力
- ⑱ 創造的思考力
- ⑲ 合理的判断力
- ⑳ 自己表現力
- ㉑ マネジメント能力
- ㉒ その他

①	183	69.3%
②	230	87.1%
③	98	37.1%
④	59	22.3%
⑤	142	53.8%
⑥	14	5.3%
⑦	39	14.8%
⑧	78	29.5%
⑨	98	37.1%
⑩	39	14.8%
⑪	47	17.8%
⑫	89	33.7%
⑬	41	15.5%
⑭	14	5.3%
⑮	12	4.5%
⑯	10	3.8%
⑰	7	2.7%
⑱	11	4.2%
⑲	12	4.5%
⑳	47	17.8%
㉑	1	0.4%
㉒	3	1.1%



その他㉒の記述: 言葉遣い、四則計算、慣習・習俗の理解と活用、社会に必要な力を身に付けさせられるような実践力、根拠に基づいた生活力、プレゼンテーション能力、生徒一人一人の潜在能力、人から愛されるという実感がわかる資質

【結果】

(a)全体で最も割合が高かったのが、「生活の自立能力」で9割弱(87.1%)で、定時制・通信制課程では96.7%とさらに高く、学科別では普通科で84.9%、専門学科(理数、外国語)(100%)、職業学科(86.2%)、総合学科(92.3%)となった。

(b)2番目に割合が高かったのが「衣食住の実践力」が7割弱(69.3%)で、特に学科別では職業学科で75.4%で、また定時制・通信制課程で73.3%と割合が高かった。

(c)3番目が「他者と協働する力」で5割強(53.8%)となり、特に小規模校(1~6学級)で65.6%と割合が高かった。

(d)4番目に「生活を改善する力」(37.1%)と「主体的に生活する力」(37.1%)となり、6番目に「コミュニケーション能力」(33.7%)となった。

【分析・考察】

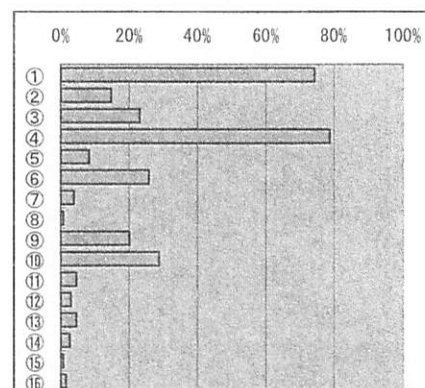
(a)上記の結果から、生徒自身が現在及び将来の生活を自立的に営み実践していく力を身に付けさせることを最優先として考え、自校の家庭科教育に取り組んでいることがうかがえる。

(b)生徒個々の自立を支える資質能力の育成のほかに、めまぐるしく変化する社会を背景とした時代の要請に応じて、他者と協働することやそれに必要なコミュニケーション能力の育成を図ることの大切さも踏まえ、実践していると思われる。

(2) 生徒に対して、特に重点を置いて実践している家庭科教育の内容(3つ)

- ① 生活の自立と生活の改善
- ② 家庭を築くことの重要性
- ③ 生涯生活設計・経済計画
- ④ 衣食住等に係る知識・技能の習得及び実践
- ⑤ 高齢者理解・支援する行動力
- ⑥ 子育て理解
- ⑦ 環境教育
- ⑧ 防災教育
- ⑨ 消費者教育
- ⑩ 食育の推進
- ⑪ 生活文化の伝承
- ⑫ シチズンシップ(市民性)教育
- ⑬ 男女共同参画社会の推進
- ⑭ ホームプロジェクト
- ⑮ 学校家庭クラブ活動
- ⑯ その他

①	196	74.2%
②	39	14.8%
③	61	23.1%
④	208	78.8%
⑤	22	8.3%
⑥	68	25.8%
⑦	10	3.8%
⑧	2	0.8%
⑨	53	20.1%
⑩	76	28.8%
⑪	12	4.5%
⑫	8	3.0%
⑬	12	4.5%
⑭	7	2.7%
⑮	2	0.8%
⑯	4	1.5%



その他⑯の記述: 看護や介護など、福祉に関する知識と実践、家庭科の分野を利用し授業を聴く姿勢、地産地消、地域交流学習

【結果】

(a)全体で最も割合が高かったのが、「衣食住等に係る知識・技能の習得及び実践」で約8割(78.8%)となり、特に職業学科(80.0%)、総合学科(84.6%)、定時制・通信制課程(86.7%)と高くなっている。
 (b)2番目に割合が高かったのが、「生活の自立と生活の改善」で約7割強(74.2%)で、3番目が「食育の推進」(28.8%)、続いて「子育て理解」(25.8%)、「生涯生活設計・経済計画」(23.1%)、「消費者教育」(20.1%)となった。

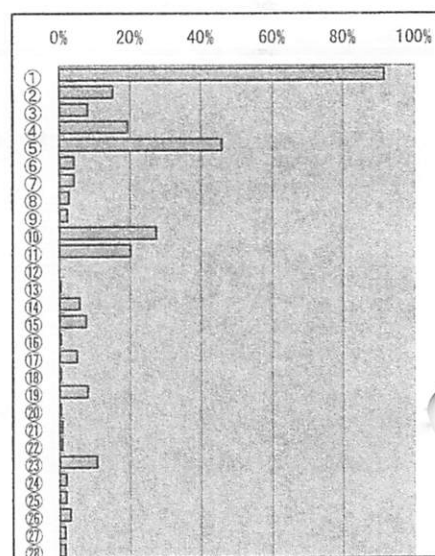
【分析・考察】

(a)生活の自立を図る上で必要な衣食住等の生活に関する基礎的・基本的な知識・技術の習得と実践的な態度の育成を最も重要視し、さらに生活の充実とともに生活の充実向上を目指した生活の改善が分野に限定せず、実施していることが分かる。
 (b)社会が大きく変化する中、社会からの要請として挙げられた課題の中でも、食習慣の乱れや生活習慣病の増加などへの対応として食育、少子高齢化への対応としての子育て理解、高齢者を中心とした金銭詐欺やネットトラブルなどへの対応として消費者教育など、自校の生徒の実態を踏まえつつ、自立した生活者を育成する教科として家庭科教育の役割を自覚し、取り組んでいると思われる。

(3) 生徒に対して、上記(1)の資質・能力を育成するために、特に創意・工夫している、または教育的効果があったと思われる学習・指導方法(3つ)

- ① 実験・実習
- ② 観察・まとめ
- ③ ICTの活用
- ④ グループ討議
- ⑤ グループワーク
- ⑥ ディベート
- ⑦ ロールプレイング
- ⑧ プレゼンテーション
- ⑨ 成果発表
- ⑩ 作品制作・発表
- ⑪ レポート作成・発表
- ⑫ 中高連携
- ⑬ 高大連携
- ⑭ 社会人講師講話
- ⑮ 地域社会連携
- ⑯ 企業連携
- ⑰ 異世代交流
- ⑱ 施設見学
- ⑲ 施設訪問
- ⑳ 就業体験
- ㉑ 発見学習
- ㉒ 調査研究学習
- ㉓ 問題解決学習
- ㉔ 商品開発・企画
- ㉕ 事例研究
- ㉖ ホームプロジェクト
- ㉗ 学校家庭クラブ活動
- ㉘ その他

①	242	91.7%
②	40	15.2%
③	21	8.0%
④	51	19.3%
⑤	121	45.8%
⑥	11	4.2%
⑦	11	4.2%
⑧	7	2.7%
⑨	6	2.3%
⑩	72	27.3%
⑪	53	20.1%
⑫	0	0.0%
⑬	1	0.4%
⑭	15	5.7%
⑮	20	7.6%
⑯	1	0.4%
⑰	13	4.9%
⑱	1	0.4%
⑲	21	8.0%
⑳	1	0.4%
㉑	2	0.8%
㉒	2	0.8%
㉓	28	10.6%
㉔	5	1.9%
㉕	5	1.9%
㉖	8	3.0%
㉗	4	1.5%
㉘	4	1.5%



その他㉘の記述: 時事問題の提示、異世代交流を通して課題解決のためのインシデントプロセス、家族家庭のところで、家族ドラマの作成・発表、施設訪問はこれから実施

【結果】

(a)最も割合が高かったのが「実験・実習」(91.7%)で9割以上を占め、学科別では普通科(93.4%)、専門学科(100%)、職業学科(92.3%)、総合学科(69.2%)となった。
 (b)2番目に割合が高かったのが「グループワーク」で約5割強(45.8%)となり、3番目が「作品制作・発表」(27.3%)で、続いて「レポート作成・発表」(20.1%)、「グループ討議」(19.3%)、「観察・まとめ」(15.2%)となった。
 (c)3番目の「作品制作・発表」については、特に定時制・通信制課程(50.0%)、職業学科(30.8%)、総合学科(30.8%)で割合が高く、4番目の「レポート作成・発表」については、特に総合学科(38.5%)で割合が高かった。
 (d)総合学科においては、他学科が「実験・実習」が9割以上を占める中、「社会人講師講話」(23.1%)、「異世代交流」(23.1%)の割合も他学科に比べ高かった。

【分析・考察】

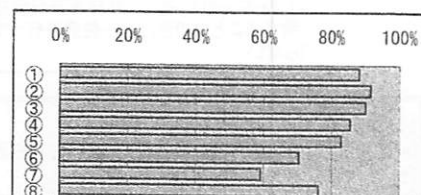
(a)従来から家庭科においては、10分の5以上を実験・実習に配当するよう定められてきたが、それを踏まえ、実践しているのが分かる。また、それらの「実験・実習」には調査・研究、観察・見学、就業体験、乳幼児や高齢者との触れ合いや交流活動などの学習活動も含まれ、様々な活動を網羅している内容として回答したと思われる。
 (b)全体で約半数の学校(学科)が、「グループワーク」を教育効果の高い学習活動として挙げ、さらに「グループ討議」に限定した項目においても、2割近くの学校が効果的と回答し、言語活動の充実への取組も推進されていることがうかがえる。

3 「ホームプロジェクト」及び「学校家庭クラブ活動」について

(1) 「ホームプロジェクト」と「学校家庭クラブ活動」に関することがらについて知っていること(すべて選択)

- ① 学習指導要領では、必修教科目「家庭基礎」「家庭総合」「生活デザイン」のいずれにおいても、指導すべき項目として位置付けられている。
- ② 「ホームプロジェクト」と「学校家庭クラブ活動」のどちらも、主体的に課題を見出すという課題の発見と解決に向けた問題解決的学習活動である。
- ③ 「ホームプロジェクト」の指導に当たっては、学習内容を各自の家庭生活と結び付けて考えさせ、常に課題意識を持たせるようにして題目を選択させる。
- ④ 「ホームプロジェクト」は、計画、実行、反省・評価の流れに基づいて行い、実施後は、次の課題につなげるとともに、成果の発表会を行うものとする。
- ⑤ 「ホームプロジェクト」は、家庭生活の課題を解決するために個人で行う研究・実践活動であり、「学校家庭クラブ活動」は、学校生活や地域社会の課題をグループや学校単位で改善・解決を目指し、活動する学習である。
- ⑥ 学校家庭クラブ連盟は、「ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動」を支援し、生徒の活動成果を発表する大会を主催したり、クラブ員同士の情報交換や交流ができるよう企画したりする任意の団体である。
- ⑦ 学校家庭クラブ連盟に加入するには、生徒は何人からでも加入できる。
- ⑧ 北海道では、毎年、全道家庭クラブ連盟研究発表大会を開催し、「ホームプロジェクトの部」と「学校家庭クラブ活動の部」において、全国への代表者を選出している。

①	233	88.3%
②	242	91.7%
③	238	90.2%
④	226	85.6%
⑤	219	83.0%
⑥	186	70.5%
⑦	156	59.1%
⑧	201	76.1%



【結果】

(a)学習指導要領での位置付けについての認識は高い(88.3%)。

(b)「ホームプロジェクト」と「学校家庭クラブ活動」のどちらも課題発見、問題解決的学習と認識され、また認知の割合も9割以上を占めている。(②91.7%、③90.2%)

(c)家庭クラブ連盟の組織や具体的な加入方法などについては、他の事項に比べやや理解度が低い状況にある。(⑥70.5%、⑦59.1%)

【分析・考察】

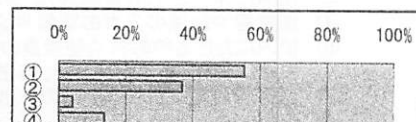
(a)「ホームプロジェクト」と「学校家庭クラブ活動」のねらいや意義については、理解がされていることから、授業実践ができる環境整備(時間の確保、指導事例や具体的な指導方法等の提供)が必要である。

(b)学校家庭クラブ連盟加盟の可否とは関わりなく、学習内容として学校家庭クラブ活動が必修事項であること、学校家庭クラブ連盟についても、加入は任意であること、生徒は何人からでも加入できるなど、具体的な場面を想定して周知する必要がある。

(2) 「ホームプロジェクト」の指導の場面(複数選択可)

- ① 授業中
- ② 長期休業中
- ③ 放課後
- ④ その他

①	146	55.3%
②	97	36.7%
③	11	4.2%
④	36	13.6%

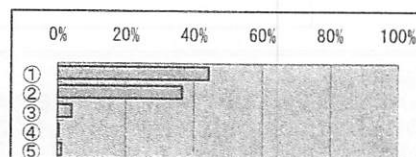


その他④の記述: ・今年度まだ実施していない ・昼休み ・各単元の中の家庭での取り組みとして実施 ・今後実施予定 ・このような活動があるということにふれ紹介 ・長期休業中に家庭で調理をする課題を実施 ・事前指導後、長期休業中の課題として取り組ませ、優れた内容については、授業の中で紹介 ・1学年:衣生活を確立・改善、2学年:1日の食事を全て書き、感想・改善、地域に見合った創作料理を立案・調理

ア 「ホームプロジェクト」の総指導時間

- ① 0~1単位時間
- ② 2~5単位時間
- ③ 6~10単位時間
- ④ 11~15単位時間
- ⑤ 16単位時間以上

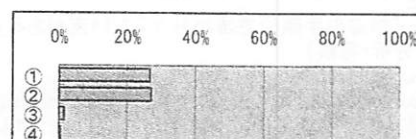
①	117	44.3%
②	96	36.4%
③	11	4.2%
④	1	0.4%
⑤	3	1.1%



イ 「ホームプロジェクト」の授業中の年間指導時間(配当単位時間)

- ① 0~1単位時間
- ② 2~5単位時間
- ③ 6~10単位時間
- ④ 11単位時間以上

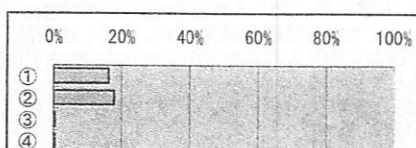
①	70	26.5%
②	71	26.9%
③	4	1.5%
④	1	0.4%



ウ 「ホームプロジェクト」の長期休業中の年間指導時間

- ① 0~1単位時間
- ② 2~5単位時間
- ③ 6~10単位時間
- ④ 11単位時間以上

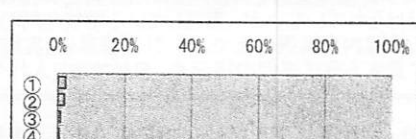
①	43	16.3%
②	47	17.8%
③	1	0.4%
④	1	0.4%



エ 「ホームプロジェクト」の放課後の年間指導時間

- ① 0~1単位時間
- ② 2~5単位時間
- ③ 6~10単位時間
- ④ 11単位時間以上

①	6	2.3%
②	5	1.9%
③	2	0.8%
④	1	0.4%



【結果】

(a)指導の場面は半数以上が授業時間であると回答しており(55.3%)、さらに長期休業中を活用している学校も少なくない(36.4%)。

(b)放課後を活用しての指導(4.2%)については、かなり低い。

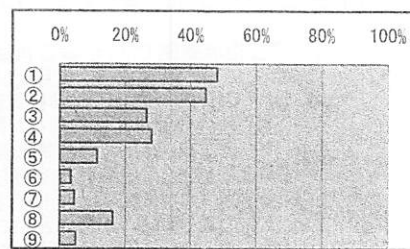
(c)「ホームプロジェクト」の総指導時間数が0~1単位時間である学校が4割を越え(44.3%)、全体で見ると、長期休業中を活用しても十分に時間が確保されていない。

【分析・考察】

(a)実施時間から想定すると、紹介のみで終わらせている。もしくは授業においては、「ホームプロジェクト」の学習の概要等(課題の発見、計画、実行、評価、改善)を説明し、長期休業中や家庭学習(個人の取組)となり、宿題として提出させている学校(学科)も多いのではないと思われる。

(3) 「ホームプロジェクト」を指導した中で、特に教育的効果があったと思われるもの(3つまで)

① 生活(家庭)を見直す力(課題を発見する力)が身に付いた。	① 127 48.1%
② 学習内容と各自の生活を関連付ける力(結び付ける力)が身に付いた。	② 118 44.7%
③ 生活(家庭)を改善する力や創意工夫する力が身に付いた。	③ 70 26.5%
④ 生活(家庭)を改善しようとする実践的態度が身に付いた。	④ 74 28.0%
⑤ 自主性や積極性が身に付いた。(発揮している)	⑤ 30 11.4%
⑥ 協調性(協働性)が身に付いた。(発揮している)	⑥ 9 3.4%
⑦ コミュニケーション能力が身に付いた。(向上した)	⑦ 12 4.5%
⑧ 発表力(表現力)やまとめる力が身に付いた。(発揮している)	⑧ 43 16.3%
⑨ その他	⑨ 13 4.9%



その他⑨の記述：・今年度まだ実施していないため、効果が期待されるものを選択・今後予定のため回答なし・自分、家族の生活の改善点を改めて考えることができた。・発表を行っていないため、個人の技術の向上が成果である。・指導時間が多くないこともあり、特に効果を感じていない。・分からない

【結果】

(a)教育効果として割合が高かったのが、「生活(家庭)を見直す力(課題を発見する力)」(48.1%)、「学習内容と生活を関連付ける力」(44.7%)となった。

(b)「生活を改善する力や実践的態度が身に付いた」という回答も3割弱あげられた。

【分析・考察】

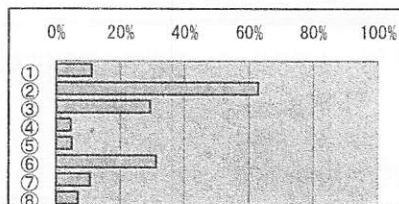
(a)これらの活動から生活を見直す力や学んだ学習内容と各自の生活を結び付け学びを実生活に生かす力や実践的態度の育成など、教育的な効果を感じている教員がいる一方で、未実施と回答したところや、指導時間が多くないことから効果を感じていない、発表を行っていないなどの回答もあり、生徒のレポート等の提出などで終了させ、教育効果が感じられない、分からないという記述もあった。

(b)教員自身が家庭科教育の中で、ホームプロジェクトの学習経験がないことも推測され、教育効果を感じられないという認識がある。

(c)未実施のため、もしくは家庭クラブ連盟へは非加盟であるため回答できないという記載も多くあり、連盟加盟と関わりなく家庭科の必修科目の3科目の全てにおいて必須な指導事項である認識が十分ではないと思われる。

(4) 「ホームプロジェクト」を指導した中で、特に問題と捉えているもの(全て選択)

① 指導の手順や方法が分からない面がある。	① 29 11.0%
② 生徒の学習時間・活動時間の確保が難しい。	② 166 62.9%
③ 指導に伴う時間(教員側)の確保が難しい。	③ 77 29.2%
④ 保護者や地域の方々の理解や協力が得られにくい。	④ 12 4.5%
⑤ 校内における他教科や他教員の理解や協力が得られにくい。	⑤ 13 4.9%
⑥ 生徒に興味・関心を持たせ、自主的な活動にすることが難しい。	⑥ 82 31.1%
⑦ 指導や活動に関わる費用の捻出に苦慮している。	⑦ 28 10.6%
⑧ その他	⑧ 18 6.8%



その他⑧の記述：・今年度まだ実施していないので、分からない・専任教諭がいなかったため、指導が困難である。
・生活の基盤が成り立っていない家庭が多い。・個人情報の管理・全員同じテーマで行っているため、個々の違う課題を解決するまでには至っていない。
・生徒の家庭環境(全校生徒の約40%が児童養護施設より通学)
・商業科の授業で『課題研究』という科目を2単位実施しており、家庭科の授業での実施は1~2時間である。
・上記⑥について、一部の生徒に見られる。・本校の総合的な学習などで課題解決学習をしているので、家庭科として特に力を入れていない。・生活を改善する課題を探し出せず、薄い内容になりがちな生徒への助言・対応。
・生徒の学力差が大きく、進め方が難しい。・基礎科目の内容がある程度終了してから行おうと考えていたため、十分な指導時間がとれず、紹介で終わった。

【結果】

(a)特に問題と捉えている理由として、「生徒の学習時間・活動時間の確保が難しい」(62.9%)が最も割合が高く、また逆に、「教員側の指導に伴う時間の確保が難しい」(29.2%)という回答も多くあり、指導に当てる時間の確保ができない、時間の余裕がないという回答が圧倒的に多かった。

(b)理由の2番目に挙げられているものとして、「生徒に興味・関心を持たせ、自主的な活動にすることが難しい」(31.1%)という回答も割合として高かった。

(c)「指導の手順や方法が分からない面がある」(11.0%)と回答した割合も、決して低いとは言えず、見過ごせない状況である。

【分析・考察】

(a)時間の確保が大きな問題といえる。

(b)基礎的な知識・技術の習得に時間がとられ、既習事項を活用する、もしくは実生活でやってみようということが、応用的・発展的な学習と捉えられ、基礎基本の習得終了後に実施予定し、導入できていないケースも多いと予想される。

(c)基礎基本の習得を図る段階で授業の振り返りや生徒同士で学んだことを確認し合う活動、さらに普段から生徒が主体となった場面(書く、話す、発表する)を意図的に取り入れるなどして、段階的に問題解決型授業を展開するなど工夫改善が必要である。アクティブ・ラーニングの学習方法として、高次元なレベルである問題解決学習に対して、比較的、レベルの低い知識定着を目的としたまとめ・小レポート作成、話し合い、プレゼンテーションなど演習や実習を徐々に取り入れるなどのステップを踏まずに最後に取り入れようとしても生徒にとっては、急激に高いハードルの学習となり、学習効果が得られにくくなると思われる。

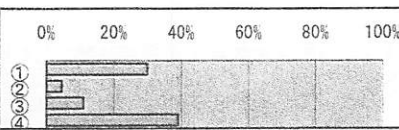
(d)課題発見が自主的に行えない場合は、数人で話し合わせたり、教師が相談に乗って課題に気づかせる支援をするなど、ステップ毎に実現状況の確認が必要である。

(e)学習指導要領を再度確認の上、科目の指導内容の精選も必要である。たとえば現行学習指導要領上では「家庭基礎」の指導内容に被服製作は位置付けられていないが、実施している学校(学科)も多いのが現状である。

(f)指導内容精選の上で、特に「家庭基礎」実施校においては、効率のよい指導方法や、生徒が興味関心をもつ指導内容の工夫改善が必要であり、それに資する実践事例の提示や、自校で取り入れやすいワークシートや評価シート等の指導資料提供なども効果的と考える。

(5) 「学校家庭クラブ活動」の指導の場面((複数選択可))

① 授業中	① 79 29.9%
② 長期休業中	② 12 4.5%
③ 放課後	③ 29 11.0%
④ その他	④ 103 39.0%

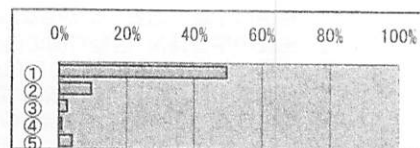


その他④の記述：・今年度まだ実施していない・内容紹介のみ・学校休業日に、学校外で活動を行う。・農業クラブ活動(水産クラブ)の指導内において、家庭クラブ等の学科クラブについて学ぶ・一日体験入学などの学校行事の際の補助活動・学校祭バザーでのマドレーヌ販売、お菓子講習会の開催・今年度「学校家庭クラブ同好会」として部活動を立ち上げた。現在、地域と連携した食育活動を展開しており、体制が整いし連盟への加入も考えている。

ア「学校家庭クラブ活動」の総指導時間

- ① 0～1単位時間
- ② 2～5単位時間
- ③ 6～10単位時間
- ④ 11～15単位時間
- ⑤ 16単位時間以上

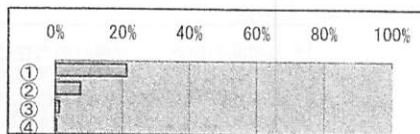
①	131	49.6%
②	25	9.5%
③	6	2.3%
④	2	0.8%
⑤	10	3.8%



イ「学校家庭クラブ活動」の授業中の年間指導時間(配当単位時間)

- ① 0～1単位時間
- ② 2～5単位時間
- ③ 6～10単位時間
- ④ 11単位時間以上

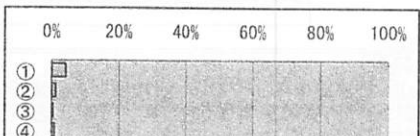
①	56	21.2%
②	20	7.6%
③	3	1.1%
④	1	0.4%



ウ「学校家庭クラブ活動」の長期休業中の年間指導時間

- ① 0～1単位時間
- ② 2～5単位時間
- ③ 6～10単位時間
- ④ 11単位時間以上

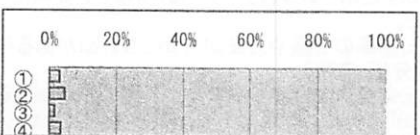
①	11	4.2%
②	3	1.1%
③	1	0.4%
④	2	0.8%



エ「学校家庭クラブ活動」の放課後の年間指導時間

- ① 0～1単位時間
- ② 2～5単位時間
- ③ 6～10単位時間
- ④ 11単位時間以上

①	8	3.0%
②	12	4.5%
③	4	1.5%
④	9	3.4%



【結果】

- (a)「学校家庭クラブ活動」の指導の場面として、約3割が授業中(29.9%)と回答し、全体の5割以上の実施率である「ホームプロジェクト」に比べ、「学校家庭クラブ活動」の授業中実施率が低い。
- (b)その他の回答も多く(39.0%)、そのうち8割以上の学校(学科)で今年度未実施という回答であった。(83.5%)
- (c)「ホームプロジェクト」に比べ、放課後を活用して実施している割合が高い。(11.0%)
- (d)「学校家庭クラブ活動」の指導時間については、約半数の学校が、0～1単位時間という回答であった(49.6%)。

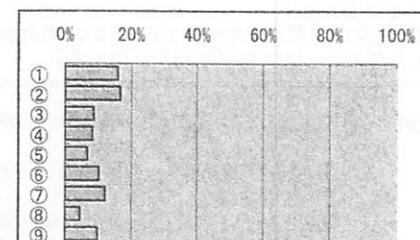
【分析・考察】

- (a)「学校家庭クラブ活動」の実施率より「ホームプロジェクト」の実施率の高い理由としては、長期休業中を活用するなどして取り組ませたり、活動の評価についても個人評価しやすいなどの実施上の取り組みやすさがあると思われる。
- (b)「家庭クラブ連盟」に未加盟なため「学校家庭クラブ活動」を実施していないという回答もあり、加盟に関わらず必修事項であるということが十分に理解されていない状況にある。
- (c)特に、「家庭基礎」においては、単位数が少ないので、ホームルーム活動や生徒会活動、学校行事、「総合的な学習の時間」など、学校全体の教育活動と関連を図るなど、効果的な指導が必要である。
- (d)地域との連携を図る上で有効であると認識されており、現在、地域と連携した食育活動を展開しており、体制が整いしだい連盟への加入も考えているという頼もしい回答もあった。

(6)「学校家庭クラブ活動」を指導した中で、特に教育的効果があつたと思われるもの(3つまで)

- ① 生活(家庭)を見直す力(課題を発見する力)が身に付いた。
- ② 地域や社会を見直す力(課題を発見する力)が身に付いた。
- ③ 生活(家庭)を改善する力や創意工夫する力が身に付いた。
- ④ 学校生活や地域社会を改善しようとする実践の態度が身に付いた。
- ⑤ リーダー性や積極性が身に付いた。(発揮している)
- ⑥ 協調性(協働性)が身に付いた。(発揮している)
- ⑦ コミュニケーション能力が身に付いた。(向上した)
- ⑧ 発表力(表現力)やまとめる力が身に付いた。(発揮している)
- ⑨ その他

①	42	15.9%
②	44	16.7%
③	23	8.7%
④	22	8.3%
⑤	18	6.8%
⑥	27	10.2%
⑦	32	12.1%
⑧	12	4.5%
⑨	26	9.8%



その他⑨の記述：・今年度まだ実施していない・食(調理等)に関する興味関心を持ち、実践しようとする態度が身につくことある。・自分の住む地域の問題点を考えることができた。・本校は学校家庭クラブ連盟に3年前に加入し、その都度希望者がお菓子講習会に参加するという形で行っている。部活動と平行して参加している生徒も多いため、参加するメンバーも毎回異なる。発表を行えるような活動はしていない状況である。・指導時間が多くないこともあり特に効果を感じていない。

【結果】

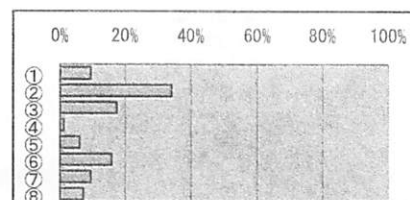
- (a)回答が得られた中では、「地域や社会を見直す力(課題を発見する力)が身に付いた」(16.7%)、「生活(家庭)を見直す力(課題を発見する力)が身に付いた」(15.9%)という割合が比較的高かった。
- (b)次に、「コミュニケーション能力の向上」(12.1%)や「協調性(協働性)が身に付いた」(10.2%)という割合も比較的高かった。
- (c)回答がされていなかったり、「その他」として回答されているが、実施例や内容の紹介にとどまっている、また指導時間が多くないこともあり、特に効果を感じていないという記載もあった。

【分析・考察】

- (a)学習指導要領解説には、家庭科の授業の一環として、計画、立案、参加させること、と表記され、すべての活動を授業中に実施しなければならない、もしくは放課後等に生徒全員が参加しなければならないなど、と解釈されているのではないかと懸念される。
- (b)授業時間と放課後等の授業時間以外の他の時間を組み合わせて実施するなど弾力的に取り組まなければ、十分な活動が展開できず、教育効果は得られにくくなると思われる。
- (c)「ホームプロジェクト」と同様に、生徒の汎用的能力や実践の態度を育成するアクティブラーニング型の授業形態であること、各校で実施している地域との連携活動やボランティア活動などへの参加などに関連させ実施することが可能であることなど、周知し、活動取組への理解を深める必要がある。
- (d)実施していないことに対して、一から新たに始めるよう働きかけるといよりも、今、実践している様々な教育活動に対して、視点を変え見直し「学校家庭クラブ活動」として関連させ取り込んでいくことが効果的と考える。

(7) 「学校家庭クラブ活動」を指導した中で、特に問題と捉えているもの(全て選択)

① 指導の手順や方法が分からない面がある。	① 25	9.5%
② 生徒の学習時間・活動時間の確保が難しい。	② 90	34.1%
③ 指導に伴う時間(教員側)の確保が難しい。	③ 46	17.4%
④ 保護者や地域の方々の理解や協力が得られにくい。	④ 3	1.1%
⑤ 校内における他教科や他教員の理解や協力が得られにくい。	⑤ 16	6.1%
⑥ 生徒に興味・関心を持たせ、自主的な活動にすることが難しい。	⑥ 42	15.9%
⑦ 指導や活動に関わる費用の捻出に苦慮している。	⑦ 25	9.5%
⑧ その他	⑧ 19	7.2%



その他⑧の記述：・家庭科の専任教諭がいなく、指導が困難である。・3年生で家庭基礎を履修する生徒たちが、2年生の選択授業での実施のため、授業との関連がはかれない。また、部活動ではなく、放課後の活動もほお行えないため、活動の実践は難しい。・加盟校減少に伴い、交流機会も減少しているのが残念。連盟に加盟して活動を発展させてたくても、金銭的理由(会費や大会等旅費の支出方法)から困難な学校もあるようだ。・指導教員の育成も必要。・農業(水産、商業)高校のため、農業(水産、商業)クラブ活動とのバランスや困難さ。・組織を作ることはかなり労力が必要です。さまざまな行事等を通して授業で学んだことを関連させることで充分かと思っています。

【結果】

(a)回答が得られた中では、特に問題と捉えている理由として、生徒の学習時間・活動時間の確保が難しい(34.1%)が最も割合が高く、また教員側の指導に伴う時間の確保が難しい(17.4%)という回答の割合が高く、指導に当てる時間の確保ができない、時間の余裕がないという回答の割合が「ホームプロジェクト」の問題点と同様に高かった。

(b)また「ホームプロジェクト」の問題点と同様に、生徒に興味・関心を持たせ、自主的な活動にすることが難しい(15.9%)という回答も割合として高かった。

(c)指導の手順や方法が分からない面がある(9.5%)と回答した割合も、「ホームプロジェクト」と同様に約1割の教員からの回答があった。

【分析・考察】

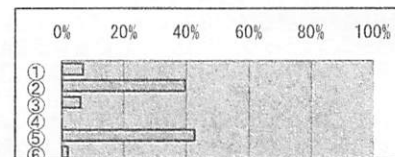
(a)会費や大会参加旅費についての記載があるように、「学校家庭クラブ活動」と「学校家庭クラブ連盟加盟」が切り離されていない現状がある。

(b)「ホームプロジェクト」と同様、年度当初からシラバスへ計画的に「ホームプロジェクト」同様、位置付ける必要がある。

(c)「ホームプロジェクト」と同様に具体的な指導方法についての研修の機会を設けたり、効率的に実施している実践事例の提示や、自校でも活用しやすいワークシートや評価シート等の指導資料など提供などが必要である。

(8) 「学校家庭クラブ連盟」の加盟の有無

① 加入している。	① 18	6.8%
② 以前から加入していない。	② 105	39.8%
③ 以前は加入していたが、現在は加入していない。	③ 16	6.1%
④ 以前については不明、現在は加入している。	④ 0	0.0%
⑤ 以前については不明、現在は加入していない。	⑤ 113	42.8%
⑥ その他	⑥ 5	1.9%



その他⑥の記述：・加入の有無も不明(3校)

【結果】

(a)以前については不明、現在は加入していない(42.8%)、以前から加入していない(39.8%)との回答の割合が高く、以前は加入していたが、現在は加入していない(6.1%)も合わせると約9割にものぼる。

【分析・考察】

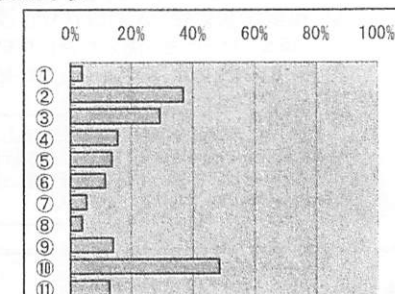
(a)多くの学校が加入できる学校家庭クラブ連盟の在り方について、意見を集約し、工夫改善していく必要がある。

(b)学校家庭クラブ連盟への加入は少人数でも可能であり興味・関心のある生徒からスタートし、様々な活動に参加させていくことが可能であることを周知する必要がある。

(c)生徒が学習成果を発揮でき、その成果発表の場が全国大会へつながっていることにより生徒の取組への意欲高揚や自信を持たせることにもなり、そうした観点からは大変有意義な組織である。

(9) 「学校家庭クラブ連盟」に加入できない理由(全て選択) * 上記(8)において、②、③、⑤と回答した学校

① 校内の管理職や教職員の理解や協力が得られないため。	① 10	3.8%
② 校務が多忙で、指導時間がなかったため。	② 97	36.7%
③ 生徒からの連盟会費の徴収が難しいため。	③ 77	29.2%
④ 役員生徒や一部の生徒の活動になりがちとなるため。	④ 41	15.5%
⑤ 連盟の行事等に合わせることもあり、拘束されがちであるため。	⑤ 36	13.6%
⑥ 各活動について教員が主体となりがちで、生徒の主体的な活動に	⑥ 30	11.4%
⑦ 指導方法が分からなかったため。	⑦ 14	5.3%
⑧ 加入の方法や手順が分からなかったため	⑧ 10	3.8%
⑨ 加入することのメリットが特に感じられないため。	⑨ 37	14.0%
⑩ 部活動や生徒会活動等と競合し、指導者も生徒も活動時間をつく	⑩ 128	48.5%
⑪ りだすのが難しいため。	⑪ 34	12.9%



その他⑪の記述：・専任教諭の配置がないため・通信制、夜間定時制、単位制など学校事情のため・農業(工業・商業・水産)クラブ活動で、学科クラブ活動を学ぶため・家庭科教員がやらないため・部活動以外にも講習や検定対策等が組み込まれているため・どのような組織で、どのような拘束力が生じるのかなど、具体的な内容が把握できないため・生活困窮者の家庭が多く活動費等徴収が困難

【結果】

(a)部活動や生徒会活動等と競合し、指導者も生徒も活動時間をつくりにくいという回答の割合が最も高い。(48.5%)

(b)次に校務が多忙で、指導時間がなかったため(36.7%)、生徒からの連盟会費の徴収が難しいため(29.2%)という回答の割合が高い。

【分析・考察】

(a)未加入の理由として、生徒が部活動や生徒会活動、放課後講習等、生徒も指導者もともに時間の確保が難しくなっているということが最大の理由として挙げられる。

(b)活動を充実させるために放課後の指導や、休日のなどの指導が必要となり家庭科教員への負担増となったり、会費納入、大会参加に係る旅費等の捻出など、様々な課題があるが、生徒の汎用的な能力や実践的態度の育成を図る観点から大変有効であり、校内の体制について条件整備を進めていく必要がある。

4 実践例

生徒が主体となり問題を発見して解決していくなど能動的な学習の指導や取組の実践例があれば、ご記入

【主に食分野に関連】

・アフリカから滝川市に研修に来ている外国人を講師に調理実習を実施し異文化の食生活について学んだ後、地域の(日本の)食材について比較調査し発表させた。
 ・地元の米、ラズベリーを使って酵母を培養し、それを使ってパンを作る課題研究を行った。
 ・有害動物のエゾシカを活用した商品開発及びエゾシカの交通事故の防止の啓発。
 ・英語との共同授業で、日本の食文化を調べ、英語のレシピのおせち料理を作り英語で説明しながらALTにふるまう。
 ・学校設定科目「食物」において、各都道府県の食文化についての調べ学習(発表・校内掲示)など。
 ・グループで自分たちの食生活に関する問題点を1つ取り上げ、原因と具体的な改善策を話し合い、発表し全体で共有する。
 ・自分の食生活を見直す、バランスの良い食事計画、スポーツ選手に向けた食事、エコクッキング、ヘルシーおやつ、健康的な生活
 ・健康に課題のある身近な人へのお弁当作成。(フードデザイン)
 ・嫌いな食べ物をおいしく食べられるメニューの考案と作成と提供。(フードデザイン)
 ・美瑛町において、地元の食材を用いたPR活動をさまざまな関係機関と連携して行っている。
 ・地域の特産であるそばを使った加工品の開発や廃棄そばを飼料とした豚の肉質向上及び加工品開発
 ・一日の献立を見直し、栄養のバランス・簡単な調理・エコクッキングの観点から自ら考え献立を組み立てる。1食分を調理し、反省・改善策を考える。
 ・本校の生徒の中には、給食を摂らない生徒もあり、日常的に食生活のみだれが生じている。授業の中で少しでも関心を持つよう給食の献立に、自分の希望が叶えられるよう献立作成を指導し、給食担当者と相談をしながら食育について考えさせている。
 ・冬季休業期間に「食生活」に関する身近な課題をテーマに課題解決のための調査・研究を行い、レポートにまとめ、家族の評価をもらう宿題を課す。時間が確保できれば、授業中に発表会を行う。
 ・家庭クラブ活動の一環として、2年生家庭基礎履修生と3年生フードデザイン履修生の代表者が地域の食材をつかった創作料理を考え、「高校生チャレンジグルメコンテスト」への出場を目指す。その中で、地域食材について・接客・商品アピールについて地域のお祭りなどでの販売から接客や開発商品についての問題を抽出し、それについて解決策を考え、コンテストや管内の高校が集まるハイスchoolフェスに出場する。

【主に衣分野に関連】

・被服実習では、生徒一人が工程終える毎に点検し、生徒と教師が共に問題を理解し、解決に向けて取り組むことが出来るよう指導している。
 ・冷え性対策、リサイクル、リメイクファッション
 ・学習して身に付けた手芸の基礎技術を活用した作品づくり、学校祭Tシャツのデザイン画(2年)、テーマに合わせた衣装デザインを考える、色合わせ(似合う色を探す)、自分でデザインした絞り染め大判風呂敷づくり(3年)
 ・被服実習でハーフパンツを作る際、ハーフパンツの型紙はどのような形かを想像させている。グループで紙を使いながら試行錯誤しながら、原型や作る手順について考えているので、実際の型紙、手順を示すととても興味を持っていた。

【主に住分野に関連】

・住居分野の学習は、自分の生活設計における住居設計を試み、また実際の生活居住地域環境について、問題点を取り上げ、改善策などを具体的に検討した。特に3年次の学習では社会人と生活する自分の生活がイメージしやすいため、気づきや提案が多い。ただし、実践的には費用がかかるものであるためグループ討議のみ行っている。
 ・バリアフリーな暮らし方についてなど
 ・自分の住宅の危険箇所について考え、低予算で解決する方法についてみんなで考える。

【主に保育分野に関連】

・年間5回(15時間)の保育園実習を通し、園児の身体的・精神的成長にあった玩具を考案。(子どもの発達と保育)
 ・保育園実習で生徒が受け持つ園児に起こる問題について、仮想学年団会議を開き問題解決に取り組む(子どもの発達と保育)
 ・たまご赤ちゃんの疑似体験学習
 ・生徒同士で絵本の読み聞かせをしたり、子供服を実際に触ってみたり、離乳食の食べ比べをするなど、実際に体験をし、その中でそれらの目的や役割などを生徒が見つけ出すようにしている。
 ・地域の保育所との交流、保育所児への食育活動
 ・保育所実習(保育計画を作成し、先生役を2時間行う)・デイサービス訪問(レクリエーションを企画し実践する)

【主に異世代交流に関連】

・社会の高齢化が進んでいるので、地域の高齢者に高校生が貢献できること、という視点で課題を見つけると、活動しやすい。(食事・健康・予防など)
 ・異年齢交流(グループホーム訪問に向け、グループでレクリエーションを考えて、実践する)

【主に生活設計、ライフプランに関連】

・一人暮らしの設計(自立に向けた住居選択の実習)・調理実習・被服実習など
 ・ライフプラン作成とその課題についてのペアワーク

【分野を横断してもしくは総合的に取り組んでいるもの】

・家庭科の時間が豊富にあるので、教科内容を検討しながら、生徒の状況をふまえて、グループ活動や、ワークショップなどを少しずつ取り入れています。ワークショップでは、講師の方を招いての活動になるので、生徒も普段とはちがった一面がみられるので、積極的に取り入れていきたい。
 ・～「生活レベルUp新聞」製作とプレゼンテーション～身近な新聞の情報から私たちの生活を取り巻く問題を見つけ、改善に向けて調査し記事としてまとめ発表する取り組み。家庭科の8つのテーマを班ごとに振り分け、5名の班員が互いに持ち寄った新聞記事について意見交換する中で自分の考えを深め、調べ学習に発展させた後、記事としてまとめあげたものをクラス内で発表し合うといったもの。
 ・新聞を読み、気になった記事についてまとめ、グループで発表会をしている。発表について班員が評価をし、人に自分の意見を分かりやすく伝えるということについてどうすればさらによくなるかを考えさせている。回数を重ねるうちに社会で起こっていることに対する意見をもつこと、自分の意見を分かりやすく人に伝えることができるかを考えて、上達が見られるようになった。
 ・アフリカから滝川市に研修に来ている外国人を講師に調理実習を実施し異文化の食生活について学んだ後、地域の(日本の)食材について比較調査し発表させた。(再掲)
 ・有害動物のエゾシカを活用した商品開発及びエゾシカの交通事故の防止の啓発。(再掲)
 ・地域の保育所との交流、保育所児への食育活動(再掲)
 ・防災についての取り組み
 ・礼状書き(手書き)、茶道体験学習

【他教科との連携、もしくは他教科の取組】

- ・理科との共同授業で、災害時を念頭にいたエコクッキング(食材だけでなく燃料などすべてのものの活用を見直す)
- ・学校家庭クラブ、家庭科独自の取り組みではないが、本校の総合的な学習の時間において、「探求基礎1・2・3」として、3年間で探求するための態度や能力を身につけることを目標としたカリキュラムを実践している。
- ・理数科の生徒においては、「課題研究」で取り組んでいる。理科が中心となり指導しているが、食品実験を実施した年は、協同して指導にあたった。
- ・英語との共同授業で、日本の食文化を調べ、英語のレシピのおせち料理を作り英語で説明しながらALTにふるまう。(再掲)
- ・家庭科ではないが、他の教科で「アクティブラーニング」を実施して、生徒の興味関心を高め、学習効果が向上している。企業とのコラボで「商品開発」や「ICT」を活用した取組をおこない、思考力・表現力・判断力の向上が確認されている。
- ・アフリカから滝川市に研修に来ている外国人を講師に調理実習を実施し異文化の食生活について学んだ後、地域の(日本の)食材について比較調査し発表させた。(再掲)

【主に地域との連携、まちづくりへの関連】

- ・地元の米、ラズベリーを使って酵母を培養し、それを使ってパンを作る課題研究を行った。(再掲)
- ・有害動物のエゾシカを活用した商品開発及びエゾシカの交通事故の防止の啓発。(再掲)
- ・街の中のバリアフリー化されている場所を調べ、バリアフリーマップを作成する。
- ・美瑛町において、地元の食材を用いたPR活動をさまざまな関係機関と連携して行っている。(再掲)
- ・地域の特産であるそばを使った加工品の開発や廃棄そばを飼料とした豚の肉質向上及び加工品開発(再掲)
- ・家庭クラブ活動の一環として、2年生家庭基礎履修生と3年生フードデザイン履修生の代表者が地域の食材をつかった創作料理を考え、「高校生チャレンジグルメコンテスト」への出場を目指す。その中で、地域食材について・接客・商品アピールについて地域のお祭りなどでの販売から接客や開発商品についての問題を抽出し、それについて解決策を考え、コンテストや管内の高校が集まるハイスクールフェスに出場する。(再掲)

【学習(指導)方法の工夫など】

- ・ディベートまで発展しているとはいえないが、ペアワークやグループワークを行い、話し合う・学び合う・助け合うを心がけている。
- ・グループで写真を読み取り、その写真が何を表しているか、何が問題なのかを話し合ったりして内容に入るととても興味をもって授業に参加している。
- ・家庭科の時間が豊富にあるので、教科内容を検討しながら、生徒の状況をふまえて、グループ活動や、ワークショップなどを少しずつ取り入れていきま
- ・ワークショップでは、講師の方を招いての活動になるので、生徒も普段とはちがった一面がみられるので、積極的に取り入れていきたい。(再掲)
- ・～「生活レベルUp新聞」製作とプレゼンテーション～身近な新聞の情報から私たちの生活を取り巻く問題を見つけ、改善に向けて調査し記事としてまとめ発表する取り組み。家庭科の8つのテーマを班ごとに振り分け、5名の班員が互いに持ち寄った新聞記事について意見交換する中で自分の考えを深め、調べ学習に発展させた後、記事としてまとめあげたものをクラス内で発表し合うといったもの。(再掲)
- ・新聞を読み、気になった記事についてまとめ、グループで発表会をしている。発表について班員が評価をし、人に自分の意見を分かりやすく伝えるということについてどうすればさらによくなるかを考えさせている。回数を重ねるうちに社会で起こっていることに対しての意見をもつこと、自分の意見を分かりやすく人に伝えることができるかを考えて、上達が見られるようになった。(再掲)
- ・学校設定科目「食物」において、各都道府県の食文化についての調べ学習(発表・校内掲示)など。(再掲)
- ・グループで自分たちの食生活に関する問題点を1つ取り上げ、原因と具体的な改善策を話し合い、発表し全体で共有する。(再掲)
- ・冬季休業期間に「食生活」に関する身近な課題をテーマに課題解決のための調査・研究を行い、レポートにまとめ、家族の評価をもらう宿題を課す。時間が確保できれば、授業中に発表会を行う。(再掲)
- ・家庭クラブ活動の一環として、2年生家庭基礎履修生と3年生フードデザイン履修生の代表者が地域の食材をつかった創作料理を考え、「高校生チャレンジグルメコンテスト」への出場を目指す。その中で、地域食材について・接客・商品アピールについて地域のお祭りなどでの販売から接客や開発商品についての問題を抽出し、それについて解決策を考え、コンテストや管内の高校が集まるハイスクールフェスに出場する。(再掲)

5 課題など

【課題など】

- ・主体となって問題を発見して解決していく能動的な学習は現時点の本校の生徒ではとても難しいと考えている。家庭科の総合的な基礎力の育成を重点的に実施しなくては授業に成り立たないためかなり苦悩している。

【分析・考察】

- (a)地元の農産物等を使った創作料理や商品開発、地元の農産物等の消費拡大イベント等で販売から接客・商品アピールを行うなど地域との連携、自分の食生活の改善や給食献立作成並びに担当者との懇談などの食育活動、保育所との交流・グループホーム訪問などの異年齢交流、他教科との連携なども含め、衣食住、生活に関わる様々な分野にわたって実践例が挙げられた。今、まさに求められている地域創生、まちおこしという観点から、または特色ある学校づくりという観点からも学校経営上、大きく貢献しており高く評価すべき活動が多々、挙げられた。
- (b)学習方法の工夫に焦点を当てると、生徒の実態を踏まえたペアワークやグループワークなど、ワークショップや発表、身近な新聞の情報から私たちの生活を取り巻く問題を見つけ、改善に向けて調査し記事としてまとめて発表する取組など、言語活動の充実や教師が主導する授業から少しずつ生徒主体の授業にシフトしていくヒントとなる様々な実践例も見られた。
- (c)記載された実践例をみると、まさにホームプロジェクトといえるもの、またはあと一工夫すればホームプロジェクト活動として取り上げられるものなどあった。他にも、この実践例は、そのまま学校家庭クラブ活動として取り組めるのでは、思えるものがいくつもあった。
- (d)家庭クラブ活動の一環として、2年生家庭基礎履修生と3年生フードデザイン履修生の代表者が地域の食材をつかった創作料理を考え、「高校生チャレンジグルメコンテスト」への出場を目指すなどという活動は、授業における学習の成果を全国に広がる場で、発表したり競ったりする機会として、学校家庭クラブ活動を大いに活用している取組例である。
- (e)基礎学力に課題がある生徒については、習得した知識や技術の定着を図るためにも、生徒の実態に応じて、授業内容の振り返りや生徒同士で学んだことを確認し合う活動などを通して、書く・話す・グループ内で発表するといった場面を意図的に取り入れるなど、ステップを踏ませて取り組ませるよう工夫する必要がある。

※ 貴重な実践例や課題などを寄せていただき、ありがとうございました。

Ⅱ 平成27年度北海道高等学校家庭クラブ連盟の活動

北海道高等学校家庭クラブ連盟の活動について

北海道高等学校家庭クラブ連盟成人会長

(北海道江別高等学校長) 小 松 芳 幸

日頃より、北海道高等学校家庭クラブ連盟の諸活動にご支援ご協力をいただき、誠に有難うございます。

さて、昨年7月30、31日に札幌市教育文化会館で開催された第63回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会では、多くの皆様のご協力をいただきながら、無事成功裏に終了することができました。13年ぶりに北海道での開催となったこの大会は、当初から財政面の課題を抱えた中で準備を進めて参りましたが、本連盟非加盟校のご支援や大学、企業等の協賛をいただきながら、課題を一つ一つ克服して開催にこぎ着けることができました。ご協力をいただきました全ての皆様に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

大会の結果、最優秀賞である文部科学大臣賞には、ホームプロジェクト部門で東北地区代表の福島県立喜多方東高校が、また、学校家庭クラブ活動の部では北陸・中部地区代表の岐阜県立大垣桜高校が選ばれました。道代表の2校も大健闘をしてくれました。ホームプロジェクト部門代表、札幌北高校3年向畑優さんの「めたぼう（メタリックシンドローム+多忙）パパを優がレスキュー！」が第2位に当たる産業教育振興中央会賞を受賞するとともに、参加のクラブ員が選ぶクラブ員奨励賞では最高位を獲得しました。また、学校家庭クラブ活動部門では美唄尚栄高校家庭クラブが「モツとの未来 2015 ～私たちと地域をとりモツカレー～」と題して第4位に当たる全国家庭科教育協会賞を受賞しました。

2日間の大会には全国から1,800名の参加が

ありましたが、生徒が前面に出る生徒主体の大会を加盟校の生徒が互いに協力しながら準備を進める中で、確実に成長する姿を目にすることができた大会でもありました。大会実行委員会の事務局並びに委員長をお引き受けいただいた当別高校の杉本校長先生を始め諸先生方、生徒委員長の当別高校3年吉森聖さん、道連生徒会長の江別高校3年寺田未奈さんを始めクラブ員の皆さん、ご協力をいただいた道内各校家庭科の先生方に改めて感謝申し上げます。

また、次年度の全国大会の道内予選を兼ねて、平成27年度全道家庭クラブ研究大会・総会が昨年9月18日に北星学園大学附属高等学校のご協力により、同校を会場に開催されました。その結果、ホームプロジェクト部門で、札幌北高校2年黒須玲未さんが「家族三人四脚で一歩ずつ母を健康に」と題して、また、学校家庭クラブ活動部門では札幌丘珠高校家庭クラブの「防ごう！消費者トラブル！～丘珠コミュニティが見守ります～」が最優秀賞を受賞しました。次年度、福島大会での活躍を祈念しております。大会の準備から会場の提供までご協力をいただきました北星学園大学附属高等学校の皆様にお礼申し上げます。

ボランティア活動など地域と密接に関わりながら展開される家庭クラブ活動は、生徒の生きる力を育むだけでなく、創造・勤労・愛情・奉仕の本連盟基本精神に示されるとおり、生徒の成長を促す上でも最適な活動であります。加盟促進と更なるご支援ご協力をお願いして、ご挨拶とさせていただきます。

第56回全国高等学校家庭クラブ連盟指導者養成講座に参加して

北海道札幌北高等学校教諭 田 畑 優香里

平成27年7月23日(木)・24日(金)、国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された第56回全国高等学校家庭クラブ連盟指導者養成講座へ、次年度(平成28年度)道連事務局校のため北海道代表として、本校家庭クラブ会長2年近藤梨那さんを引率し、10年振りに参加させていただきました。

開講式の受講者代表挨拶は本校の近藤さんの担当でものすごく緊張していたのですが、翌週、札幌市教育文化会館で開催される第63回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会のPRや、この講座への意気込みについてユーモアを加え、心をこめて、聴衆に伝わる話し方で挨拶ができ、主催者や参加者の皆様から、お褒めの言葉をいただきました。

ここからは顧問の部について簡単に報告します。

第1日目の分科会①では、「協議資料」のファイリング・実践事例の掲示・自己紹介・グループ分け・指導助言者の自己紹介等がスムーズに行われ、参加された家庭クラブ顧問のやる気にわくわくしました。午後の分科会②は、1グループ4～5名に分かれての実践報告交流会でした。北海道は大阪・徳島・長野・山梨の普通科・専門学科グループ2。この時は3名が順番に持参資料を説明し、聞き手は「いいところ」をあげ、応援メッセージを記入する流れでした。初対面とは思えない5名のチームワークの良さを感じました。

次の体験講座は植物の香りを暮らしや社会に役立てる～アロマテラピー体験学習～で、おもてなしについて生徒と顧問と一緒に学びました。前半はプレゼンによる講義中心でしたが、後半のアロマバスソルトの実習に入ると、オレンジやラベンダーなどのアロマの香りに癒やされました。その後の顧問講義では、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官市毛祐子先生による「ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動の重要性～家庭科教育の充実のために～」

という貴重なお話を伺いましたが、「ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動はまだ知られていない。」という言葉が印象的で、今後も活動・指導を継続は力なりで、紡いでいこうと改めて思いました。

第2日目の実践活動報告は山梨県立農林高等学校教諭白倉小百合先生による「持続可能なクラブ活動」で、息の長い活動を展開するため試行錯誤しながらの活動に感心し、元気と勇気をいただきました。

分科会③では、前日の実践報告会の続きと交流成果をワークシートにまとめ、分科会④では模造紙にワークシートを貼り付け、発表者を決め、発表内容を確認しました。結論は「家庭クラブ活動は生徒の無限大の力を引き出す」とし、全体会で私は発表と原稿を担当し無事発表を終えることができました。

二日間というタイトな日程の中、家庭クラブ活動を継続・向上・活性化しようという志を同じくする顧問・生徒が共にした時間と出会いは、大変貴重でした。

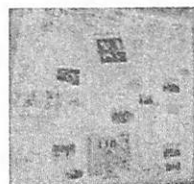
この度の機会を与えていただき、家庭クラブ連盟関係の皆様、本当に有難うございました。詳細は是非、「平成27年度第56回全国高等学校家庭クラブ指導者養成講座研究集録」を合わせてご覧いただければ幸いです。



〈開講式挨拶：近藤さん〉



〈私と近藤さん〉



〈普通科・専門学科グループ2メンバーと報告会資料〉

第63回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会 北海道大会を終えて

北海道実行委員会事務局次長

北海道当別高等学校教諭 澤谷 郁恵

第63回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会（北海道大会）は、7月30日（木）、31日（金）2日間の日程で、札幌市教育文化会館において開催されました。13年ぶりとなった北海道大会は、「北の大地で育もう 未来へひろがる 笑顔の輪」のスローガンのもと、全国から約1,000人が参加しました。

大会は、北広島高等学校書道部の迫力あるパフォーマンスで幕を開け、開会式では下村文部科学大臣からの祝辞が披露され、北海道教育委員会柴田教育長にはご臨席いただき、ご祝辞を賜りました。

研究発表は、「ホームプロジェクトの部」「学校家庭クラブ活動の部」は次のとおり、全国7地区からそれぞれ代表校が出場しました。

【ホームプロジェクト】

ブロック名	校 名	発表者名	題 目
北海道	北海道札幌北高等学校	向畑 優	めたぼう (メタボリックシンドローム+多忙) パパを優がレスキュー!!
東北	福島県立喜多方高等学校	渡部 結衣	弟の自立を笑顔でサポート ～家族で育ちを見守りながら～
北・中	石川県立加賀高等学校	角 穂菜美	家族をつなぐ大作戦
関東	山梨県立巨摩高等学校	深澤 愛意	自家製天然酵母で ヘルシーライフ
近畿	兵庫県立社高等学校	井上 咲	父の食生活改善大作戦! ～雰囲気づくりを大切に～
中国	鳥取県立米子高等学校	井上 彩美	おばあちゃんといっしょ ～繋がる介護を目指して～
九州	大分県立日田高等学校	松浦佳苗子	母の冷え取り大作戦!! ～家族のサポートで心も体もぽっかぽか～

結果は、福島県立喜多方方東高等学校 渡部結衣さんと岐阜県立大垣桜高等学校家庭クラブがそれぞれ文部科学大臣賞を受賞しました。



【学校家庭クラブ活動】

ブロック名	校 名	発表者名	題 目
北海道	北海道美唄尚栄高等学校	川瀬 綾子	モツとの未来 2015 ～私たちと地域をとりもつ未来～
東北	秋田県立横手清陵学院高等学校	照井 美希	おらほの子育て未来構想 ～ジュニア・ファミリー サポートの構築を目指して～
北・中	岐阜県立大垣桜高等学校	小酒井里実	忘れないで!防災・ 減災活動でつなぐ絆 ～災害につよい人づくりを目指して～
関東	東京都立晴海総合高等学校	橋本 純麗	わたしたちの防災活動 ～備え! 支えよ! 晴海生!!～
近畿	三重県立四日市農芸高等学校	松井 奏実	FUTURE SUPPORT ～安全確保! 農芸生、いざ出動!!～
中国	徳島県立鳴門高等学校	潮 有依菜	生活にぬくもりと文化を ～「ドイツさん」の歴史と 「お接待」のこころを伝えて～
九州	宮崎県立高城高等学校	堀田 里帆	よかこ高城 うちの パワーでもっと元気に

この大会の運営は、平成24年度に準備委員会が立ち上がってスタートしました。資金面に課題があり、多くの学校から負担金、協力金をいただき、ありがとうございました。道からはご後援を、JA北石狩からは当別産米をご提供いただくなど多方面からのご助力によって、運営をすることができました。

最後に、本大会を開催するにあたり、全道の家庭クラブ員はもちろん、校長先生、顧問、多大な支援とご協力を賜りました皆様方にご場をお借りして、心から感謝申し上げます。

第63回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会 北海道代表出場校として（ホームプロジェクトの部）

北海道札幌北高等学校教諭 田 畑 優香里

平成27年7月30日（木）・31日（金）、札幌市教育文化会館で開催された第63回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会（北海道大会）ホームプロジェクトの部北海道代表生徒と当番県業務インタビュー室担当である生徒の計17名を引率し、参加させていただきました。この大会の一週間前には、次年度道連事務局が本校担当となる関係で、全国指導者養成講座へ本校生徒会長を引率し参加する機会にも恵まれました。



〈北海道札幌北高等学校家庭クラブ執行部〉

大会スローガンは北海道札幌南高等学校（平成26年度2年）辻優太郎さんによる「北の大地で育もう 未来へひろがる 笑顔の輪」で、大会ポスター原画は北海道札幌北高等学校（平成26年度3年、現在北大1年）鈴木美穂さんの作品です。昨年度開催された山口大会次期開催地紹介を本校が担当した際、鈴木さんの描いた絵に登場した女の子は北（ほっ）ちゃん、男の子は海（かい）くん、北きつねは道子（みちこ）さん、熊は道夫（みちお）くんと命名し、生徒たちがプレゼンをしたことを懐かしく思います。

13年振りの北海道大会では、7月28日（火）が当番県の道内リハーサル、29日（水）には発表校リハーサル等もあり、多忙な中、関係の皆様には、インタビューに快くご協力いただき、本当にありがとうございました。

さて、研究発表の本校のテーマは、発表者3年向畑優による「めたぼう（メタボリックシンドローム＋多忙）パパを優がレスキュー!!」。結果は三度目の産業教育振興中央会文部賞と三年連続でクラブ員奨励賞を受賞できました。今回の全国大会出場（私が本校に赴任してから）は平成16～18、



〈本校研究発表班〉

〈発表者向畑さん〉

20～22、24～26年度に続いて10回目です。平成17年度は千葉県教育委員会委員長賞（3位）、平成20・22・25年度には文部科学大臣賞、平成24・26年度には産業教育振興中央会賞（準優勝）、今年で7度目の入賞を果たすことができ、生徒を誇らしく思います。

次に発表内容です。向畑さんの父は残業や休日出勤の多い生活を送っていました。2年前の健康診断でメタボリックシンドロームの全ての項目に該当しているとわかりましたが、父は生活を変えようとせず、家族も父の健康状態に関心でして。そこで実態調査から、出張中や年末年始の食べ過ぎ、間食の多さ、運動不足等の問題点を明らかにし、工夫・改善として出張中郵（優）便メール」、ストレッチやウォーキングの習慣化、脂質制限や減塩のための料理研究等を行い、メタボの改善ができました。

講評では「父の生活状況がよく調査・分析され、課題がしっかり把握された研究で、3年間の内容がわかりやすくまとめられている。また、生活改善や食生活改善に無理なく取り組んでいることがわかるプレゼンテーションも素晴らしい。父の食に対する意識改革のために、問題点や目標の見える化や、マスコット作成など、家族のチーム力が伝わる研究である。」というお言葉をいただきました。家庭科の学習の中で、特に家庭クラブやホームプロジェクトの活動は、生徒たちの無限大の力を引き出し、伸ばすことにつながっていると、顧問として日々感じています。今後も活動を紡いで、高校生の創造性を生かした問題解決能力を向上させる指導をしていきたいと思っています。

（参考出典：平成27年度北海道大会要項、FHJ 2015年8月9月号）

第63回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会 北海道代表出場校として（学校家庭クラブ活動の部）

北海道美唄尚栄高等学校教諭 坂口 真奈美

第63回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会が、平成27年7月30日（木）～31日（金）の両日、札幌市教育文化会館で開催され、本校の家庭クラブ員5名と参加し、生徒ともども非常に貴重な体験をさせていただきました。

全国7ブロックから7校が発表しましたが、どの研究も内容に深みがあり真摯な研究態度が伝わってくる素晴らしいものでした。また、各校とも発表方法にも工夫がされており、「百聞は一見にしかず」ということわざを生徒たちと実感し、全国大会の雰囲気を楽しみつつも感動しながら他校の発表を拝見・拝聴しました。

さて、本校は4年前に総合学科として新しい歴史の一步を踏み出し、新しい学校家庭クラブとしてどのような活動ができるのかを模索し、何度も話し合う場面を設けた結果、

- ①地元である美唄市のことをもっと知りたい、
- ②楽しく、かしこい生活ができる大人になるために学びたい、という観点から課題発見しようということになりました。

まず、市役所や市内で商品を販売している複数の店舗からお話を伺い、美唄市の歴史や特産物について学びました。炭鉱業と農業の町として栄えた美唄市では、お客様におもてなしする際、鶏をつぶし肉だけではなく内臓も全て料理し余すことなく食べていたことを知りました。今ではメディアでも有名になった「美唄焼き鳥」や「とりめし」には、多くの人の手や心が加わっていることを知り、食文化の素晴らしさに感銘を受けました。こうして、総合学科1期生が「とりモツ」の研究を始めました。

次に、アンケート結果から、自分たちの好きな料理であるカレーと組み合わせた「とりモツカレー」の実験は、何度も失敗を繰り返しましたが、2年間かけて公共施設のグランドメニューに加えていただけるまでになりました。調査・研究する楽しさと充実感を知った生徒たちの行動力は頼もしいものでした。

さらに、豪雪地帯であり高齢者が人口の3割を占める地域の特性を考え、レトルトカレーの製作に挑戦することにしました。本校には、家庭クラブの他に、農業・工業・商業クラブがあり、連携しながら活動をしています。農業クラブの施設を利用し自分たちの手でレトルトカレーを作ることになりました。試行錯誤した結果、商品化のめどがつき、今後は販売にむけての研究も進める予定です。

3年間にわたる研究から、クラブ員たちはスケールの大きな体験と感動を得ることが出来ました。また、美唄市で生活する高校生として、地域に応援してくれる人々がたくさんいることを知り、その交流から学び得た社会的な自律は高校生活の大きな財産となったようです。

私自身も、生徒とともに課題発見からスタートするという学習内容に携わることができ、教師冥利に尽きる思いです。今後も全国の家庭クラブ員が切磋琢磨することを願います。



第64回北海道高等学校家庭クラブ連盟 研究大会・総会を終えて

北星学園大学附属高等学校教諭 松田 玲子

平成27年9月18日（金）、北星学園大学附属高等学校にて第64回北海道高等学校家庭クラブ連盟研究大会・総会が開催されました。今年は札幌での全国研究発表大会開催の年であることから、全道大会実施についても例年通りとはいかず、時期をずらし開催日程も1日に短縮しての実施となりました。

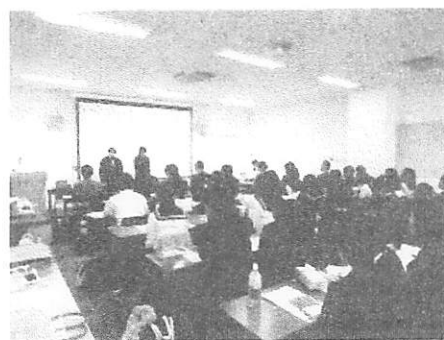
時 間	内 容
8:50~9:10	発表校受付
9:10~9:50	発表校打合せ・リハーサル
9:20~9:50	審査委員会
10:00~10:25	開会式
10:30~10:50	当別高等学校（HP）
10:50~11:10	倶知安高等学校（HP）
11:10~11:30	札幌北高等学校（HP）
11:30~11:50	札幌南高等学校（HP）
11:50~12:10	江別高等学校（HP）
12:10~13:30	昼休み・顧問懇話会
13:30~13:50	名寄産業高等学校（SP）
13:50~14:10	札幌丘珠高等学校（SP）
14:10~14:25	休憩
14:25~15:00	生徒総会 全国指導者養成講座報告
14:25~15:00	審査会議
15:05~15:55	表彰式・閉会式

今年度は学校家庭クラブ活動の部2校、ホームプロジェクトの部5校の研究発表校、参加校2校の顧問生徒71名が参加しました。全国大会準備・運営と全道大会の準備が重複し、生徒の皆さん、顧問の先生方は並行して準備を進めていかなければならず大変なご苦労をされたことと思います。

そして、研究発表の結果、学校家庭クラブ活動の部は「防ごう！消費者トラブル！～丘珠コミュニティが見守ります～」札幌丘珠高等学校家庭クラブ、ホームプロジェクトの部は「家族三人四脚で一步步母を健幸（康）に！」札幌北高等学校2年黒須玲未さんが最優秀賞を受賞し、平成28年度、福島県で開催される全国大会に出場することになりました。

今回は自校開催ということで、交通、会場、施設・設備面でご不便をおかけした面も多々あったと思いますが、参加されたクラブ員の皆さんや顧問の先生方のお力添えのおかげで無事に連絡調整校業務を終了できました。

全国大会、全道大会と大きな大会に運営側として参加させていただいたことは、生徒たちにとっても普段の活動では得られない貴重な経験となりました。本当に有難うございました。



研究発表



生徒総会

Ⅲ 北海道家庭科技術検定の活動

家庭科技術検定の実施について

北海道高等学校家庭科技術検定委員長

北海道名寄産業高等学校長 増 田 雅 彦

日ごろから、専門委員の先生方のご尽力や各校のご理解とご協力に、心より感謝を申し上げます。

さて、今年度の全道の受験者数ですが、昨年度に比べると約50名減少しました。道内の生徒数の割合からすれば、受験者数は全国的にも決して多いとは言えませんが、資格試験や検定試験への取組が、求められる学力向上への一つの重要な推進力と確信しております。

今年度より3年間、本校が事務局を担当させていただきますが、家庭科教育の充実・発展のため、ご協力の程よろしく申し上げます。

1 事業報告

(1) 専門委員

役 職	学校名	氏 名
全国・北海道(和服)	函館大妻	西 本 千 春
全国・北海道(洋服)	江 別	紀 國 明 子
全国・北海道(食物)	名寄産業	荒 木 恵 理
北 海 道(被服)	美唄尚栄	駒 谷 綾 子
北 海 道(食物)	当 別	佐 藤 郁 子
北 海 道(食物)	三 笠	斎 田 雄 司

(2) 諸会議・講座等

- ①常任委員研究協議会 H27.4.23
- ②第1回専門委員研究協議会 H27.4.23
- ③全国高等学校家庭科技術検定研究大会
(熊本大会) H27.8.6~7

今年度は、3年に1度の全国研究大会が行われ、平成29年度までの指導資料が提示されま

した。資料の発送をもって評価研究協議会、検定員養成講座に替えさせていただきます。

2 受験者数と過去4年の推移

	種目	H27	H26	H25	H24	H23
4	被服	250	315	392	238	241
	食物	1,157	1,106	1,156	1,207	1,472
3	被服	128	154	211	159	202
	食物	749	786	728	661	630
2	和服	58	76	71	77	90
	洋服	54	50	49	90	47
	食物	296	305	294	293	233
1	和服	50	51	53	43	62
	洋服	42	45	51	41	51
	食物	224	173	168	141	192
合 計		3,008	3,061	3,173	2,950	3,220

3 検定実施校数

年 度	H27	H26	H25	H24	H23
実施校数	4 2	4 4	4 1	4 2	4 0

現在、家庭科技術検定(被服製作、食物調理、保育)の一元化が平成32年度完全実施に向け、進められています。

今後とも、本技術検定の益々の充実と発展に向け、皆様方のご理解とご協力を心よりお願い申し上げます。

平成27年度全国高等学校家庭科技術検定

全国専門委員会（熊本大会）に参加して

北海道江別高等学校教諭 紀 國 明 子

平成27年度全国高等学校家庭科技術検定研究大会が8月5日（水）～7日（金）熊本県熊本市で行われ、北海道からは今年度検定代表理事である名寄産業高等学校の増田雅彦校長先生、被服（和服）専門委員の函館大妻高校、西本千春教諭と、食物専門委員の名寄産業高校、荒木恵理教諭、被服（洋服）専門委員の私、計4名で参加しました。

1 全体・講演会

熊本県出身ファッションデザイナー田山淳朗氏による「創造と製作」という講演がありました。田山氏がファッションの道に進もうとした経緯から現在に至るまでのご自身の事も交えながら、「感性」の重要性やそれを伸ばさせるために日常をどのように過ごすことが効果的か等、大変興味深い内容でした。田山氏はデザイナー・プロデューサー業の他、文化服装学院などで客員教授を務め、職域プロジェクト「ファッション分野における中核的専門人材養成事業」にも携わっておられる方です。近年は全国各地のファッションデザイン画コンクールの特別審査員などもされ、高校生のクリエイション力向上のためにご尽力されています。情熱とプライドを絶やさず仕事に打ち込み、しかも第一線で活躍し続ける事は並大抵の事ではありません。田山氏が、時代を読み取る感性を持ち合わせ且つ偏りのない非常にバランスのとれた人物だということがよくわかりました。

2 分科会

全体会に続き、食物調理分科会と被服製作分科会が行われました。私は西本教諭と被服製作分科

会に参加しました。

はじめに、作問委員から報告がありました。筆記試験出題の留意点として、単元の枠にとらわれない総合的な問題を作成し、出来るだけ幅広い文野から出題する、丸暗記では解答できない問題作成に努める、過去に出題された問題は、数年間使用しないなどの説明がされました。作品評価では、1班7～8名で構成されたグループごと提示された1～4級の作品を評価検討し、最後に本部委員から示された正答・解説を確認しました。

休憩の合間を見て食物調理の作品例の見学や、被服製作作品例、県の工芸品等の展示も見させていただきましたが、その素晴らしさ完成度の高さに圧倒されました。

3 おわりに

以前、田山氏が、北海道文化服装専門学校主催のコンクール授賞式の壇上で「知力と運動能力だけを評価するのではなく、そこに感性を育て伸ばす教育があってもいいのではないか」とお話をしていた事を思い出しました。家庭科教育とは感性を育むための刺激を生徒に与えられる理想的な教科だと改めて感じたと同時に、そのために教員も日々アンテナの感度を高め、スキル up に努めなければならないと気持ちが引き締まりました。

また、大会を運営した熊本県の実行委員の方々をはじめ本部委員、他県の代表専門委員の熱意にも刺激を受けました。特に実行委員のチームワークの良さや細やかな心遣いや気配りには深く感銘いたしました。これからの技術検定の発展と充実に少しでも貢献できるよう、生徒の技術向上のため、日々指導に励んでいきたいと思いをします。

IV その他家庭科教育・研修会に関する報告

平成 27 年度第 53 回北海道高等学校教育研究大会

教科別集会家庭部会を終えて

北海道札幌新川高等学校教諭 柿澤 小百合

平成 28 年 1 月 8 日(金)札幌エルプラザ 4 階大研修室において、道内各地から 69 名の参加を得て、研究主題「生涯を見通して生活を創造する力を育む家庭科教育」のもと開催した。

1 総会

平成 26 年度事業報告・決算報告・会計監査報告及び、平成 27 年度事業計画・予算案が承認された。平成 28 年度研究主題については、役員会・運営委員会に一任された。

2 講演

演題：「消費者市民時代の家庭教育～持続可能社会を目指す消費者教育の実践～」

講師：横浜国立大学教育人間科学部

教授 西村 隆 男 様

私たちの消費行動が将来どのように影響するのかを考えて行動することが必要であり、利己的な消費ではなく「エシカル消費」と言われるグローバルな問題にも目をむけた消費スタイルが求められている。また、現代の多種多様な詐欺にどう対応していくかも課題であり家庭科教育における効果的な指導が必要となる。このように様々な視点で消費生活を考えていく必要があり、消費者教育の内容は幅広く奥深いため、より一層の指導の工夫が求められる。

3 研究協議

(1) 研究発表

主題：「消費生活の背景を知り・考え・行動する～おいしいチョコレートの裏側から見えるもの～」

発表：北海道幕別高等学校教諭 山本 ひろみ
チョコレートを教材として、児童労働の実態を知り、そこからフェアトレード商品へ発

展させる授業実践であった。グローバルな視点で消費行動をとれることを目的に、学習者参加型のワークショップを取り入れ、生徒自身の生活を見つめ直すことにより、思考力・判断力を育む指導が工夫され、生徒の実態に合わせた授業実践を発表していただいた。

(2) グループ協議・情報交換：「消費生活分野に関する各校の実践内容について」

8 グループに分かれ各校の消費生活分野の実践及び、研究発表内で体験したワークショップの感想などを交流し、情報交換を行った。

(3) 助言：北海道教育庁檜山教育局教育支援課
高校教育指導班主査 左 紺 摂 子 様

研究発表については、既存の教材を使用するにあたり、生徒の実態に合わせた工夫があり、領域横断的な指導がされ、生徒自身が主体的に行動しようとする意欲の育成につながっている実践と評して下さり、評価に関しても助言をいただいた。また、家庭科の指導の充実に向け、現状と課題について、学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえた指導のポイント等について情報提供して下さった。その他、各種研修会への参加による資質の向上について講評いただいた。

4 研究紀要

共通教科「家庭」の教科指導の充実を目指して
執筆者：北海道小樽桜陽高等学校教諭

有永 和織

新教育課程の「共通教科」家庭の改訂のキーワードから、領域横断型授業、地域の特性を生かした授業、専門家との接続を意識した授業実践、言語活動を意識した学習者参加型の授業実践について執筆していただいた。

第3回北海道高等学校長協会家庭部会 意見・体験発表大会を開催して

事務局 北海道江別高等学校教諭 上 野 博 美

(1) 大会を運営して

家庭部会意見体験発表大会は今年度3回目を迎えました。これは、『全道の高等学校で家庭・福祉を学んでいる生徒が、日頃の学習で学んだことの成果について、意見や体験を発表するとともに、生徒相互の交流をとおして、「生きる力」を育み、家庭・福祉教育の充実を図る』目的で実施しています。

8月25日に北海道江別高等学校を会場に行われ、普通科2名の生徒も含め道内10校10名の参加がありました。普通教科「家庭」から発展した「家庭選択科目」「家庭クラブ」などの体験や学び、専門学科ならではの体験など、この社会変化の中で、豊かな心をもって生き生きと活動している姿を見ることができました。

今後も、主体的に家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てる家庭・福祉教育の「生きる力」を感じる大会にしたいと思います。一校一名としたため人数が微減し、入れ替えはありますが参加校数に変わりはありませんでした。普通科生徒にとって人前で発表する機会は少ないので、是非この大会を活用していただければと思います。

来年度もこの趣旨を踏まえ、より多くの生徒が参加できますようご理解・ご協力のほど、よろしくお願いいたします。また、運営等、至らない点多々あったことと思いますが、ご意見・ご感想などをいただき、さらに改善していきたいと考えています。参加いただいた各高校の生徒の皆さん、ご指導いただいた先生方に、深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

(2) 大会参加者

①札幌手稲高校 伊西 このか

『マドレーヌ作りから学んだ人とのつながり』

②江陵高校 佐藤 千香

『海外福祉研修で感じたこと』

③真狩高校 丸田 怜奈 『夢に向けて』

④名寄産業高校 會田 あかり

『介護福祉士に向けて・・・』

⑤当別高校 若崎 リナ 『料理をする喜び』

⑥三笠高校 藤本 旭

『お客様の笑顔のために

～プロの料理人を目指して～』

⑦剣淵高校 井川 愁 『記憶』

⑧置戸高校 太田 晴香 『気づく力』

⑨千歳北陽高校 佐藤 萌子 『夢』

⑩江別高校 安部 七海

『ファッションデザイナーへの道を歩む』

(3) 大会結果

最優秀賞 三 笠 高 校 藤本 旭

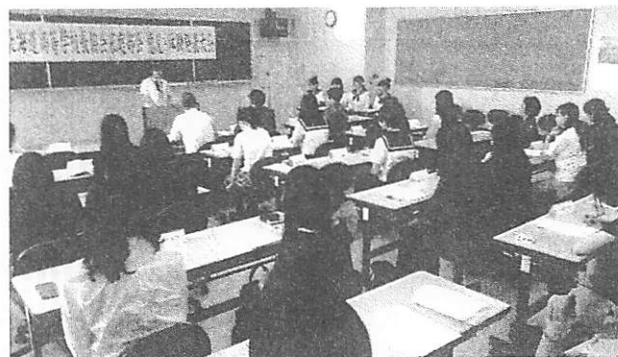
優 秀 賞 剣 淵 高 校 井川 愁

優 秀 賞 千歳北陽高校 佐藤 萌子

産振推薦 三 笠 高 校 藤本 旭

置 戸 高 校 太田 晴香

※産振推薦：家庭部会代表として平成27年度
産業教育意見・体験発表大会に参加しました。



第3回北海道高等学校長協会家庭部会 意見・体験発表大会に参加して（家庭科）

指導者 北海道三笠高等学校教諭 斎田 雄司
発表者 北海道三笠高等学校3年 藤本 旭

平成27年度 北海道高等学校意見・体験発表大会は、10月7日（水）北海道札幌工業高等学校にて開催されました。

この大会は北海道内にある専門高校等に学ぶ生徒が、日頃の学習で学んだことについて、意見や体験を発表するとともに、その発表に基づき意見交換及び交流を行うことにより、関係者の認識を深め、産業教育の充実・振興に寄与することを目的に開催されています。

本年度は農業3校、工業2校、商業2校、水産1校、家庭2校、看護1校、総合2校の合計13校が参加し、14の発表が行われました。参加校と発表題は以下の通りです。

岩見沢農業 「ほべつメロンから始まる私の挑戦」
旭川農業 「地域に根ざしたフォレスターになるために！」
とわの森三愛 「故郷を守りたい」
小樽工業 「私が過ごしてきた環境」
北見工業 「支える人になりたい」
札幌東商業 「北海道（Do）から世界（Kai）へ」
札幌東商業 「『とどけたい私の思い』～国際貢献について～」
函館商業 「3年間の部活動をとおして」
小樽水産 「白球を追いかけて得た自信と感動そして感謝」
置戸 「気づく力」
三笠 「お客様の笑顔のために～プロの料理人を目指して～」

美唄聖華 「校訓から学び『思いやりある言葉と笑顔』の実践」

室蘭東翔 「総合学科『産業社会と人間』を学んで～夢を実現させるために～」

清水 「介護士になる夢を実現するために」

8月22日（金）家庭部会主催で開催された意見・体験発表大会には、札幌手稲、江陵、真狩、名寄産業、当別、三笠、剣淵、置戸、千歳北陽、江別の10校10名が発表し、本校食物調理科3年 藤本 旭さんが家庭部会の代表者となりました。

藤本さんは三笠高校の食物調理科で調理師を目指し日々料理を勉強している生徒です。所属する調理部においては、より多く調理に関することを学びたいと誰より意欲的に参加し、料理コンクールにも積極的に応募してきました。3学年の春には入賞を果たし、地元企業との産学連携企画にも協力しました。今回の発表はそのような新商品の開発、道外百貨店での実演販売など、調理以外にも多くの食に関する学びを深める中で実際にお客様と接し、笑顔を生み出すことの大切さやむずかしさについて考えるようになったことを述べたものです。挫折や葛藤から将来の夢の実現に向かって取り組む自らの信条を見出し、困難に立ち向かう原動力とする意思が感じられる発表が評価され、最優秀賞を受賞しました。

各校の発表はいずれも興味深く、特色ある学習実践を知ることができる内容でした。このような貴重な機会をいただいたことに感謝いたします。

北海道高等学校産業教育意見・体験発表大会に参加して

(福祉科)

指導者 北海道置戸高等学校教諭 稲童丸 玲 奈
発表者 北海道置戸高等学校2年 太 田 晴 香

(1) 生徒を指導して

北海道置戸高等学校教諭 稲童丸 玲 奈
生徒が大会を通して自分と向き合い、自信をつけて前向きになっていく姿を見ることができました。今後も、今回の経験を糧に自分の可能性を広げ、自ら道を切り開ける人になってほしいと思います。

(2) 生徒原稿『気づく力』

北海道置戸高等学校2年 太 田 晴 香
「俺にはできねんだ。」この言葉に私の心が動きました。昨年の2月上旬、私は介護老人保健施設で五日間のコミュニケーション実習を行っていました。実習では、利用者様が抱えている家族や心身の問題、施設内での人間関係などいろいろなことを知ることができました。その中でもお話ししたいことは、利用者様が打ち明けてくださった、疾病と向き合う気持ちについてです。

少しずつ慣れていった三日目のレクリエーション中のことです。私はゲームの盛り上げ役として点数を数えたり応援をしたりしていました。ある男性の番に回ってきた時です。その方は座っている椅子から立ち上がろうとしませんでした。職員の方が声をかけると、「俺はしねえ。」とおっしゃい、その後の声かけにも無反応だったため、ゲームも次の利用者様に回っていきました。他の利用者様にもゲームをしない方がおられましたが、体調が優れなかったり見ているほうが好きだったりと参加をしない理由がはっきりしていたため、職員の方の対応を見ながら私も接していました。しかしこの男性はいつも参加しているレクに今日は参加していませんでした。気になった私は、男性のところへ向かいました。

少しお話しをしてからレク的话题をすると「俺

にはできねんだ。目が悪いから点数が書いてあるのも何も見えないんだ。」とおっしゃいました。このときやっとなぜ男性がサングラスをしていたのか、また職員の方の対応にどのような意図があったのかに気づきました。職員の方は、視力が低下している男性の気持ちを理解し、対応していたのです。また、職員の方と男性の何回かのやりとりで気持ちが分かる信頼関係にも気づきました。

話している間もレクの方に視線が向いていたため、レクに興味がないわけではなく疾病による視野の狭さや視力の限界によりできるゲームとできないゲームを選択せざるを得ない状況になっており、本当はやりたいけどできない気持ちなのではないかと感じました。こう思った理由は、本当に嫌なことだったり興味のないことに人は目を向けないと思ったからです。

私は男性の言葉を聞いてとても悔しくなりました。実習前に目の疾病について勉強していましたが、その男性と関わるなかで視力の低下に気づけず、利用者様本人から聞いて理由を知ることになってしまい、男性の思いに気づけなかったからです。そこに気づけていたら、もう少し男性の気持ちに寄り添った接し方ができたかもしれません。

今の私には職員の方のような信頼関係がありませんが、この関係性でできることは何だろうかと考えました。私が考えたことは、疾病に配慮した環境作りです。例えば文字を大きくしたり距離の調整、声かけの工夫などです。『気づく』、これは相手に関心があればできないことです。もっとたくさんの高齢者と関わりたい、そして自分の感性を十分に活かして利用者様の思いに気づける介護福祉士を目指していきたいです。

平成27年度初任段階教員研修

1年次研修（高等学校）「一般研修」に参加して

北海道南茅部高等学校教諭 野田 敬子

1 期日 平成27年12月25日（金）

2 参加人数 113名（家庭科10名）

3 会場 北海道立教育研究所

4 研修内容

（1）説明・協議「チーム貢献力①」

講師：北海道立教育研究所企画・研修部

研究研修主事 小林 成人 先生

内容：①組織の一員として求められる資質・能力

②教職員の服務

（2）説明・協議・演習

「生徒指導力・進路指導力」

講師：北海道立教育研究所研究・相談部

研究研修主事 工藤 淳 先生

研究研修主事 黒宮 茂樹 先生

内容：①生徒指導の在り方

②キャリア教育

（3）説明・協議「学級経営力」

講師：北海道立教育研究所附属理科教育センター

研究研修主事 金本 吉泰 先生

内容：①学年・ホームルーム経営のポイント

②学習・生活規律

③ホームルーム担任業務の在り方

（4）説明・協議

「地域との連携・対応力、チーム貢献力②」

講師：北海道立教育研究所附属情報処理センター

研究研修主事 五十嵐 直樹 先生

内容：①保護者との連携

②地域連携

③学校評価

④学校保健活動

（5）協議「北海道の家庭科教育の現状と課題」

講師：北海道立教育研究所総務部兼企画・研修部

研究研修主事 石川 博史 先生

内容：①協議 課題の交流

②協議 自己の課題認識

（6）説明・協議

「指導と評価の一体化を図った指導の在り方」

講師：北海道立教育研究所総務部兼企画・研修部

研究研修主事 石川 博史 先生

内容：①協議 授業実践の交流

②説明 指導と評価の一体化を図った

指導の在り方

③説明 観点別学習評価

（7）演習「指導と評価の計画」

講師：北海道立教育研究所総務部兼企画・研修部

研究研修主事 石川 博史 先生

内容：①演習 学習指導案の改善

②演習 発表

③演習 まとめ

（8）研修の振り返り

5 おわりに

お忙しい中、先生方にはたくさんのご指導をいただき、ありがとうございました。

今回の研修を通して、新たな知識を身に付けるだけでなく、様々な角度から自己を振り返り、課題を改めて認識することができました。また、初任者同士で情報を交換したり、課題解決に向けて話し合うよい機会となりました。

今後は、日々学び続ける気持ちを大切にするとともに、自己の課題を解決し、生徒に還元できるように努めていきますので、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

平成27年度10年経験者研修

教科別部会【Ⅰ・Ⅱ期】に参加して

北海道置戸高等学校教諭 相馬良美

- 1 期 日 Ⅰ期：平成27年7月30日（木）
～7月31日（金）
Ⅱ期：平成28年1月 5日（火）

2 目 的

教科指導等の教育課題について、個々の能力、適性に応じた研修を行い、指導力の向上を図る。

- 3 場 所 北海道立教育研究所

- 4 参加者 4名

- 5 運営者

北海道立教育研究所 総務部 研究研修主事
石川博史氏

- 6 研修内容

【教科別部会（Ⅰ期）】

○研修1「自己課題の明確化」

自校及び自己の家庭科教育に関する現状と課題について各自発表し、改善策等について協議した。

○研修2「家庭科教育の現状と課題」

石川指導主事より、今後の家庭科教育に期待される力や評価方法の工夫・改善、教科指導の充実に向けてご教示いただいた。

○研修3「ホームプロジェクト・学校家庭クラブ活動の指導の実際」

各校の実践例と実践上の課題などについて発表し、限られた時間の中で効果的にホームプロジェクトや学校家庭クラブを実践する方法の工夫等について協議した。

○研修4・5「目標と指導と評価の一体化を図る指導の在り方1・2」

『高等学校教育課程編成・実施の手引き』を用いて目標と指導と評価の一体化を図った指導の在り方について説明を受け、理解を深めた。

○研修6・7「指導計画の作成1・2」

研修4・5で深めた目標と指導と評価の一体化を意識し、各自が持参した年間学習指導計画

を見直すとともに、反映させた単元の指導計画の作成及び授業期間中に実施する1単位時間の学習指導案の作成を行った。

【教科別部会（Ⅱ期）】

○研修1・2「授業実践の交流1・2」

各自授業期間中に実施した1単位時間分の授業実践についてプレゼンテーションを行った。発表後はその実践事例についてKJ法を用いて工夫されている点や課題について意見を出し合いよりよい授業実践に繋がれるよう協議した。

○研修3「指導計画の検証・改善」

Ⅰ期の研修を経て改めて作成した「単元の指導と評価の計画」及び「学習指導案」について指導と評価の一体化が図られているか検証した。



7 研修を終えて

今回の研修を通して、教員として10年という節目の年に自身のこれまでの教育活動を振り返り、今後の課題を明確にすることができ、大変充実した機会となりました。また、研修を通して改めて家庭科教育の果たす役割の重要性和無限の可能性を知ることとなりました。今後も生徒達が意欲的に学習活動に取り組むことのできる魅力ある授業づくりに努めていきたいと思ひます。このような貴重な機会を与えていただき、ご指導及びご協力いただいた先生方に心より感謝申し上げます。

平成27年度北海道立教育研究所

「家庭、技術・家庭科教育研修講座」を受講して

北海道滝川工業高等学校教諭 渋井 美和子

1 期 日 平成27年7月27日(月)

～28日(火)

2 場 所 北海道立教育研究所

3 参加者 7名

4 講座の内容

(1)「家庭科、技術・家庭科教育の充実」

講義『各校種における家庭科、技術・家庭科教育の改善について』

講師 北海道教育大学教育学部旭川校教授

川 邊 淳 子 氏

21世紀型能力がこれから生きる生徒に求められる力である。21世紀型能力とは①言語や数量、情報などを用いて表現する基礎力②問題解決・発見し、論理的、創造的に深く考える思考力③自分の人生と社会を切り開いて健やかな未来を創る実践力である。

家庭科教育とは当たり前にある「日常性」を追求する教科であり、「なぜ」の問いから、生徒自身が「実感した答え」を導き出す過程が大切であること。小中高の学習内容を再確認し、生活をよりよくまたは創造しようとする実践的な態度の育成をめざす教科・科目であることを学んだ。

(2)生活者としての実践的な態度を育成するための実習の在り方

家庭科、家庭分野において、小学校では家族の一員として自分の成長を理解する、中学校では、社会の一員としてこれからの生活を展望する、高校では社会の構成員として生涯を見通す力を付けるという系統性がある。自己、家庭、社会のつながりを重視し、よりよい生活を送るための実践的な態度を育成する視点から、子どもたちの発達段階を踏まえ、学校段階に応じた体系的な目標や内容に改善を図ることが大切である。

また、言語活動を通して学習事項を指導するこ

とも必要である。①生徒に身に付けさせたい能力や態度(題材の目標)を設定する。②①にふさわしい学習活動(言語活動や体験的な活動等)を取り上げる。③①、②にふさわしい教材や題材などを設定する。という方法をご教示いただいた。

(3)目標と指導と評価の一体化を図る授業

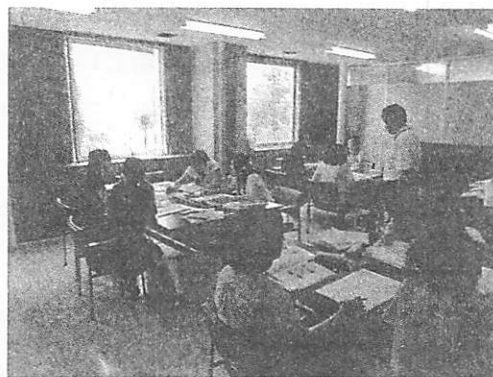
まず目標設定を行い、目標を明確にする。そして授業の最初に目標を提示する。実習では、作らせることが目標ではなく、生徒にどのような技能を身に付けさせるかということが目標となる。

授業後、評価を行う。個に応じた指導や授業改善等に生かすことを目的にした「指導に生かす評価」は毎時間行う。評価結果を活用し改善を行う。

「評定につなげる評価」は4観点の評価規準をもとに生徒の学習活動を総括し行うという、指導と評価の一体化についてご教示いただいた。

(4)演習「生活者としての実践的な態度を育成するための実習を位置付けた指導計画の作成」

題材の目標と評価規準の設定、指導計画を作成し、1単位時間の目標と評価規準、授業展開をグループで作成し、発表した。



5 まとめ

小中高の学習内容は系統性があることを改めて確認し、思考力・判断力・表現力等の育成についての具体的な指導計画や指導法について学ぶことができた。

平成27年度産業・情報技術等指導者養成講座を受講して

北海道釧路湖陵高等学校教諭 相坂 静香

＜期日＞平成27年8月3日（月）～

8月6日（木）

＜研修場所および研修内容＞

■ 8月3日（月）

全国高等学校長協会家庭部会事務局

・講義「家庭科における授業改善の視点」
文部科学省教科調査官 市毛 祐子 氏

・講義「主体的・協働的な学びの充実
～家庭科の学習を通して」
前岐阜県立大垣桜高等学校長 高賀 敦子 氏

・講義「知識構成型ジグソー法による指導」
埼玉県立新座総合技術高等学校教諭
小久保 聡子 氏

・講義「暮らしを楽しむ住まいの工夫」
三井のリフォーム住生活研究所所長
西田 恭子 氏

■ 8月4日（火）

女子栄養大学坂戸校舎

・講義「日本人の食事摂取基準【2015年版】
～見方・使い方」
女子栄養大学教授 石田 裕美 氏

・講義「農林水産物の機能性評価
～新しい表示の導入」
女子栄養大学教授 三浦 理代 氏

・講義「わかりやすい食事献立法
～四群点数法の考え方」
・演習「わかりやすい食事献立法
～四群点数法の使い方」

女子栄養大学准教授 西村 早苗 氏

■ 8月5日（水）

杉野服飾大学

・講義「身体表現と服飾」
杉野服飾大学教授 瀬古 徹 氏

・講義「オートクチュールとプレタポルテの
ジャケット縫製技法について」

杉野服飾大学教授 北折 貴子 氏

杉野服飾大学短期大学部教授 吉川 玲子 氏

・見学「ラグジュアリーブランドのジャケット
～オートクチュールとプレタポルテ」
杉野服飾大学教授 鈴木 美和子 氏

・演習「色彩」
杉野服飾大学准教授 桐山 征士 氏
杉野服飾大学助手 佐治 真理子 氏

・講義「ドレス構成とデジタル教材活用
～教室環境」
杉野服飾大学教授 水野 真由美 氏

■ 8月6日（木）

全国高等学校長協会家庭部会事務局

・講義「現代の子供の生活の現状と課題」
・演習「絵本の選び方と読み聞かせ」
東京都市大学人間科学部児童学科教授
内藤 知美 氏

・講義「若者の消費者トラブルの現状と課題」
東京都消費生活総合センター消費者啓発員
金藤 博子 氏

＜まとめ＞

各講義・演習をとおして、新学習指導要領を意識した授業の確立や協調学習・課題解決学習の効果性、現代の子どもたちが直面する問題について最新の情報を得ることができた。今後、生徒自身が家庭や地域の生活課題を主体的に解決し、生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を身に付けることができるような家庭科教育に取り組んでいく必要性を強く感じた。改めて家庭科教育の大切さと素晴らしさを実感する機会をいただき、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成27年度高等学校産業教育実技研修講座に参加して

北海道砂川高等学校教諭 山本昌枝

1 日程：平成28年1月12日（火）～15（金）

参加者：25名

2 研修内容

第1日目 北翔大学

講義「専門家庭の現状と課題」

北海道立教育研究所研究研修主事 石川 博史 氏

講義「高齢者等に配慮した住宅と安全」

高知県立大学・大学院教授 宇野 浩三 氏

まず家庭科の現状と課題について石川主事よりご講義いただいた。「創造的な能力と実践的な態度を育成する指導力」について、現状と課題を明確化し、授業改善の視点から指導計画を検討・作成し、振り返るという一連の流れの重要性の説明がされた。主体的・協働的な学び、いわゆるアクティブ・ラーニングの要素を取り入れた授業や、授業改善の視点での具体的な評価方法を学ぶことができた。

午後の講義では、生活場面でのユニバーサルデザインや、様々な人の身体特性の事例紹介から、授業で即実践できる情報を得ることができた。

第2日目 北翔大学

演習「布絵本の作成」

北翔大学短期大学部教授 青池 美紀 氏

演習「基礎的な介護技術の習得」

北翔大学生涯スポーツ学部准教授 本間 美幸 氏
フエルトニードルを用い布絵本を作成した。保育はもちろん、被服や食育等、家庭科における幅広い分野について効果的な学習であると感じた。

介護技術演習では体位変換や移乗、食事介助の方法を学んだ。介護が必要な方をサポートする視点だけでなく、介護を受ける側の視点でどのような心遣いや方法で介助すべきか考えさせられた。



第3日目 北翔大学

演習「パネルシアターの作成・発表」

北翔大学短期大学部講師 菜原 桂子 氏

演習「子どもの家庭看護の基礎」

北翔大学短期大学部講師 佐藤恵美子 氏

グループ毎に手遊びを取り入れたパネルシアターを作成した。作業では言語活動の場面が多く、グループワークを取り入れた授業実施の際に、生徒の意欲を引き出すポイントを学ぶことができた。

看護演習では、急を要する場合での身近な道具を用いた看護方法の知識を得ることができた。

第4日目 北翔大学

演習「人形を用いた援助実習」

北翔大学短期大学部講師 菜原 桂子 氏

演習「身近な素材を用いた表現遊び」

北翔大学短期大学部准教授 清水 桂子 氏

演習「子どもの音楽リズムの基礎」

北翔大学短期大学部講師 菜原 桂子 氏

演習「子どもの食の注意点」「布絵本の作成」

北翔大学短期大学部教授 青池 美紀 氏

赤ちゃん人形を用いた授乳やおむつ交換、リトミックやリズム演奏、遊び歌を体験した。生徒の興味を引き出し、授業で即実践できる事例と情報を多く得られた。また、児童福祉に関する仕事に就くために高校時代に準備すべきことや大学生の現場実習でのエピソードが紹介され、事前指導や進路指導に繋がる情報も得ることができた。

3 おわりに

参加者間のグループワークから、言語活動の場での効果的な指導方法や、実習科目の評価の観点などの情報を得られた。分野を横断して取り入れ可能な情報も多く、意義ある研修であった。

最後に、今回の研修を企画していただいた石川研究研修主事をはじめ、各関係の皆様へ感謝とお礼を申し上げます。

平成27年度第15回

福祉に関する教科・科目設置校研究協議会を終えて

主管校 北海道釧路高等学校長 中谷 晋二

《開催期日》

平成27年8月20日(木)～21日(金)

《開催場所》

北海道釧路高等学校

《開会式》

北海道高等学校長協会家庭部会長小松芳幸
(北海道江別高等学校長)の主催者挨拶および
北海道釧路高等学校長中谷晋二(主管校)の挨拶で開会とした。

《講演》

おはなし会芽ブック代表の小柳美和様より、
「高齢者への絵本や紙芝居の読み聞かせの効果とテクニック」と題し、特別養護老人ホームでのボランティア活動をととしての体験やコミュニケーションのポイントなどを講演いただいた。また、高齢者向けの絵本や紙芝居の紹介を頂き、高齢者に声を出してもらい、動いてもらい、笑ってもらいことをテーマに、関わりをもつことの大切さを教えていただいた。

《基調報告》

全国福祉高等学校長協会北海道地区理事である花田祐治北海道置戸高等学校長より、今年度岐阜県で8月6日～7日に開催された全国福祉高等学校長会第21回総会・研究協議会の内容を中心に報告がなされた。

特筆すべきは、確認事項として、①加盟校の減少を考え、校長会の年会費、全国大会の参加費の値上げを行う。②福祉を取り巻く情勢について、国の介護人材確保と高校福祉教育への期待が高い。また、潜在介護福祉士の活用、離職時の届出制度や再就職の促進、平成34年から准介護福祉士の資格が施行される。③介護技術コンテストの実施に当たり、補欠の名称を削除し、アシスタントとして1名置く。④今年度か

ら実施される第1回社会福祉介護福祉検定の検定料の運用について説明があり、今後の検定のあり方としては、履歴書に書けるような検定にしていくよう推進していく。⑤介護福祉士の国家試験受験の義務づけは、全ての養成施設で平成34年から導入される。

《校長会確認事項》

1、北海道地区理事の確認

H27～28年—置戸、H29～30年—江陵、
H31～32年—大妻、H33～34年—置戸

2、研究協議会開催校の確認

H27—釧路、H28—置戸、H29—大妻、
H30—留寿都、H31—江陵 ～以下同じ

3、介護技術コンテストについて

理事より説明。北海道予選を実施する。

《分科会》

1、福祉教科授業内容・教材研究

2、介護検定の導入・介護技術コンテスト

《研究授業》

1、3年次生活支援技術 柏倉早智子

2、1年次社会福祉基礎 平賀 真紀



研究協議会参加者 記念撮影

V 各管内（ブロック）家庭科研究会の一年間の活動状況等

石狩支部

◆実施日 平成 27 年 5 月 19 日(参加者 32 名)

(1) 総会

(2) 実践発表・研究協議

・「ライフケアカラー検定の実施について」

(発表者) 札幌南陵高校 高橋 理緒 教諭

・「青年期～自立をめざして「将来設計」

～人生すごろくの取り組み」

(発表者) 札幌平岸高校 高見 真也 教諭

・「高齢者分野とかかわる

～認知症について知ろう～」

(発表者) 啓北商業高校 野村 良子 教諭

・「本校食物科における取り組み」

(発表者) 文教大明清高校 三浦 聡子 教諭

◆実施日 平成 27 年 10 月 6 日(参加者 26 名)

調理加工体験・研究協議

ホクレン 食と農のふれあいファーム

「くるるの杜」

「自分だけのオリジナルソーセージを作ろう」

◆実施日 平成 28 年 2 月 2 日(参加者 30 名)

講演

(演題)「教材としての折り紙

ー教科の枠を超えてー」

(講師) 札幌東豊高等学校 吉原 怜次 教諭

渡島・檜山地区

◆実施日：平成 27 年 10 月 16 日 (参加者 15 名)

(1) 研究協議 I

・会則改正について

・平成 26 年度決算報告

・平成 27 年度予算案

等

(2) 研究協議 II

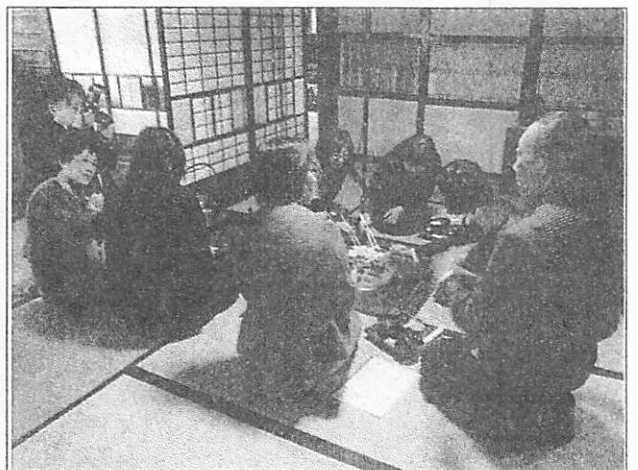
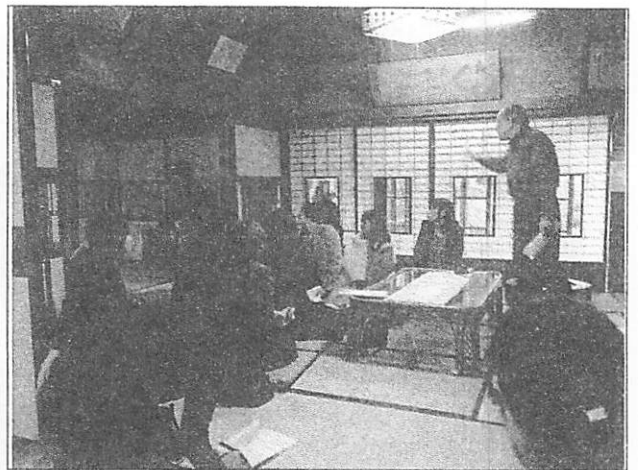
・各校の取り組み

(3) 文化財見学

国登録有形文化財 「熊谷家住宅主屋」

(講師) 熊谷 明子 氏

吉村 富士夫 氏



後志管内

◆実施日 平成 27 年 10 月 14 日 (参加者 13 名)

(1) 総会

- ・役員確認
- ・平成 26 年度事業報告
- ・平成 26 年度会計決算報告
- ・平成 27 年度事業 (案) 等

(2) 研究協議

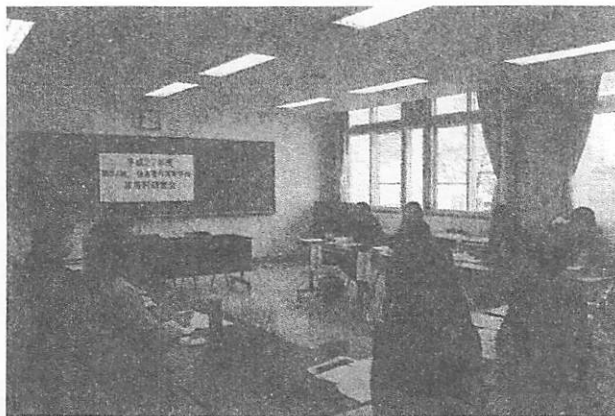
- ・研究会運営費について
- ・全道家庭科研究協議会運営委員の確認
- ・全道家庭科研究協議会司会・提言者の割当

(3) 講義・実技研修

「和菓子制作体験」

(講師) 和菓子処 小樽つくし牧田

牧田 浩司 氏



空知管内

◆実施日 平成 27 年 9 月 30 日 (参加者 14 名)

(1) 総会

- ・平成 26 年度事業報告・会計決算報告
- ・平成 27 年度事業計画案・予算案
- ・平成 27 年度会員・規約の確認
- ・事務局ローテーションの確認
- ・平成 28 年度 研究会の内容について

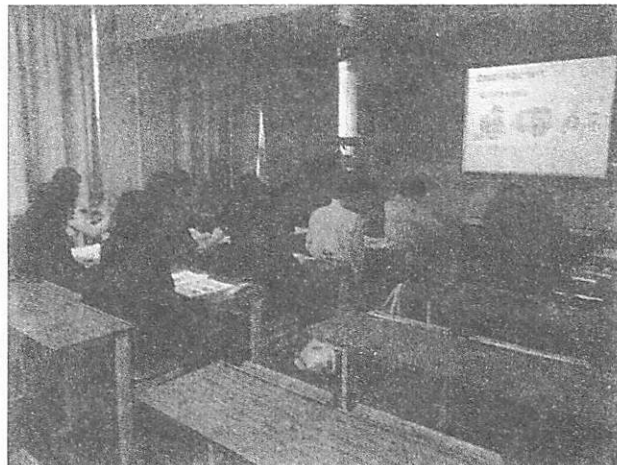
(2) 研究協議

- ・各校の取り組みや授業についての情報交換

(3) 研修 I

「認知症サポーター養成講座」

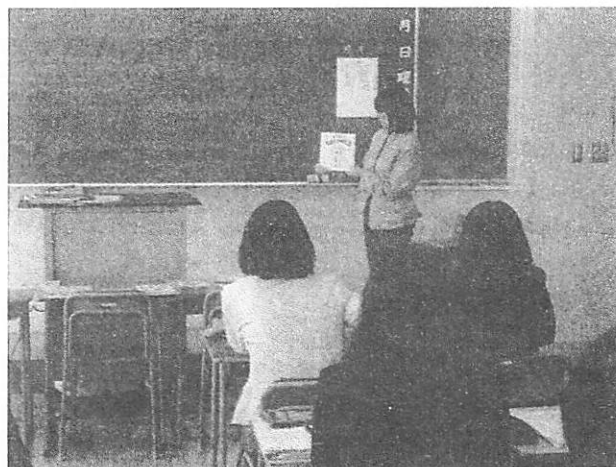
(講師) 奈井江町地域包括支援センター
社会福祉士 高田 尚弘 氏



(4) 研修 II

「絵本読み聞かせ講座」

(講師) 國學院大學北海道短期大学部
特任准教授 松村 澄絵 氏



旭川・名寄地区

◆実施日

平成 27 年 6 月 12 日（参加者 30 名）

（1）総会

- ・平成 26 年度研究協議会報告
- ・平成 26 年度会計決算報告・監査報告
- ・役員改選
- ・平成 27 年度研究協議会計画（案）・予算（案）
- ・上川管内高等学校研究会（仮称）と本研究会の今後のありかたについて

（2）研究協議「平成 27 年度北海道高等学校家庭科教育研究協議会での提言に向けて」

（3）講演

（演題）「認知症サポーター養成講座」

（講師）グループホームぞう代表取締役
介護支援専門員 西塔 昭代 氏

◆実施日 平成 27 年 8 月 7 日（参加者 24 名）

（1）実習

「士別の地場産品を使った調理及び試食会」

（講師）士別イン翠月

取締役料理長 高橋 和敏 氏

（2）実習

「羊毛のつむぎ体験」

（講師）めん羊工芸館「くるるん」

代表 辰巳 恵 氏

◆実施日 平成 28 年 3 月 17 日

（1）役員会

宗谷管内

※隔年度開催のため、今年度は実施なし

留萌管内

◆実施日

平成 27 年 10 月 28 日（水）（参加者 5 名）

（1）総会

- ・平成 26 年度事業報告
- ・平成 26 年度会計報告
- ・平成 26 年度監査報告
- ・平成 27 年度事業計画（案）
- ・平成 27 年度予算（案）
- ・平成 27 年度役員（案）
- ・規約の改正について

（2）研究授業

・授業内容・・・調理実習

「お蕎麦の打ち方、茹で方」

そば打ち講師 三浦 隆 氏

山本 昭博 氏

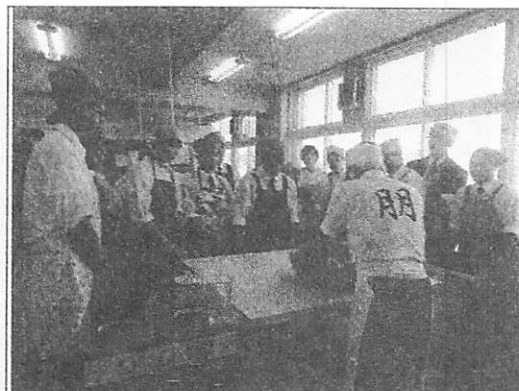
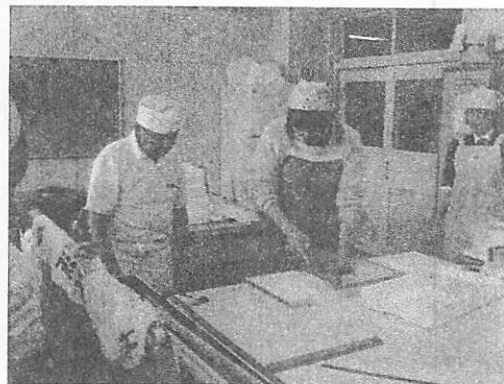
（3）研究協議 I

・研究授業について

（4）研究協議 II

・各校の取組と課題

研究授業の様子



オホーツク管内

◆実施日

平成 27 年 6 月 2 日 (火) (参加者 25 名)

(1) 総会

- ・平成 26 年度事業報告及び決算報告
- ・平成 26 年度監査報告
- ・平成 27 年度事業及び予算審議
- ・事務局校、当番校の確認
- ・その他

(2) 実技講習

「手作りソーセージ・ジャム」

(講師) 細川 満範 教諭

阿部 俊孝 教諭

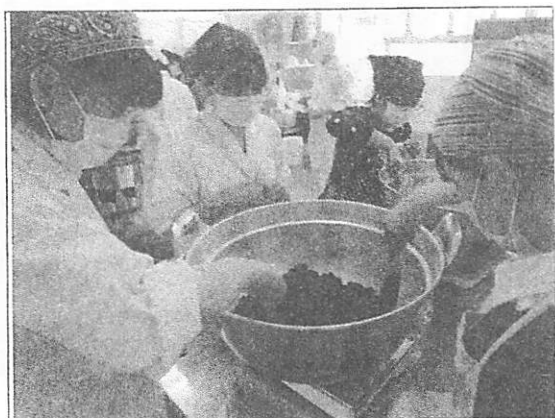
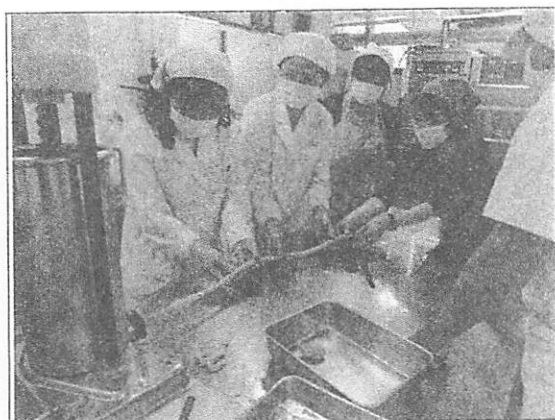
齋藤 嘉高 教諭

能祖 一広 実習主幹

(3) 研究協議 (情報交換)

「食生活分野について」

※特に調理実習や実験の取り組みについて協議し、授業に役立てる。



釧根地区

◆実施日

平成 27 年 10 月 22 日 (参加者 16 名)

(1) 総会

- ・平成 26 年度事業報告
- ・平成 26 年度決算報告
- ・平成 27 年度事業計画 (案) について
- ・平成 28 年度事務局、当番校について

等

(2) 体験実習

「標茶高校の製品を美味しく加工」

(講師) 北海道標茶高等学校

大森 綾子 教諭

(講師補助) 北海道標茶高等学校

増田 昌宏 教諭

(実習内容)

* 標茶高校の加工品 (ウインナー、ベーコン、ハム) を使ったのパン作り



(3) 情報交換会及び報告会



十勝管内

【全体会】

◆実施日 平成 27 年 6 月 2 日（参加者 22 名）

（1）総会

- ・平成 26 年度事業報告及び決算報告
- ・平成 26 年度会計監査報告
- ・平成 27 年度会員名簿確認

等

（2）研究協議会

「つながり（小中高、地域、家庭、社会）を重視した家庭科教育のあり方」

◆実施日 平成 27 年 11 月 11 日（参加者 24 名）

（1）講演「子どもたちの食を考える」

（講師）置戸町 食のアドバイザー

佐々木 十美 氏

（2）施設見学

帯広市給食センター

（講師）主幹 石田 欣也 氏

（3）研究協議

「つながり（小中高、地域、家庭、社会）を重視した家庭科教育のあり方」

◆実施日 平成 28 年 2 月 4 日（参加者 18 名）

（1）研究協議

「つながり（小中高、地域、家庭、社会）を重視した家庭科教育のあり方」

（2）臨時総会

次年度からの研究会のあり方変更に伴う確認ならびに決定

【ブロック研究協議会】

Aブロック

◆実施日 平成 27 年 10 月 7 日（参加者 7 名）

（1）研究協議

「つながり（小中高、地域、家庭、社会）を重視した家庭科教育のあり方」

Bブロック

◆実施日 平成 27 年 10 月 7 日（参加者 6 名）

（1）研究協議

「アクティブラーニングの実践と評価の工夫」

◆実施日 平成 27 年 11 月 11 日（参加者 5 名）

（1）研究協議

「地域と連携した家庭科教育について」

Cブロック

◆実施日 平成 27 年 7 月 31 日（参加者 8 名）

（1）研究協議

「つながりを重視した家庭科教材・実践報告」

（2）実験・講演

実験「清涼飲料水の成分実験、着色料の抽出実験」

講演「消費者教育について」

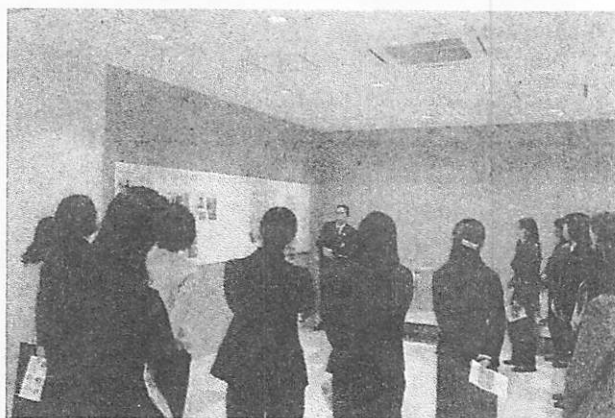
（講師）北海道消費者協会

主幹 道高 真理 氏

◆実施日 平成 27 年 11 月 11 日（参加者 6 名）

（1）研究協議

「つながりを重視した家庭科教材・実践報告」



胆振管内

◆実施日 平成 27 年 10 月 20 日（参加者 12 名）

（1）総会

- ・平成 26 年度事業報告・決算報告
- ・平成 27 年度事業(案)
- ・平成 27 年予算(案)
- ・会則・申し合わせ事項の改訂について
- ・本会の運営グループの編成について
- ・全道教育研究協議会の運営委員等について

（2）講演会

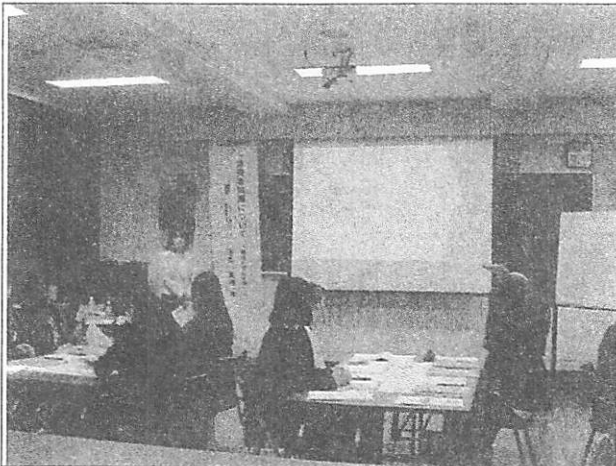
「消費者問題について～最近の相談事例から」

（講師） 北海道消費者協会

主幹 道高 真理 氏

（3）交流会

「消費生活分野の指導について」



日高管内

◆実施日 平成 27 年 11 月 13 日（参加者 7 名）

（1）講演

（演題）「認知症サポーター養成講座の
持ち方について」

（講師） 新ひだか町地域包括支援センター
主任社会福祉士 戸子台 弘一 氏

（2）交流会

各校の授業実践と工夫・課題について
・管内事務局校及び全道家庭科教育研究
協議会の提言者等の決め方について

各管内（ブロック）の家庭科研究会事務局・加盟校数一覧 [平成27年度]

管内等		名称	運営母体	事務局（年度）		実施回数	①加入校数（管内数） ②加入教員数（管内数）
1	石狩管内	北海道高等学校教育研究会石狩地区支部家庭部会	北海道高等学校教育研究会石狩地区支部家庭部会	H27	旭丘高校	3回/年	①36校/69校 ②50名/127名
				H28	旭丘高校		
				H29	（未定）		
				H30	（未定）		
2	渡島・檜山地区	渡島・檜山地区高等学校家庭科部会	渡島・檜山地区高等学校教育研究会（地区校長会組織）	H27	函館白百合学園	1回/年	①30校/30校 ②35名/35名
				H28	函館水産高校		
				H29	函館中部高校		
				H30	函館西高校		
3	後志管内	後志管内高等学校家庭科研究会	後志管内高等学校教育推進委員会	H27	小樽商業高校	1回/年	①17校/20校 ②20名/23名
				H28	倶知安高校		
				H29	（未定）		
				H30	（未定）		
4	空知管内	空知管内高等学校家庭科研究会	空知高等学校家庭科教育研究会（管内校長会組織）	H27	奈井江商業高校	1回/年	①26校（26校） （公立+私立+特支） ②68名/68名
				H28	月形高校		
				H29	深川東高校		
				H30	南幌高校		
5	上川・名寄地区	上川地区高等学校家庭科教員研究会	上川管内高等学校教育研究会教務部会（地区校長会組織）	H27	旭川東高校	2回/年	①25校（31校） （公立+私立） ②46名/50名
				H28	鷹栖高校		
				H29	旭川南高校		
				H30	東川高校		
6	留萌管内	留萌管内高等学校家庭科教育研究協議会	留萌管内高等学校家庭科教育研究協議会	H27	天塩高校	1回/年	①4校（7校） ②4名（4名）
				H28	天塩高校		
				H29	留萌高校		
				H30	留萌高校		
7	宗谷管内	宗谷管内高等学校教育研究会家庭部会研究協議会	宗谷管内高等学校教育研究会（管内校長会組織）	H27		1回/2年	①7校/7校 ②7名/7名
				H28	利尻高校		
				H29			
				H30	（未定）		
8	オホーツク管内	オホーツク管内高等学校家庭科教育研究会	オホーツク管内高等学校家庭科教育研究会	H27	東藻琴高校	1回/年	①25校/26校 （公立+私立） ②28名/30名
				H28	北見緑陵高校		
				H29	訓子府高校		
				H30	雄武高校		
9	釧根地区	釧根地区高等学校家庭科教育研究会	釧根地区高等学校教育研究会（管内校長会組織）	H27	標茶高校	1回/年	①21校/21校 （公立+私立+特支） ②25名/25名
				H28	羅臼高校		
				H29	釧路明輝高校		
				H30	弟子屈高校		
10	十勝管内	十勝管内高等学校家庭科研究会	北海道高等学校校長協会十勝支部	H27	帯広北高校	3回/年	①23校/24校 ②42名/43名
				H28	清水高校		
				H29	上士幌高校		
				H30	帯広工業高校		
11	胆振管内	胆振管内高等学校教育研究会家庭部会	胆振管内高等学校教育研究会家庭部会（管内校長会組織）	H27	伊達緑丘高校	1回/年	①22校/27校 ②31名/38名
				H28	苫小牧東高校		
				H29	室蘭清水丘高校		
				H30	（未定）		
12	日高管内	日高管内高等学校教育研究会家庭部会	日高管内高等学校教育研究会（管内校長会組織）	H27	静内高校	1回/年	①6校/7校 ②8名/8名
				H28	静内農業高校		
				H29	浦河高校		
				H30	平取高校		

特 別 寄 稿

「生きる力」育む家庭科教育

北海道当別高等学校長 杉 本 祐 子

当別高校に赴任して2年半、教職最後の学校として忘れられない、そして私自身、大変貴重な経験を積ませていただいた思い出の学校となりました。

当別高校は、普通科、園芸デザイン科、家政科の3学科を有する学校として、地域や生徒の夢の実現をめざし、学びと豊かな心の育成に取り組む学校です。

これまで、北海道医療大学による福祉学習、スウェーデンレクサンド高校との姉妹校相互交流、ボランティア活動や地域町内等での花壇作り、高齢者や保育所の園児を招いての苗植えやピザ作りなど、地域の方々のご支援ご協力を賜りながら「生きる力」の向上を目標とした教育活動に取り組んでまいりました。特に、農業クラブや家庭クラブの活動においては、地域の温かいご支援のもと、その繋がりを密にする中でその目的である、家族や地域社会との質の高い創意工夫による教育実践がなされたものと思います。

さて、本校は、昨年7月30日、31日に開催となりました第63回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会北海道大会の事務局校を仰せつかり、成功裏に無事終了することができました。

これもひとえに、全国の家庭クラブ加盟校はもとより、北海道家庭クラブ連盟、全道各高等学校のご協力の賜と心より感謝申し上げます。北海道大会実行委員会は、スローガン「北の大地で育もう 未来へひろがる 笑顔の輪」の下、おもてなしの心でお迎えしようと準備を進めて参りましたが、何より生徒実行委員会の生徒た

ちクラブ員がこの大会を作り上げることで大きく成長してきたことに驚かされました。家庭クラブ活動の大きな意味をそこに見いだせたこと、生徒たちの家庭科を通しての学びが「生きる力」となって表れていることに感動いたしました。

今、アクティブラーニング（以下 AL）が教育現場における大きな課題として、各方面で研修が行われております。最近の研修会においては、AL とは「主体的・能動的で双方向性のある、自立のかつ協同的学び」とあり、「協同的な学習、課題研究、ディスカッション、プレゼンテーション等」が、これから求められる授業である（H2 高教研）という。しかし、家庭科教育とりわけ家庭クラブの活動においては、その活動の柱である『「研究活動」「ボランティア活動」「交流活動」を通して、地域社会の生活改善を推進する』とあるように、まさにその旨に則った教育が、綿々と続けられてきたものと理解しております。課題研究に取り組む生徒たちが、それぞれの課題について研究成果を発表し研鑽しあうことは、AL のそれと重なるものであり、社会の発展に貢献できる人材を育成するうえで極めて大きな意義があり、その意味で、改めて家庭科教育の進むべき方向性の正しさを痛感している次第です。

最後になりますが、教職最後の学校で家庭科という新たな世界に触れる機会を与えていただいたこと、この充実感を味わわせていただいたことに感謝するとともに、家庭部会の益々の発展を心より祈念申し上げお礼といたします。

家庭部会事務局等を担当して ～家庭科教育のすばらしさを再認識～

北海道江別高等高等学校教頭 岩瀬張 幸 子

平成26・27年度江別高校に勤務し、家庭科教育に関わる事務局等を担当させて頂いた。業務をとおして、改めて家庭科教育の重要さと家庭科教員の交流の大切さを体感することができた。事業の概要を次に紹介する。

1 北海道高等学校長協会家庭部会

当部会は、任意加盟となっており今年度は190校の高校が加盟している。部会の主な活動内容等は、次のとおりである。

①北海道高等学校家庭科教育研究協議会、いわゆる「夏の研究協議会」は、運営委員会形式をとって8年目を迎える。会長校は洞爺高校。

1日目の午前には3本の研究発表、午後は3つの分科会で研究協議を行う。2日目は、5つ程度のセミナーを設け、体験等を含む研修内容で年度ごとに領域の工夫をしており好評である。

②家庭部会意見体験発表大会は、平成27年度に第3回目を迎える。全道の高等学校で家庭・福祉を学んでいる生徒が、日頃の学習で学んだことの成果について、意見や体験を発表するとともに、生徒相互の交流をとおして、「生きる力」を育み、家庭・福祉教育の充実を図ることを目的に新設したものである。発表は、補助機材を使用せずに行うことと規定している。発表生徒は、限られた時間の中で伝えたいことを簡潔に表現力豊かに発表しており、私はその姿に感動した。

③産業教育振興会家庭部会では、専門高校等の生徒による学習成果の祭典「さんフェア」がある。現在は、3年に1回の開催で、2014年は札幌駅前通地下歩行者空間で行い盛会のもと終了した。生徒の主体性が発揮されるととても良い教

育活動である。次回は2017年に開催する。

④北海道家庭科技術検定評価研究協議会では、検定員養成講座を「夏の研究協議会」の時期に併せて実施している。平成27・28年度事務局は、名寄産業高校が担当している。生徒に基礎・基本の技術等を身につけさせるために、家庭科技術検定の活用は有効と考える。

⑤福祉に関する教科・科目設置校研究協議会は、平成27・28年度事務局を置戸高校に置き研修の場を設けている。

2 北海道高等学校教育研究会家庭部会

高教研いわゆる「冬の研究協議会」である。平成27・28年度は、札幌新川高校が事務局を担い、石狩管内の担当ブロック運営委員の先生方の創意工夫のもとに講演、研究発表・協議、交流等が行われている。限られた時間の中で、内容の濃い研修を行っている。

3 北海道高等学校家庭クラブ連盟

日頃の活動の成果を発表しあう大会や情報交換、生徒交流ができるように企画・運営をする組織で平成27年度は江別高校が事務局を担当した。家庭科の学習を実際の生活と結びつけ、課題解決学習を行うホームプロジェクトや学校家庭クラブ活動は、連盟の事業を活用すると効果的である。平成27年度第64回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会北海道大会は、当別高校が事務局を担い札幌で開催、盛会のもと終えた。生徒による進行は立派で、全国の参加者に絶賛された。緒先生方のご指導の賜である。

家庭科教育のすばらしさを再認識し、教員生活38年間にピリオドを打つことができた。お世話になった全ての皆様にお礼申し上げます。

あ と が き

～家庭科教育の道しるべとして～

皆様のおかげをもちまして、北海道高等学校長協会家庭部会誌「2016 こです HOKKAIDO」が、完成しました。

お忙しい中、原稿を執筆してくださいました関係各位の皆様方に心より感謝申し上げます。本当に有難うございました。

今年度（平成27年度）の「こです HOKKAIDO」の編集は、本校が3年連続の担当となりました。閉校を迎える本校は教員数が減少したのに加え、閉校関連事業等の業務も加わりましたが、家庭科の秋田貴子教諭が主となり先生方の手も借りながら編集作業を終えることができました。

さて、本部会誌が「こです」という名称になったのは、平成6年（1994年）3月の発行からでした。担当したのは「北海道洞爺高等学校」第十六代校長 伊藤 義雄 校長でした。その編集後記には、『（前略）小さな村の小さな学校で、この冊子の編集の大役を仰せつかり多くの人たちのご指導・ご協力でなんとか終えることができました。洞爺高校では科長の影山教諭を中心に、編集の仕事に携わった一人一人が初体験で、大変よい勉強になったと感謝の気持ちがひしひしと私に伝わってきます。（中略）家庭部会が推進する各種研究の成果を、学校家庭クラブ、家庭科技術検定、高教研家庭部会、各種研究会や研修講座などの立場からまとめ、次年度以降の道しるべになれば幸いです。』と記されています。

「こです HOKKAIDO」が、洞爺村立北海道洞爺高等学校の担当で始まり、今年度末で閉校を迎える洞爺湖町立北海道洞爺高等学校が、最後の家庭部会の仕事として担ったという事実が何とも不思議でなりません。

改めて、関係各位の皆様方へ「おかげさまでした！」と「有難うございました！」の言葉を添えて、多大なるご協力に感謝申し上げる次第です。

「2016 こです HOKKAIDO」が、これまでと変わらず『家庭科教育の道しるべ』となって、多くの高等学校で活用していただきましたら幸いです。

最後となりましたが、平成28年3月末をもってご勇退されます 副部会長（当別高校）杉本 祐子 校長先生、幹事（札幌南陵高校）福本 直人 校長先生、後志地区代表委員（倶知安高校）河村 英二 校長先生、そして事務局（江別高校）岩瀬張 幸子 教頭先生、長い間、家庭科教育及び福祉教育を推進し、校長協会家庭部会の発展にご尽力いただきまして、誠に有難うございました。

平成28年3月31日

「こです HOKKAIDO」担当校
北海道洞爺高等学校長 佐々木 淑 子

北海道高等学校長協会家庭部会　こですHOKKAIDO

発行日　平成２８年３月３１日
発　行　北海道高等学校長協会家庭部会事務局
（北海道江別高等学校）
編　集　北海道洞爺高等学校
印刷所　社会福祉法人　共有会　札幌福祉印刷
札幌市西区西町北１５丁目５番７号
TEL（０１１）６６７－７７７１
FAX（０１１）６６７－９７５０

こ で す H O K K A I D O と は

Collected papers 集 録

Domestic Science 家庭科

Studies 研 究

家庭部会で研修して、それをまとめあげる
こーして仕上げることを、でかすと解釈し
北海道は、「こーですヨ」という意味です